

第1章

支援の会 結成と歩み

1

多芸正之

被災「障害」児・者支援の会

1995年1月17日早朝に起こった阪神・淡路大震災後、新聞・テレビ等を通して刻々と報道される被害状況を知らされ、私は被災地の障害をもつ人たちのことを思わざるをえなかった。実際、被災地に住んでいる知人の障害者に電話をかけても通じない。行政の障害福祉課に尋ねても、被災された職員が多くて状況はまったくつかめない、との返事。いてもたってもおれなくなって、日頃から京都の地で障害者と地域で共に生きることを願ってさまざまな働きを続けておられる親しい人たちに、何か被災された「障害」児・者への支援活動ができないだろうか、と相談をもちかけた。

その日、1月20日、即刻、「被災『障害』児・者支援の会」が結成された。最終的には18の賛同団体がつらなり、被災「障

害」児・者への支援活動を展開するという特色あるボランティア団体が誕生したのである。

早速めぐみホームに事務局を置き、活動を開始。まず被災地での「障害」児・者に対する情報の収集と、また同時に、被災された障害者への情報の発信を開始した。事務局にはファックスを通して頻繁に多くの障害者を支援する団体から情報が寄せられてきた。しかし、それらの情報は障害者を支援する団体の活動報告等が多く、被災された「障害」児・者に直接関係する情報は極めて少なく、又、断片的なものであった。

震災前、地域で生きておられた障害者の情報と実態がつかめない。そこで、「支援の会」としては、被災地に拠点を置いて、避難所や障害者の家庭を回って直接に被災

された障害者と出会い、彼らが何を求めておられるのかを聞くことから始めることになった。

「支援の会」の活動エリアを灘区、東灘区と定める。被災地での活動責任者として平田 義愛隣館ディサービスセンター所長があたってくださることとなる。被災地の現地拠点として神戸学生青年センターの一室をお借りすることができた。以後、4月からは雲内教会、6月からは兵庫教区クリスチャンセンターに拠点を移しながら、支援活動は継続された。2～3月は常時10人から20名のボランティアが泊り込み、4月以降も5～10人による支援活動を展開することができた。ボランティアへの直接的な連絡と保険手続き、「支援の会」からの情報発信は京都市民福祉センターが担当してくださった。

震災支援のボランティア活動というと被災地の活動ばかりが注目されるが、「支援の会」の支援活動は被災地でのボランティア活動だけにとどまらず、3000人を超える人たちが、自らが出来ることは何だろうと問いながら、さまざまな方法でもって、いろんな場所で支援活動を展開してくださった。

京都においては、「支援の会」結成当日から、被災された障害者の京都における一時避難の受け入れが開始された。一時避難の場所提供のリストアップは愛隣館ディサ

ービスセンターが担当してくださり、一時避難者のコーディネートはほっとハウスが担ってくださった。

活動を継続していくための資金は、震災直後から10数回に及ぶ街頭募金となされ、寒風の中に立ってくださった人たちは300人を超えた。幼いこどもたち、さまざまな障害をもつ人たち、又その家族、「私たちは神戸へ行けないがせめて・・・」と大きな声で街行く人たちに募金を呼びかけてくださった。さらに、全国各地から多くの人たちの心温まるお金が寄せられ、総額は2000万円を超えた。

「支援の会」のボランティア活動は京都を中心に地域で活動を続ける団体やグループが被災地で支援活動を行なうことであり、支援活動を開始したその時から、私たちは必ずいつか撤退しなければならないという負い目をもっていた。支援活動が活発になり、関わっていく支援ケースが多くなればなるほどに、私たちは責任が問われる思いを常に深めていった。「支援の会」としてのボランティア活動の基本方針、具体的ケースについての対応方法まで、30回に及ぶ事務局会議で話し合われた。事務局会議においてはしばしば深夜に及ぶ議論が繰り返された。生命に関わる支援活動とは、行政の責任においてなされなければならない問題のみきわめ、地域で自立して生きられる障害者への援助がどうあるべきか、等々、

さまざまな意見を突き合わせながら、「支援の会」の活動方針は事務局会議で熱心に話し合われた。

1995年秋以来、「支援の会」の活動を引き継いでくださる神戸におけるボランティア団体として、「被災『障害』児・者支援の会兵庫」の結成準備が始められ、1996年5月より活動を開始して下さる

運びとなった。今後、「支援の会兵庫」の働きを応援するとともに、支援活動を通して示された課題として、京都の地で障害をもつ人たちと共に地域づくりに取り組んでいきたく願っている。



被災「障害」児・者事務局会議まとめ

第1回 1995年1月20日

めぐみホーム

- ・被災「障害」児・者支援の会結成。事務局はめぐみホームが担当、代表に多芸正之があたる。会の目的は被災された障害児、障害者、そして、その家族の人たちに対する支援。
- ・具体的取り組みとして①情報の収集 ②募金活動 ③人材派遣 ④京都での一時避難受け入れ ⑤物資支援
- ・街頭募金の開始、人材派遣のためにはボランティアの募集を始める。
- ・23日被災地へ2名派遣。
- ・会議中に大阪精神人権センターより電話が入り、今神戸より京都で一時避難を求める精神障害者が向かっているので受け入れて欲しいとのこと。西小倉めぐみ教会に泊まってもらうこととする。

第2回 1月24日めぐみホーム

◆情報の収集と提供

- ・ニューカトリア会 京都での一時避難を要望。
- ・六甲デイケアセンター ボランティアが疲労、

代わりにボランティアを要請。

- ・すずかけ共同作業所 数人の障害者が避難中。物資はある。西宮以西の被災作業所と連絡を取ろうとしているが音信取れず。
- ・すばる舎 3つのうち2つの作業所が崩壊。パン工場の機械大破。
- ・全障連 現地の情報収集と避難場所の確保、ボランティア派遣。
- ・オズの箱 情報の収集と発信。
- ・えーぜっと会 全障連と同調。
- ・たんぼぼの家 「阪神大震災被災障害者救援プロジェクト」を結成し、大阪YMCAの「応援する市民の会」と連携。えーぜっと会と連絡を取り合い被災者受け入れ準備可。
- ・京都JCIL 独自の資料作成。
- ・相楽西部障害者福祉連絡協議会
1/19 から現地へ。神戸県庁で入所施設の無事は確認。京都府庁障害福祉課へ被災者受け入れ要請。受け入れ先としてアパートがある。(4/4.5/4キッチン)
- ・修光学園 情報を流してほしい。被災地からボランティアの要請を受けている。
- ・乙訓の里 大阪の障害者解放センターの情報を得た。先日職員が緊急物資を運ぶ。
- ・お誕生日ありがとう運動 YWCAの動きと連携。物資調達の手伝いをしている。

- ・障害者災害救援センター(共作連) こちらの
情報提供。
- ・大阪外大学生ボランティアグループ 10 人
単位で動ける。介護経験なし。手弁当、日帰
り。
- ・宇治市社協 500 人避難されている西宮市
社協の手伝い。
- ・京都ボランティア協会 大阪YMCAのバック
アップ。応援する市民の会で230人のボラ
ンティア登録をしたがコーディネートできてい
ない。
- ・京都府障害福祉課 現地の収容施設の無事
は確認済み。京都府下の各施設での受け入
れ決定。
- ・山科学園 きょうの事務局のことを会議に図
り体制を組む。募金活動などには積極的に参
加したい。
- ・宇治明るい社会づくり運動 今日の会議の
情報をもちかえって検討する。
- ・朝日新聞 郵便振替の番号が決まり次第記
事として載せる。
- ・京都新聞 会の結成は記事として載せる。
- ・医療法人大山医院きこえのへや 募金、補
聴器・補聴器用電池の協力。
- ◆情報収集はめぐみホームで。情報発信は京
都市民福祉センター経由で各団体へ。
- ◆チラシの賛同団体(個人)の追加。乙訓の里、
乙訓の里親の会、医療法人大山医院き
こえのへや、誕生日ありがとう運動。
- ◆街頭募金は1/28(4時～)、1/29(2時

～) 大手筋商店街で。2/5(5時半～) 四条
大宮で。乙訓の里は長岡京近辺で実施を検
討する。各団体がそれぞれの地域で街頭募
金をした場合、事務局へ報告する。

◆募金の緊急的な事柄での使い方は、事務
局と平田、中西、銅銀で協議して対応する
ことを了承。

◆一時避難場所の受け入れは短期を基本と
して受け入れていく。

第3回 2月3日めぐみホーム

◆組織(賛同団体)

- ・第二回事務局会議以後、賛同団体に加入し
ていただいた団体。
- ・日本基督教団京都教区障害者問題特設委
員会、京都自閉症協会、榎の会、アクセス京
都、向島あそぼう会

◆募金活動

- ・28日(土) 4時 大手筋商店街参加者35名
募金額¥229,116円
- ・28日(土) 3時
イズミヤ長岡京店参加者18名
募金額¥82,939円
- ・29日(日) 2時 大手筋商店街参加者37名
募金額¥86,566円
- ・2日(木) 5時30分 四条大宮 参加者
募金額¥30,695円

◆物資支援

・豊能障害者労働センターへ タオル・下着・
トイレットペーパー・衣類

・すばる舎(西宮市)へ 食料品 牛肉20kg・
鶏肉30kg・きゅうり5ケース・キャベツ5ケー
ス・白菜5ケース・トマト9ケース・人参3ケー
ス・玉葱5ケース・みりん20ℓ・濃口醤油18
ℓ・薄口醤油20ℓ・味噌20kg

◆人的支援

・すばる舎へ 7人

◆情報収集 次の所から発信された情報が届
いている。

・障害者問題を考える兵庫県連絡会議(兵庫
県南部地震情報)

・阪神大震災被災障害者救援プロジェクト
(たんぼぼの家)

神戸在住の患者会員の所在地確認

・応援する市民の会

・阪神障害者解放センター(被災地情報)

・阪神大震災被災弱者救援センター(弱者救
援ニュース)

・(社)日本てんかん協会・阪神大震災情報

・全障連全国事務局ニュース

・聴覚言語障害者総合福祉施設

・障害者救援本部

・全国社会福祉協議会・企画部

・京都府障害厚生施設協議会

・大阪精神人権センター

・視覚障害者の情報としては神戸のKさんと
関西盲人ホームのYさんより。

第4回 2月9日めぐみホーム

◆組織(賛同団体)

第三回事務局会議以後、賛同団体に加入し
ていただいた団体。

・海外教育協力隊

◆募金活動

・5日(日)4時 四条河原町四角

参加者約70名募金額¥335,155円

◆物資支援

・朝日ボランティア基地へ車椅子(中古)5台
を送る。

・すばる舎へ文具

◆人的支援 すばる舎

◆情報収集

・支援の会ニュースNo.1を発行(1,000部
印刷)

・各賛同団体で配る。個人・団体に募金をし
てくださった方で事務局が把握している所
には発送済み。

◆2/11入浴介護支援について

・大阪の応援センターの要請として障害者の
男性15名、女性15名をお風呂へ入れるた
めの介護ボランティアを募っているとのこと
である。支援の会として募集して応援する。

◆神戸の取り組みについて

【現在までの報告】

・7日と9日の調査の報告について

・平田・藤原・川上揚・川端さんが神戸へ行っ

た。

・灘区・東灘区の福祉事務所等へ行き資料の提供を求める。

・神戸学生青年センター、並びに六甲ディケアセンター、ニューカトリア会とも連絡を取り合って活動する。また、すでに被災地での調査を始めている、たんぼぼの家とも情報交換をしていく必要がある。

【今後の取り組み方について】

【人的支援の展望】

・現地の活動の代表責任者には平田 義さんになっていただく。

・13日より林、14日より矢崎、15日より新潟の敬和学園の学生の人たち3～4名が来るとのことである。

・ボランティアの人たちが事務局から現地までの交通費・現地での食事代は支援の会が負担する。

・ボランティアに入ってもらう人には支援の会が費用を負担してボランティア保険に入ってもらう。手続きは京都市民福祉センターが当たる。

・13日事務局の多芸・広野・川上信が物資搬入のためトラックを借りて学生センターへ行く。

・現在バイクは提供していただいた3台と川上兄弟の2台の計5台となった。自転車は西小倉めぐみ教会の1台。

・入浴介護サービスの実施のためリフト付き車が必要なので、京都ボランティア協会からあ

たってもらう。

【物的準備】

・NCC（日本キリスト教協議会）より携帯電話を開設する費用を出していただいで確保した。 番号030-27-36689

◆京都での一時避難活動について

・10日～11日 ニューカトリア会会員2名が避難される。西小倉めぐみ教会で受け入れる。

・上田啓悟さん13日より25日まで一時避難。

第5回 2月17日めぐみホーム

◆物的支援

・神戸学生青年センターへ バイク2台
・六甲ディケアセンターへ バイク1台

◆募金活動について

・2月19日（日）午後3時より6時まで四条河原町高島屋前にて実施する。

・KBSで放送してもらえないか、市民センターの方で検討してもらう。

・ボランティアをしたい、と申し出てくださいている人たちに募金活動への参加を要請する。担当は京都市民福祉センター。

◆すばる舎への支援について

・人的支援については継続していく。

・物資支援もすばる舎から要請があることには継続して支援する。

◆神戸の取り組みについて

- ・10名位が毎日入って活動している。一時避難場所とか在宅の家庭を訪ねてチラシ配布。
- ・具体的なさまざまなケースが出てきている。
- ・かなり難しいケースもあって毎日活動が終わった後みんなでミーティングして対応を協議している。
- ・毎日の活動記録とともに個々人のケースの記録も残している。
- ・たんぼぼの家が回られたところから入浴サービスの希望者がおられるので受けてほしい、という要請がある。
- ・えんぴつの家からはディサービスを開始するので障害者の送り迎えを手伝って欲しいという要請もある。
- ・現地で活動している他の団体とのつながりができてきている。
- ・車が必要となってきている。
- ・藤原さんが2月末で北海道に帰られた後、藤原さんが果たしてくれている役割を誰ができるか心配である。
- ・今後はいつまで神戸学生青年センターが部屋を貸していただけるのか、平田に交渉してもらおう。
- ・日本基督教団対策本部より電話とファックスを取り付け、使用料も含めて援助するとの申し出があり手続き中である。

◆京都での一時避難活動について

- ・上田啓悟さんが京都におられる時の介護スケジュールは川上信が担当してたててもらおう。

第6回 2月24日めぐみホーム

- ◆組織 タンタンおもちゃライブラリーが賛同団体に加わってくださった。

◆募金活動について

- ・次回の街頭募金は3月12日(日)午後3時～5時、四条河原町高島屋前にて実施する。

◆京都での一時避難

- ・ニューカトリア会のメンバーが週1～2日、西小倉めぐみ教会に泊まれる。

◆神戸の取り組みについて

- 灘区・東灘区の避難場所はほぼ八割回った。さまざまなケースが出てきているが、入浴サービスを希望される人には車で送迎して応えている。
- ・愛生園よりリフト付きバスを借りて、上田さんが回られるのに使っている。
- ・27日より京都の運転ボランティア友の会より一台リフト付きバスを借りる。運転手が足りないので、京都ボランティア協会と阪神大震災支援センター(宇治)に募ってもらう。神戸の新聞にも「運転手付き移動入浴車募集」の依頼をする。
- ・えんぴつの家は週二回、ガイドヘルパーを行っている。

・日本基督教団対策本部が費用を出して下さって電話・ファックスが28日につくこととなっている。番号は078-856-0700。

第7回 3月3日めぐみホーム

◆組織 ペンギンの会が賛同団体に加わってくださった。

◆京都新聞「大震災ボランティア団体支援金」を申請。

◆募金活動について

・次回は3月12日(日)3時より5時まで。
四条河原町高島屋前にて。

◆神戸の取り組みについて

・藤原さんが帰られた後、福土(市民センター)が現地のまとめ役をして下さっている。3月末まで継続してもらえるように、支援の会より京都市民福祉センターに依頼する。

・将来的には地域で受けていただけるように繋いでいくことが必要であるが、それにはかなり長期的支援が必要と考えられる。

・毎日の活動が事務局(京都)を通して、支援して下さっている多くの人にニュース等を通して伝えられるようにする。

◆京都での一時避難活動について

・金曜日には上田啓悟さんが帰ってこられるので、介護者が必要である。

・ニューカトリア会の人々の一時避難は今回はなくなった。

◆被災地での支援の会の活動の報告会をしてはどうかと考える。報告会の詳細については今後検討する。

◆ニュースNo.3を出してもらう場合、現在の状況が詳しくわかるものを出して欲しい。中西昌哉に10日発行予定として担当してもらう。

第8回 3月10日めぐみホーム

◆募金活動について

・12日(日)午後3時より5時まで、四条河原町高島屋前で募金を実施。

◆神戸の取り組みについて

今まで避難所におられた障害者で仮設住宅とか自宅に戻られた人がおられるがその後の様子がわからない。

・4月以降も神戸学生青年センターを借りられるのかどうかを来週の事務局会議までに平田から聞いてもらう。

・小規模作業所のようすについて調査する。

◆京都での一時避難について

・来週、上田さんは京都へ来られない。

・ニューカトリアの人たちが13日より15日まで来られる。西小倉めぐみ教会に宿泊。

◆被災「障害」児・者支援の会、活動報告会について

・3月26日(日)午後3時より5時まで、愛隣館で活動報告会をもつ。

・報告会后、交流親睦会をもつ。

◆京都新聞「大震災ボランティア団体支援金」贈呈式が11日10時30分に行なわれる。多芸が出席。

◆会計監査 銅銀さんになっていただく。

第9回 3月17日めぐみホーム

◆京都新聞社社会福祉事業団より「大震災ボランティア団体支援金」として80万円の支援を受けた。

◆街頭募金活動について

・しばらく様子を見て考える。

◆神戸の取り組みについて

・現在までに受けてきたケースを行政や地域のボランティア団体はどうつないでいくかが課題である。

・被災「障害」児・者の支援はかなり長期の取り組みが必要である。4月以降もできれば神戸学生青年センターを借りられることを求める。しかし、ボランティアの宿泊と休息を考えると同センターの近くに費用をかけてもどこか場所を探すことも考えられる。又、ボランティアに関しても現地で長期に継続できる人を専従として、他のボランティアをコーディネートしてもらうことが必要である。早急に適当な人を探すこととする。

・車もまだ必要である。

◆京都での一時避難活動について

・13日より15日までニューカトリア会のメンバーが3人、西小倉めぐみ教会に宿泊。今週も20日より22日まで宿泊を希望されている。

◆被災「障害」児・者支援の会、活動報告会について

・26日(日)午後3時より5時まで愛隣館研修センターにおいて開く。

・すばる舎・神戸・京都一時避難・募金・事務局等、さまざまな働きに関わってくださった立場より報告を受ける。

・報告会后に交流親睦会をもつ。

会費は1000円とする。

・チラシ作成は事務局が担当する。資料等は中西昌哉が担当する。

第10回 3月24日めぐみホーム

◆京都新聞社社会福祉事業団より車を購入する費用として30万円の支援を約束していただいた。

◆神戸の取り組みについて

・3月末をもって神戸学生青年センターを出なければならぬため、移転先を探さなければならない。店舗・マンション等、不動産屋さん聞いてみたが権利金が大変高い。神戸学生青年センターの近くの雲内教会のプレハブ小屋が借りられるかも知れないので、訪ねて頼んでみる。

・専従として矢崎和彦になってもらう。

・4月以降、学生ボランティアが少なくなるので、新たにボランティアを募り、体制を整え直す必要がある。

◆京都での一時避難活動について

・現在、洛南病院に入院中のTさんは六甲デイケアセンターへ通うことから少しずつ生活を慣らしていくことが必要とのこと。そのための交通費の援助を要請されているので支援する。

◆被災「障害」児・者支援の会、活動報告会について

報告会の司会 中西昌哉

全体の報告 多芸

神戸の全体の報告 平田

ボランティアの報告

すばる舎 杉山

神戸 金子・川端

一時避難受け入れ 藤井

事務局 徳永

受け付け 棚谷

・資料については事務局で作れる範囲にまかせる。

・交流会親睦会 司会 川上 信

第11回 4月7日めぐみホーム

◆活動報告会 3月26日(日)午後3時
愛隣館研修センター参加者 53名
資料作成 募金・支援活動に協力していただ

いた団体と個人に発送。

・交流親睦会 参加者 44名

・会費として徴収せずカンパをしていただいた。

当日カンパ金 35,105円

指定献金 26,948円

◆すばる舎への支援について

・川田さんは職員として、山本さんはアルバイト職員として、杉山さんはボランティアとして今後もかかわられる。今後については、すばる舎から要請があれば対応する。

◆神戸の取り組みについて

・4月以降の拠点を神戸学生青年センターから雲内教会に移す。しかし、事務所になる所はプレハブ小屋で本箱等が置いてあり、机を置くと狭く、宿泊の部屋は地下室で大変冷えて、湿度が多く過ごしにくいいため、できれば近くで場所を探す必要がある。

・食事についてもボランティアの人数も減り外食せざるをえないことが多い。

・活動としては訪問と入浴サービス、送迎等を継続している。

・リフト付き車を友生園から借りているが、近く返さねばならず、ぜひ一台はリフト付き車が必要である。

・今後も活動を継続していくためには長期か、同じ曜日に継続してかかわれるボランティアが必要である。金子さんに専従となってもらうことを要請する。

・地域型の仮設住宅の申し込みが始まってい

るが、風呂、トイレが共同であり、部屋も六畳か四畳半のいずれかに一世帯。申し込まれる人は少ない。

◆京都での一時避難活動について

- ・上田さんは7～9日。
- ・ニューカトレアのメンバーが6～7日に希望されている。

◆京都新聞社会福祉事業団ニュースに「支援の会」の記事を載せたいので13日(木)昼1時30分より取材したいとの要請がある。

◆4月15日夜チャリティーコンサート(馬庭さんより要請)で活動報告の要請があり、銅銀さんに行っていた。

◆すばる舎が西宮から東京まで自転車キャラバンを実施される途中に、4月28日～29日京都に立ち寄られる。すでに馬庭さんが宿泊場所として善正寺の承諾をえられ、食事の準備については京都市民福祉センターが場所を提供されることが決まっているが、一応京都における受け入れの窓口として、支援の会になって欲しいという要請があり、お手伝いできる範囲で受けることとする。

第12回 4月14日めぐみホーム

◆神戸の支援活動について

- ・いつまで支援の会の活動を続けるのか、被災障害者にどのように支援活動をしていくのがよいのか、を考える必要がある。支援の

会としては、支援活動を一応一年をめどとして今後も継続していく。その活動を継続していくためには、拠点となる場所を探す必要がある。

- ・一応一年の支援活動を継続していくために、概算としての予算をたてる必要がある。
- ・被災地で活動している現地の状況を共有する努力が大切であることを確認し、できるだけ事務局会議に参加しているものも被災地へ行くようにする。

◆京都での一時避難活動について

- ・ニューカトレア会の人は週一回程度一時避難を希望されている。一時避難されてこられた時、一緒に泊まってくれる人が必要である。

◆京都新聞社会福祉事業団よりワンボックスの車を提供してもらう。

◆4月15日のマリオネット・チャリティーコンサートの利益金が支援の会へおくれるので、コンサートの中で支援の会について話をして欲しいと馬庭さんより要請があり、銅銀に出席していただく。

第13回 5月12日めぐみホーム

◆神戸の支援活動について

- 仮設住宅入居後も入浴サービスを希望される人が多くなっている。
- ・今年度中支援を継続することを考えると、

仮設住宅を回って入居後のニーズを今一度聞くことが必要と考え、仮設回りを始めている。

・拠点となっている雲内教会を5月末には出なければならず、新たな拠点場所を探さなければならない。

・ボランティアが少なくなってきたので、募る必要がある。できるだけ長期で活動できる人、又同じ曜日に入れる人を募る。

・専従は矢崎一人とする。

・長期にボランティア活動を続けてくださっている人が一時的に帰省される場合の交通費の援助については、帰省される頻度等を考慮して、随時検討して対応する。

◆京都での一時避難活動について

・今後も希望があれば一時避難者を受け入れる。

・避難者の交通費は援助する。食事代は自己負担とする。

第14回 5月26日めぐみホーム

◆京都での一時避難活動について

・30日に棚谷が「拓人」の仮設住宅を訪問、一時避難してこられる人がどのような状況にあるのか認識を深めることとする。

・一時避難者と介護ボランティアとの交流の時をもちたい。

◆神戸の支援活動について

・教会関係に拠点の移転場所がないか探してもらっているが、今のところまだ見つからない。5月末に引っ越すことは難しいので、雲内教会に事情を説明して、今少し借りられないか、相談する。

・地域型仮設住宅の入居が始まったがその数は多くない。しかし、入居された人の中には生活されるのが大変な人もあり、仮設住宅に入居された人を訪ねている。

・仮設住宅に入居されると物資が手に入りにくくなり、新たに物資支援の希望がある。出来る範囲で物資支援も継続していく。

・支援の会がかかわってきたYさんは長い間、一人で歩くことが出来なかった人であるが、ボランティアの人たちとの信頼関係も深まり、積極的な生き方を求められるようになり、作業所へ通う決意をされると共に、一人で歩き始められたという感動的報告があった。

・更に、これらの支援活動を継続していくためには、ボランティアを募る必要がある。灘ボランティア協会・京都教区の対策救援対策委員会・教団の「阪神大震災」救援活動センター等にもボランティアを募る。

・神戸学生青年センターのお風呂を借りて入浴サービスを続けているが、そのお風呂が壊れ修理が必要となった。

◆中西昌哉に編集していただきニュースNo. 4の発行を担当してもらう。

第15回 6月2日めぐみホーム

◆京都での一時避難活動について

・精神障害者の方で西宮の病院に入院されていた方が、その病院から転院を求められていることを知り、棚谷が宇治にある病院と連絡をとって、宇治の病院での受診に同行され、主治医同士話し合っただけですぐに転院が実現した。

◆神戸の支援活動について

・雲内教会牧師館の改築工事のため5月末をもって移らなければならなかったのだが、移転先が見つからず困っている。6月1日に開かれた日本基督教団「阪神大震災」救援活動センター運営委員会にどこか移転先を紹介して欲しい、と文書でもって要請したところ、日本基督教団兵庫教区事務所の地下室を支援の会の現地事務所として、又、ボランティアの宿泊場所としては同じ建物の和室を緊急的（次の場所が見つかるまで）に貸してもいいとの返答をもらう。

・その間に運営委員会の方と支援の会と一緒にどこか土地を探して、見つければそこに運営委員会が十畳程度の建物を建てて提供しようとの申し出も受けた。

・仮設住宅をまわり、仮設住宅に入居された人たちのニーズを聞いているが、ボランティアが少なくなっているため、募集する必要がある。

・継続して支援の会でボランティア活動を続けておられる方が郷里に帰られる場合の交通費については、一律には決められないが、事務局において随時全額とはいかなくとも援助を検討することとする。

第16回 6月19日 兵庫教区 クリスチャンセンター

◆京都での一時避難活動について

・被災され入院されていた精神障害者の方が病院より転院を求められていたため京都の病院と連絡、診察に同行、当日夜は西小倉めぐみ教会に宿泊、翌日受診された病院に入院をされた。

・ニューカトリア会の人、1～2名が毎週月・火曜日に一時避難されている。

◆神戸の支援活動について

・6月12日より兵庫教区クリスチャンセンターの地下カレージの倉庫を事務室として、又、和室を寝室として借りて活動を継続することができた。

・今回は「地下室・和室使用についての確認書」を取り交わした。

・それには、一応期間は8月末までとなっているので、以後拠点となる場所のことについても検討していく必要がある。

・ボランティアの人たちの保険について水谷に検討してもらう。

・支援の会のボランティアとして働く場合、あ

くまで私たちは来年春頃までしか活動ができないことを考え、できる範囲で地域の行政とボランティアにつないでいくように努める必要がある。又、被災から生じたことへの支援活動を基本に考えながら、一人一人のケースをみんなで相談してから関わっていくようにする。

◆日本基督教団京都教区ネパール特設委員会主催のパイプオルガン・チャリティーコンサートの当日、プログラムの中で「支援の会」の報告をして欲しい、とのことであり、矢崎に行っていた。

第17回 7月21日めぐみホーム

◆京都での一時避難活動について

- ・7月24日(月)京都での一時避難をされている人たちと彼らの介護に入ってきたボランティアの人たちとの話し合いをもつ。
- ・一時避難されている精神障害者の人たちも次第に仮設住宅入居が決まってきたが、仮設住宅入居後も週1~2日の一時避難は今後も希望されている。

◆神戸の支援活動について

- ・仮設5次(最終)の発表が19日にあったが、入居決定された人が少なく継続して避難所生活をされている。支援の会が関わる人たちの中にも5~7世帯おられる。日本基督教団が建てている仮設住宅に入ることができ

ないか、尋ねることとする。又もし紹介した時、入居の意志があるか、考えを聞く必要がある。

- ・現在使用している軽自動車は調子が悪く、使用が危険な状態となった。古くて、修理をするより廃車した方がよいと考えられる。新たに一台車を購入する必要があり、自動車販売会社の数社に打診している。
- ・活動に使用している車に対して、駐禁除外の証明書を福祉事務所を通して警察に申請してもらった。東灘区・灘区の警察が許可してもらえそうな見通しである。
- ・泊込みのボランティアは少なくなっているため、募集しなければならない。
- ・できれば地元の人を募りたい。他地域からのボランティアの人については1ヶ月以上入れる人を募る。
- ・遠畑に専従となっていただいた。しかし、9月以後も継続していただけるかは未定である。
- ・クーラーも窓もない事務所に扇風機と除湿器を購入した。

第18回 8月18日めぐみホーム

◆京都教区パイプオルガンコンサートより

626,573円 いただく

◆京都での一時避難活動について

- ・7月24日に一時避難しておられる人たちと

彼らの介護に入ったことのある人たちとの話し合い(交流会)をもった。

- ・京都における一時避難をされる人の介護者については今後棚谷が担当する

◆神戸の支援活動について

- ・8月20日でもって災害救助法が打ち切られる。
- ・灘区は1ヶ所(王子センター・300人)に集められることになっているが実際はまだ避難所には2500人ほどおられる。東灘区は5ヶ所の予定。
- ・支援の会が関わってきた人で仮設を求めておられた人は全員入居が決まった。
- ・24日に現在借りているクリスチャンセンターの件で兵庫教区議長と話し合いを予定している。兵庫教区から紹介していただいた住吉公園の中にある教団の建物はすでにある団体が使っていて、支援の会の拠点として借りることは困難であるということがわかった。平田、矢崎が実際に行って調べてきてくださった。
- ・18日から神戸学生青年センターのお風呂が使用できるようになった。
- ・支援活動が長期化するなかで、さまざまな考えにたってボランティアに参加してこられるが、一個人として自由にボランティア活動がなされるのではなく、現地の専従が中心になって、「支援の会」としてのボランティアとして現地のコーディネーターの指示に従って支援活動を行なってもらうよう理解を求め

る。支援活動の基本姿勢については、従来より事務局会議で話し合われてきたが、その話し合われたことについては、できるだけ現地のボランティアの人たちにも伝え、理解を求めることとする。

◆事務局より、「阪神大震災現地救援対策本部職員に対する、天災担保特約付災害保障」について保険会社と交渉してきたが、期間は8月1日より来年4月1日まで、準記名式傷害保険として¥102,690円で契約した。

- ・ボランティアに入っている人全員にボランティア保険に加入してきたが、震災支援ボランティアについては電話1本で大阪・神戸のボランティア協会が無料で加入を受け付けてきたため、加入を証明する書類がこちらにはなにもない。その点、実際に何かが起こった時は不安がつきまとう。大阪・神戸に実際に入っているかどうか確かめることとする。その点を保障する保険には、先程契約した保険に約3万円程追加すると、ボランティア保険と同様の保障があるので今後検討する。

第19回 9月1日めぐみホーム

◆京都での一時避難活動について

- ・介護の必要な場合もあるが、これから自立した生活を続けていかれるためには被災地

で介護者を見つけていただくことも必要と考えられるので、よく話し合っていく必要があると思われる。

・9月18日に第2回目の一時避難者とボランティアの人たちとの交流会が開かれます。

◆神戸の支援活動について

・兵庫教区北里議長と話し合いをもって期限を設定しないで、9月以降もとりあえずクリスチャンセンターを借りる了承をえた。

・8月31日に日本基督教団兵庫教区各種伝道委員会望月委員長と話し合い、支援の会と共に被災障害者支援の抱えているケースを一緒になって担っていきたいとの考えを受けた。そして次回の各種伝道委員会に平田が出席して説明と要請をすることとなった。

・10月初めには各種伝道委員会の呼び掛けで集会を開いていただける予定である。

・地元の人たちにつないでいきたいという願いにそって道が開かれてきたと思われる。

・8月27日にがんばろう灘祭りが開かれ、参加した。

・共同作業所まつぼっくりの再建のお手伝いをしている。

・配布しているピラの内容の変更が必要になってきたとの判断でボランティアの人たちの意見を聞いて、新しいピラを作成することとする。

◆9月24日に室町教会において、日本基督教団震災支援委員会主催の支援活動報

告会が開かれるとのことであり、支援の会からも報告して欲しいという要請があり、多芸・矢崎が出席して報告する。

第20回 10月2日兵庫教区 クリスチャンセンター

◆京都での一時避難活動について

・9月18日の避難者と介護者との交流会の参加者は8名。

・京都における一時避難の受け入れは今後も継続して欲しいとの要望が出された又、神戸の病院に入院されている患者さんの訪問も希望された。

◆神戸の支援活動について

・ボランティアに男性が少ない。入浴サービス等を行っていたKさんは東京の娘さんの所に移られた。家族や他の人の意見等聞くことの少ないKさんであったが、支援の会のボランティアとの関係が深まるにつれて人間的にも変わられてきたように思われる。

・Sさんの場合、仮設住宅に入居しても隣りの人から喧しいという苦情が出て施設に入所せざるをえないようになったのだが、住まいを見つけて家族と一緒に生活できる道がないだろうか、と話し合った。

・Wさんは状態が悪くなれば遠畑さん呼び、苦しみを訴えられる。

・兵庫教区の各種伝道委員会が教会関係者

にボランティアを呼び掛けてくださることとなり、12日に支援の会の説明会を開いてくださることとなった。平田、矢崎が説明会には参加していただく。そのための資料作成は矢崎が担当する。

◆ボランティア保険に入っているかどうかを確かめることは不可能であるとの返答を受けたので、現在入っている保険の定款を変更して、非加入者であった場合を考慮して保険をかけることとする。

第21回 10月27日めぐみホーム

◆京都での一時避難活動について

・介護に入ってもらえる人の連絡網を作った。

◆神戸の支援活動について

・ボランティアの人数が減って、定期的に決まっている送迎等のスケジュールに追われている現状で、訪問活動ができにくくなっている。

・まつぼっくりの送迎については大阪ガスの企業ボランティアがかかわってくださることとなった。

・兵庫教区各種伝道委員会より教会にボランティアの募集と登録カードを出していただいたが、現在のところ登録者はあられていない。

・Wさんはしあわせの家にショートステイに入られる。精神科のドクターの訪問診察による

と状態はよくなりつつあるとのことであった。

・Iさんはてんかん発作ではなく震災からの精神的なものだろうとのことであった。

・11月17日のキリスト教社会事業同盟職員研修会において平田が報告する。

第22回 11月20日兵庫教区 クリスチャンセンター

◆京都での一時避難活動について

・京都に一時避難されていた2名が事務局会議に参加、2名とも仮設住宅に住んでおられるがその状況の報告があった。

・1人のかたは大規模な仮設住宅で生活しておられるがそこで自治会の世話役・書記を任された。しかし生活のリズム、また様々な仮設住宅全体での問題により必要以上に考えなければならないことが増加、積極的に参加するあまり身体的・精神的に負担が大きいのこと。

・もう1人のかたは小規模の仮設住宅で生活しておられるが、周りの住人が次々と引っ越していき、今現在、夜に電気のつく家とその仮設で3軒しかない。そのため、早急に恒久的な住宅を探しておられる。10月半ばに入院してしまい、11月15日締切の災害復興公営住宅の申し込みに間に合わず、どこの場においても重要な情報が入るよう協力して

欲しいとのこと。西宮の仮設に住んでおられるが、神戸市以西の住宅で家賃の安い住宅を探している。被災地障害者センター（神戸のボランティア団体）と協力して探していきたい。

・仮設での生活も含め、障害者に対する偏見が無くならないと安心して生活することができないと言われていた。

◆神戸の支援活動について

・現地でのボランティアが数人増えた。灘区ボランティアセンターに動ける人がかなり登録してある様だが、その割に動いていないことがわかり今後もそういったボランティアを探していきたい。また、各種伝道委員会によって呼び掛けられたボランティアも徐々に集まりだしている。そういった動きを促進できる様にしたい。

・灘区ボランティアセンターが灘新聞を発行する。そこで、ボランティアの活動紹介を掲載する。創刊号で支援の会の活動紹介をするため原稿を添削して頂く。

・11月30日～12月3日まで矢崎・遠畑とも居ないため休みとする。

・現地活動の冬期休暇は現地のボランティアと平田が話し合っ決めて決める。

第23回 12月8日めぐみホーム

◆京都での一時避難活動について

・四月以降も一時避難を求められている。西小倉めぐみ教会は場所を提供することについては了承している。しかし、その責任母体はどこで受けられるのか、はっきりする必要がある。

◆神戸の支援活動について

・ボランティアの人数が少ないので仮設まわりを行なう時間がない。

・年末・年始の休みについては平田と現地のボランティアの人たちとが相談して決める。

第24回 1996年1月12日めぐみ

ホーム

◆京都での一時避難活動について

・週に1～2日、1～2名の一時避難は続いている。

・年末も希望されたが介護者がなく一時避難はされなかった。

◆神戸の支援活動について

・四月以降どのように具体的ケースを引き継いでいくのが課題である。どのような形で引き継いでいくのかを更に望月さんと相談していく必要がある。

・支援の会としては、引き継ぐ段階で今までの活動を締め切り、応援して下さった人たちに支援活動の総括と決済を報告する必要がある。

◆池田千鶴子さんハーブコンサート

・支援の会主催による被災地でのコンサートを実施する。

・3月16日(土)が考えられる。一日に二回のコンサートが可能とのことであり、場所を探すこととする。できれば仮設住宅のふれあいセンターを借りられるように交渉する。

◆京都ボランティア協会主催

・シンポジウム『障害者と震災ボランティア』

1月27日(土)6時～8時

◆リユニオンを3月23日(土)に開催することをめざし、計画案を川端さんに担当していただく。

第25回 1月26日めぐみホーム

◆京都での一時避難活動について

一時避難は継続している。

◆神戸の支援活動について

・4月以降、支援の会の活動を受け継いでいただく受皿として兵庫教区各種伝道委員会がボランティア組織づくりを呼び掛けてくださっているので、その委員長である望月牧師より報告を聞いた。

・「できれば4月から支援活動を継承したいと考えているがその専従になってもらう人が見つからない現状である。月10万円位の給料を考えて公募する予定である。仮に専従が見つかってボランティアも十分に見つかる見通しが無いので、今支援の会で働いておら

れる人たちにも協力をお願いしたい。引き継ぐ時期についても4月からと決めるのではなく、もう少しの猶予期間も欲しい。しかし、出来る限り早く体制を整えたいと考えている。」

以上のような報告を受けて支援の会としてはどうするか議論したが、現地の活動を縮小しながらも継続するのか、現地の活動は終えて京都に支援の会の事務局を残して支援活動を継続するのか、又、すべての活動を終えるのか、さまざまな議論がなされたが、協議は今後も継続することとなった。

◆池田千鶴子さんハーブコンサート

・3月16日、仮設住宅のふれあいセンターを借りて行なう。借りられる場所を探してもらう。午後に二ヶ所で開く予定である。

・準備には京都の事務局があたっていく。

第26回 2月21日めぐみホーム

◆京都での一時避難活動について

・2/5～6 2/19～21 2名一時避難。

・4月以降の一時避難受け入れ母体はどこになるのか問われている。

・4月以降、交通費の支援・介護の募集は可能か。

・神戸において一時避難できる場所が必要ではないか。

◆神戸の支援活動について

・仮設住まいの人が公営住宅に移られるケー

スが増えてきた。

- ・1月29日に遠畑がOさん夫妻を送迎中に交通事故を起こされた。
- ・矢崎専従が事故後約3時間たって遠畑より連絡を受け、すぐに平田に報告し、病院へ。ケガが大きいので再度平田に連絡、平田も病院へ。Oさん、全身打撲。Oさんのおつれあい、両大腿骨骨折・左手首骨折・右足首骨折。遠畑、鼻骨2ヶ所骨折、顔面打撲・裂傷・歯骨折。事務局では当日から次の日に保険関係の手続きを済ませ、保険会社と相談。
- ・31日、矢崎と一緒に多芸が病院にお見舞い。
- ・その後、Oさんは2週間後退院して次女の方の家へ。Oさんのおつれあいは各骨折箇所を手術。約半年の入院治療が必要とのこと。
- ・支援の会よりお見舞い金を平田より渡していただいた。
- ・自動車保険・ボランティア保険・支援の会が任意に加入していた保険があるが自動車事故においては自動車保険が適用されるとのこと。すでに保険会社がOさんの家族と話し合われているとのこと。
- ・金銭面においてはすべて保険会社に任せ、保険によって対応していただく。
- ・これは遠畑においても同じとする。
- ・お見舞い、又、介護ボランティアの要請があった場合等には誠意を尽くして対応する。

- ・支援の会の4月以降については、規模を縮小して継続する。専従は矢崎一人とする。新しいニーズは受けず、現在受けているケースでどうしても継続が必要なものを支援する。
- ・一応8月末迄とする。

◆池田千鶴子さんハーブコンサートについて
3月16日(土) 大和仮設住宅ふれあいセンター 1時30分～3時
灘南仮設住宅ふれあいセンター
4時～5時30分

◆リユニオンについて

- ・3月24日(土)より25日(日)。
- ・場所、その他詳細については川端、矢崎、平田に一任する。

第27回 3月8日めぐみホーム

◆京都での一時避難活動について

4月以降も支援の会で京都における一時避難を受ける。
その場合、従来通り交通費を支援することは変わらない。

◆神戸の支援活動について

- ・3月7日の各種伝道委員会の委員の方との話し合いについて報告を受ける。
- ・作られる支援の会の専従は1人で担当するのは不可能とのこと。曜日を決めて3人がされる。その人たちに出来るだけ早く支援活

動に参加していただく。

- ・実際に支援活動が続けるにあたっては両支援の会で話し合いを続ける必要がある。

◆保険（輸送サービス）に加入した。

500円×23人

- ・4月以降ボランティア保険が変わる。
- ・3月16日より19日まで和室が使えなくなる。
- ・入院中のOさんの見舞いを続けているが、物忘れがみられ心配である。
- ・保障面について、保険会社から遠畑を交えて説明を受ける。

◆池田千鶴子さんハープコンサートについて

16日（土）午後1時30分

大和公園仮設住宅ふれあいセンター

4時 灘南仮設住宅ふれあいセンター

- ・池田千鶴子さんにギャラは支払わないが必要費用は支援の会から支出する。
- ・夜7時30分頃よりめぐみホームにおいて池田千鶴子さんを囲んで親睦会をもつ。その準備は平田さん、矢崎専従を中心に担当していただく。

◆リユニオンについて

3月23日（土）夜7時より24日（日）

朝9時まで。

愛隣サービスセンターにおいて川端、平田、矢崎専従で準備をしていただく。

- ・参加費は2000円とする。

◆支援だよりについて

- ・中西に担当していただき、3月16日発行予定。

第28回 4月5日めぐみホーム

◆京都での一時避難活動について

4月以降も継続して受け入れる。

◆神戸の支援活動について

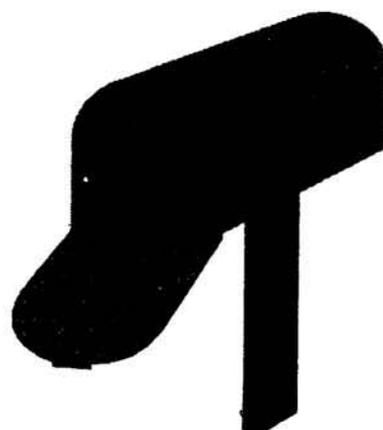
- ・支援の会兵庫のコーディネーターをされる人たちが支援活動に参加されたいぶん慣れた様子。5月から現地の支援活動は支援の会兵庫に移行していただく。支援の会からもボランティアとして参加できる人には参加していただく。
- ・支援の会より当面の活動費として100万円を支援する。
- ・京都での支援の会は継続する。
- ・Oさんは少しずつ回復されている様子。見舞いは矢崎、宮本が継続して訪ねている。



支援の会ボランティア数

(1996年2月末現在)

	事務局	神戸(灘・東灘)	西宮	一時避難受け入れ	街頭募金	合計
1995年1月	49		100	5	144	298
2月	138	179	133	20	80	550
3月	135	293	14	6	65	513
4月	103	164		7		274
5月	86	169		19		274
6月	85	215		15		315
7月	80	202		9		291
8月	59	155		18		232
9月	52	123		5		180
10月	50	111		6		167
11月	48	109		2		159
12月	46	105		2		153
1996年1月	40	92		4		136
2月	38	115		6		159
累計	1009	2032	247	124	289	3701



阪神大震災をふりかえって

■(1) 都市文明の危機

私自身の日々の営みは、幾つかの基本的な前提に基づいて成り立っているように思います。例えば、私は今、此の文章を電動車椅子に乗り、パソコンで書いていますが、そこでは、車椅子やパソコンへの電力の安定した供給が不可欠ですし、外部との連絡にしても、電話を抜きにしては考えられなくなっています。その他、水道やガスなどの供給も、都市での円滑な生活を営む上で、必要欠くべからざる前提条件ではないかと思えます。そうした都市での生活を成り立たせている前提条件ともいべきライフラインが崩れた時、都市文明は、重大な危機に陥る。それが現実になったのが、1年前に起きた阪神大震災ではなかったかと私は思うのです。

1995年1月17日の早朝。寝ているベッドが「ギンギン」と軋む音や、烈しい鳴動で、私の夢路は妨げられたのでした。そうした烈しい鳴動はまもなく収まりましたが、壁一つ隔てた高層住宅の階段を慌ただしく上り下りする人々の、その足音を聞きながら、宇治川の上流にある天瀬ダムが決壊して、此の向島に洪水が押し寄せるのではないかと、此の向島は元々池だったので、今の地震で液状化現象が発生して、自分が住んでいる建物が傾いた

り、沈むのではないかという不安に脅えていたのでした。しかし、そうした不安も単なる思い過ごしだったようで、やがて辺りは、元の夜明け前の静寂が戻り、私の臉も再び重くなるのでした。それから暫くして、ベッドから車椅子に乗り移った私が視たのは、テレビのブラウン管に映し出される黒煙を噴き上げて燃え広がる神戸の街の火災や、屋根瓦の摺落ちた古い木造の民間アパート。横倒しになった高架の高速道路や、その間を枕や蒲団を抱えて右往左往する人々の姿でした。私が顔を洗っている時にも、強い余震があり、それが直ちに「ただいま大阪で震度4の揺れを感じました。火の元に注意してください」というテレビのアナウンサーの声となって私の鼓膜を叩くのでした。

その日は、朝からテレビの前に釘付けになっていた私ですが、時間が経つに伴い、死傷者の数は増え、昼近くになっても、火災は衰えるけはいはなく、寧ろますます広範囲に燃え広がるのでした。それというのも、停電で信号機が作動しなくなったのと、自動車避難しようとする人々とで、道路がパニック状態に陥り、火災の現場に消防車や、救急車が近づけなかったからのようです。

そうした被災地神戸の惨状をテレビで見な

がら、私は20年来の友人で、今は神戸市内に住む上田牧師の安否を気遣わずには居られませんでしたが。実際上田牧師は、地震の際、倒れた本箱の下敷きになり、近所の人に助けられ、危うく難を逃れたとか。さらに電気やガスなどのライフラインが寸断されたので、親子3人で、近くの小学校での避難所生活を余儀なくされたのでした。私は、何人かの知り合いに電話して、上田牧師の消息を掴もうと試みました。その結果、上田牧師の無事が確認されたのは、地震の発生から10日近く経った1月の終わり頃でした。

私が住む此の洛南の空を、自衛隊の大型ヘリコプターが頻繁に飛び交うようになったのは、地震の発生から2～3日して。この頃になると、全国各地から毛布や衣類、食料品などが被災地に送られるようになりましたが、鉄道や道路が寸断されているので、これらの救援物資は、一旦、宇治の木幡にある自衛隊の補給基地に運び込まれ、其処から大型ヘリコプターに積み替えられ、神戸の王子競技場などを経て、各避難所に届けられたのでした。そして、神戸から戻るヘリコプターには、被災地で処理しきれなくなった遺体を京都に運び、蹴上などの葬儀場で、取り合えず茶毘に付したという話も伝えられていました。また、ボランティアとして被災地に赴いたある人は、避難所の片隅で身寄りがなく、放置されたままの遺体を視るに見かねて、自前で高槻まで運び、手厚く弔ったとも伝えられています。こうして時間の経過と共に、大地震に伴う神戸や西宮などの被害の全貌が次第に明らかになってき

ました。

とりわけ、被災地での高齢者や、障害者の状況は真に厳しく、民間アパートに住んでいた重度の脳性麻痺の女性が、地震直後に発生した火災で、介護者共々焼け死んだり、高層マンションの一室に取り残された独り暮らしの高齢者が、何日も外部との連絡が取れないまま、餓死するという痛ましい事件も相次いで発生しました。また、阪神間に住んでいる障害者が多数、それぞれのルートを頼って、大阪市内の福祉会館などに一時避難したとの情報も齎されました。

■ (2) 支援の会の活動始まる

こうした切迫した状況の下で、大地震の発生から3日経った1995年1月20日。日本基督教団西小倉めぐみ教会を設立され、さらに、めぐみホームなどでの活動を通じて、日頃、障害者と接する機会の多い多芸正之牧師の呼びかけで『被災「障害」児・者支援の会』（以下略して支援の会）が作られ、直ちに活動を始めたのでした。活動資金を求めての伏見の大手筋や、四条河原町などでの街頭カンパ活動。実際に被災地で支援活動をするボランティアの募集。現地での活動拠点作りや、コーディネーターの選任と、支援活動の開始に向けた準備は、確実に進んでいました。

私たちの『・・・支援の会』が、神戸市灘区にある神戸学生・青年センターの一隅をお借りして、支援活動を始めたのは、それから間もなくでした。最初は、東灘区内の各避難所を周り、そこでの日々を余儀なくされている障

害者や、高齢者のもとを訪れ「困ったことはありませんか」「何かお手伝いしましょうか」と尋ねることから始まり、そうした関係作りを積み重ねながら、病院への送迎や、入浴時の介護など、その活動は次第に広がるのでした。

常時介護を必要とする私自身は、そうした被災地での支援活動に携わるのは実質不可能ですが、その私が、被災後の神戸を初めて訪ねたのは、地震の勃発から2ヶ月近く過ぎた、3月上旬の、或る日だったと記憶しています。

その日の夕方、駅舎の改築工事が本格化して、クレーンの長いアームが林立するJR京都駅から快速電車に乗った私は、次第に暮れなずむ車窓の風景を眺めていたのです。電車が大阪を過ぎ、武庫川に架かる鉄橋を渡ると、線路の両側には、屋根に、地震で落ちた瓦の代わりに青いビニールのシートを被せた民家が多くなってきました。やがて電車は住吉の駅に到着しましたが、此処の駅舎も地震で受けた損傷は大きく、エスカレータは止まったまま、階段も改札口も、すべて急拵えでした。そして、その頃のJRは、未だ住吉以西が不通で、大阪方面から来た電車は、此の住吉駅で折り返し運転を余儀なくされていたのです。その急拵えの改札を通過して、車で出迎えてくれるという「・・・支援の会」の被災地での支援活動のコーディネーターをしている矢崎青年を待つ間、辺りを眺めていた私の眼に入った一つの光景。それは駅前の街灯の仄かな光に照らし出された、傾いて今にも崩

れそうな4階建てのビルでした。おそらく震災前のそのビルには、企業の事務所や、飲食店などがテナントとして入っていたに違いありません。しかし、地震の発生から2ヶ月近く経ったその時、その傾いて焼け爛れたビルの窓には、一つの灯も見出せず、ただ、夜空の一角を遮るコンクリートの塊が、そこに、今や取り壊されるのを待つばかりとなったビルの存在を示しているのです。

その夜は、神戸学生センターに泊まった私は、翌日の朝、上田牧師の案内で、神戸学生センターからほど近い、避難所の一つ神戸市立六甲小学校を訪ねました。その途中で、電動車椅子に乗った脳性麻痺の男性と出会いました。彼も今回の震災で住んでいた家屋が焼失して、避難所での日々を余儀なくされているようですが、頗る元気で、初対面の私にも、被災した当時や、避難所の様子などを語ってくれました。

こうして訪れた六甲小学校の校庭は、整然とした都会の学校のグラウンドがもつイメージからはほど遠い、アメリカの開拓時代の西部の街を思い出させる、雑然とした雰囲気漂っていました。上田牧師の説明によると、地震の発生直後に避難所へ身を寄せていた人の多くは、自力での生活の再建を目指して、次々に避難所を去り、残っているのは身よりのない高齢者や、障害者などで、その多くは、地震以前から、年金をはじめ、いわゆる福祉制度の下で生活していた人たちだとのこと。確かに、校庭の一角に焚かれた大きな焚き火の周りに屯しているのはほとんど高齢者でし

た。その校庭の別の片隅では、何処かの禅宗の寺から来たと思われる何人かの青年僧が、紺色の衣の裾を絡げ、額に玉の汗を流しながら、温かい豚汁の炊き出しをしているのでした。また、その校庭には、ビニールのシートや、ダンボールなどを寄せ集めて作った幾つかの雨風を防ぐ小屋が出来ていましたが、そうした急拵えの小屋が建ち並ぶ六甲小学校の校庭の風景と、その学校からは北の方角、六甲山系のその山麓に建ち並ぶ、地震の被害を最小限に止めた瀟洒な高層マンションの建物との間に、奇妙なコントラストを感じたのは、単なる私の錯覚だったのか!

■ (3) 神戸の復興について

マスコミが伝える処に拠ると、今回の地震で最も被害が大きかったのは、第2次世界大戦後の戦災の復興や、1960年代の初頭に時の宰相池田勇人が打ち出した所得倍增政策に基づいた、高度経済成長期の頃に宅地化された地域で、そこには、日本の敗戦に伴う中国東北部の、旧満州などからの引揚者や、職を求めて地方から出てきた、当時は「金のタマゴ」としてもはやされた若年労働者が多く住んでいました。ハイカラな街神戸を底辺で支えてきたのも彼らだったのではないかと思います。こうして身を酷使して働いて高齢に達し、事故や病気などで障害を持った彼らを襲ったのが今回の阪神大震災ではなかったかと思えます。

私は、震災前の神戸を何度か訪れ、京都や大阪とは趣の異なるハイセンスな街の印象を

深くしていました。三宮から元町にかけての長いアーケード街。異国情緒に溢れ、餡饅の美味しかった中華街。そして六甲の山頂から眺めた夜景など。そうした思い出のある神戸の街が、例えそれが一時的にせよ、今回の地震で大きな痛手を蒙ったのでした。地震の発生から2度目の秋を迎えようとしている今、被災地神戸は復興の途上にあり、何年か後には、以前にも増してハイカラな街になるに違いありません。しかし、今も尚、5万人のも高齢者や障害者が、仮設住宅での日々を余儀なくされ、更にその仮設住宅に住んでいる高齢者の孤独死が相次いでいるという現実。そうした現実を差し置いて神戸の復興を語るのは無意味ではないかと私は思うのです。

何れにしても、地震の発生直後から、被災地での支援活動を続けてきた私たちの「被災『障害』児・者支援の会」も、今年の8月末には、現地での活動拠点を引き上げ「・・・支援の会」としての活動を終えました。此も禪に、私たちの「・・・支援の会」の呼びかけに応えられ、全国各地から、いち早くボランティアとして被災地に赴かれ、支援活動に携わられた方々。そして、資金面での御支援を惜しまれなかった多くの団体や、個人の皆様方。また、事務局の置かれためぐみホームでの通信発送の作業などを手伝ってくださった人々。こうした多くの方々の様々な形での真心の賜と「・・・支援の会」の事務局会議の末席を温める者の一人として、感謝の念を新たにしている次第です。

事務局会議の活動

今、95年の3月26日に開かれた支援の会「活動報告会」の資料を改めて見ている。その中には、支援の会事務局が行った各賛同団体へのFAX通信が束ねられている。1月20日に発足してから約2ヶ月で計28回行った。そのFAX通信を見ると、そのころの様子が今も鮮明に思い起こされる。ここではこれまでの事務局会の記録や「支援の会たより」をもとに活動を振り返ってみたい。

■活動の第1期

テレビの画面を通じて知る大震災の状況の中で「障害を持っている人たちはどうしているのだろう。」—そんな思いで開かれたのが第1回事務局会議である。集まったのは京都で「障害」児・者と共に活動する民間のグループや団体の幾つかであった。その場で物資の提供、人員の派遣、京都への一時避難受入れなどが話し合われ、ささやかではあるがとにかく出来ることから、被災された「障害」児・者の方々への支援活動がスタートした。とはいえ、この段階では情報収集であった。被災現地で情報交換されていた「障害」者グループ(個人)のFAX通信を支援の会にもお願

いしたところ、毎日、ワープロ打ちB4版4~5枚の通信が送信されるようになった。中にはハンディゆえに安否の確認すら取りづらかったり、避難所においてもさらに障害者の居場所がなかったりする様子も伝えられた。第2回事務局会(1月24日)、第3回事務局会(2月3日)では、実際に現地のニードも伺いながら支援を開始している。京都への一時避難は精神障害者のグループであるニューカトレア会のメンバー2~3名が来られるようになり、これはその後、週1回、一泊程度で継続して利用されるようになっていく。人的支援では、西宮のすばる舎にボランティアを派遣し、中には長期的に現地の障害者と生活を共にして頑張ってくださいる方もあった。野菜や肉といった食品、文具の物資支援も行った。第4回事務局会(2月9日)までに徐々に賛同団体も増え(最終的には、この冊子のどこかに記載されているはず?の通りである)ていった。事務局会はこれらの団体からの自由な参加の場とし、協議の上、活動を続けていった。2月11日に神戸市灘区に支援の会の活動拠点が出来るまでのこの時期を私のまったくの私見ではあるが、活動の第1期ではないかと思っている。この時期重要だったもう一つのことばは募金活動である。事務局のあった「めぐみ

ホーム」の近く伏見区、大手筋などで街頭募金が行われた。2月6日には四条河原町角で募金活動を行い、約70名の参加でにぎやかに協力を訴えることが出来た。

■活動の第II期

活動の第2期は2月11日に現地・神戸学生青年センターの一室に活動の現地拠点を置いてから、その年度の3月末までではないだろうかと私は考える。この時期は、その後長く支援活動をさせていただくことになる土台の形成の時期である。(現地活動拠点は、その後、日本キリスト教団神戸雲内教会、兵庫教区クリスチャンセンターと各々がご理解を下さって移転したがこの様子については現地活動報告を参照) 第5回事務局会議(2月17日)ではこの時の様子が報告されている。

「10名位のものが入って活動している。一時避難場所とか在宅の家庭を訪ねて行ってチラシ配布を続けている。YMCAやYWCAにも協力していただいてチラシ配布をしている。そんななかで、具体的なさまざまなケースが出てきている。かなり難しいケースもあって毎日活動が終わった後みんなでミーティングをして対応を協議している。毎日の活動記録とともにケースの記録も残している。たんぼぼの家が回られたところから入浴サービスの希望者がおられるので受けて欲しいという要請がある。えんぴつの家からはデイサービスを開始するので障害者の送り迎えを手伝って欲しいという要請もある。現地で活動している他の団体とのつながりが出来てきてい

る。」と記録されている。被災された「障害」児・者の方々を支援させていただく活動ではあるが、そのことを通じてボランティアの問い合わせが事務局にも全国から入り、またやって来られて、人の輪が広がってゆくを感じる事が出来た。

第6回事務局会議(2月24日)では、「灘区・東灘区の避難所はほぼ8割回った」ことが報告され、入浴サービスや送迎などが日常的に行われるようになっていった。

その後、被災地では一時爆発的に増えた”震災ボランティア”も、学生の新学期を前に少しずつ減っていった。また、他の支援グループも3月末で一応の活動を終了するところが出始めた。しかし我々支援の会が、出会い、支援をさせていただいていた、被災「障害」児・者の方々のニードは年度が新しくなっても変わらないのだという話し合いがなされ、この活動を4月以降も継続していくことが、第8回事務局会議(3月10日)など検討を重ねて決定された。

この間に「支援の会だより」ははじめ名称が変わったりしたが3回発行されている。目的は特に、支援の会にご理解いただいて募金にご協力を下さった多くの方々にニュースを通して日々の活動が伝えられるようにするためであった。本当に多くの方々が募金にご協力下さり、開設した募金口座には各地から暖かいお気持ちがお寄せられた、一同これに感謝し、応えたいと思ったが「支援の会だより」に関するれば、その発行回数や内容が乏しかったのは否めない。

■活動の第Ⅲ期

支援活動は、95年4月以降、専従者を神戸灘区の現地活動拠点において続けられる。実に地道な活動である。詳しい状況は別稿になるがまさに、雨の日も、暑い夏も、寒い冬もボランティア達は通い続けた。ガイドヘルプ（送迎）や入浴のほか、時々訪問して話し相手になるのも活動だった。（96年1月に、その時点で継続している支援の対象は72名であることが事務局会議でも明らかにされた。）ボランティアも長時間関わる人が中心となり被災された方の様々な悩みを受けとめるようになっていった。事務局会議でもそれらを少しでもシェアしようと心掛け、時には、現地拠点にて会議を開くこともあった。およそ月に1回ないし2日開かれた事務局会議はこれまでに30回数える。支援の会だよりも現地スタッフが担当するようになりボランティアの似顔絵イラスト入りの楽しいものになった。

■活動の第Ⅳ期

そして96年の4月より現地にて新しいグループが誕生したのを期にこれまで支援の会の現地活動をこれに引き継ぐ決定が第30回事務局会議(5月31日)でなされた。この経過と今後の方向性、そしてまた我々支援の会がこれまでの経験を通して学んだことや総括はきっと他の人の文章に詳しいことと思う。

以上「支援の会たより」担当者として、私自身は京都の一時避難受け入れや、被災地支援活動にはほとんど参加できず、ただ事務局の末席を汚したにすぎないが報告をさせていただきます。支援の会を通じていろんな方と出会いの場が与えられましたことを感謝します。ありがとうございました。



支援の会に連なって

思い起こせば、あの震災の直後「障害のある人達はどのようにしているのだろう」「私たちに支援できることは」との想いをもって最初に集まったのは1月20日のことであった。その時点で賛同団体はすでに16団体を数え、1. 募金活動をする。2. 人材派遣をする。3. 京都に避難されてきた方の一時受け入れをする。の3点が確認され、翌21日より2月5日までの間に計7回の募金活動が精力的に取り組まれた。

このきわめて迅速な対応が出来たのは、もちろん事務局を担ってくださった、めぐみホームの多芸先生、広野さん、そして機動力のある愛隣館の平田さんなどの尽力に負うところが大きであった。ただ注目すべきは、この会の

中核を担ったのが、「障害」児・者に関わる京都の本当に小さな民間団体ばかりであったことである。

この背景には、京都で「障害」児・者に関わる民間団体の「ネットワーク」が2年ほど前から形成されており、数ヶ月に1回ぐらいの割合で各施設を回り、活動の分かち合いと交流がなされてきた。施設同士というよりむしろ人と人の「連なり」が、今回の迅速な対応を生む基盤となった。

「ネットワーク」における交流とは、平たく言えば、共にわいわいと酒を飲み飯を食らうことである。つまりこの事により、日頃から共にわいわいと酒を飲み飯を食らうことがいかに重要であるかが、実証されたわけである。

さて、その後の活動において私ども京都市民福祉センターとしては、初期の2月から3月にかけて職員の福士を現地コーディネーターとして派遣した。彼女の働きが、初期の現地事務局の確立に少なからず寄与できたと確信している。ただ、その後私どもは法人の社会福祉法人化の作業に追われ、継続的に関われなかったことをお詫びしたい。

現地での働きを、「支援の会兵庫」が引き継いで担ってくださっていることに感謝申し上げたい。この報告書をもって京都での「支援の会」の活動を閉じることとなるが、今後共この「支援の会」で広がった「ネットワーク」に連なっていきたいと願っている。



第2章

京都での 一時避難活動

6

棚谷直巳

京都一時避難の始まり

あの1月17日、私はいつも通り、バイト先の精神科診療所にバイクで通勤した。兵庫県・大阪を襲った地震が甚大な被害を出していることは、テレビの報道で初めて知った。テレビはヘリコプターから、被害の大きさを絶叫口調で伝えていた。けれど……。『あの炎の中に、私の関わる『いこいの場』に来たことがある人がいるのだ』とひとりひとりの顔を思いうかべてみた。すると、「他人事ではない」という気持ちになって、電話やハガキを被災地にいる「知人」に送り続けた。でも、電話が通じたのは18日の早朝がやっとだった。つながったのも半分の人にすぎなかった。「アパートが壊れたけど、たまたま助かった」「薬がない。電車も道路も壊れて病院も行けないので、仲間のを分けしてもらっている……」電話の向こうの状況を聞いたが、どうしていいかわからない。

その晩、私の教会の牧師で、めぐみホームの所長をしている多芸さんから電話が入る。「被災した障害者の支援を私たちはするべきだ」と。

翌日、その準備をしていたところに「Tさんがもう限界だ。すでに、そちらに向かっている」と神戸から電話が入る。「支援の会」の結成が決まるや、会議を抜け出して、教会でTさんの到着を待った。これが、被災「障害」児・者支援の会の「京都一時避難」の始まりだった。

「一時避難」に10人の人がいろいろな形できて、ひとときの宿を取り「休養」しては、また神戸に戻って行かれた。京都に住まいを決めた人もいた。その後、不慮の事故でなくなった方もいた。「あの地震さえなければ」と悔しい思いをした。「支援の会」ではよく、障害者を取り巻く地域の人間関係が壊されたこと

が一番つらいことだ、という言葉を書く。精神障害者にとっても、避難所やその後の仮設住宅・公営住宅は、それぞれが、つらい新しいスタートだと話を聞く日々……。

一時避難には、さまざま人が支援者として加わった。障害者、とりわけ一時避難の主要な利用者の精神障害者と一度も出会ったことの無かった人も、「一緒に宿をとる」「同じ時間を過ごす」という大事なお手伝いをしてくださった。驚くことに、その人たちの半数以上が、現在精神科の診療所や作業所で働いている。「支援する」のは一方的なことではなくそれぞれの自分の人生との新しい出会いでもあった。

被災地の状況はいつも新しい課題を持っている。京都の支援の会が神戸に引き継がれたとき、京都一時避難（というより、一時休養が今は正しい表現かもしれない）は続けることが、会議で確認された。また、新しい「始まり」だ。

結果として、一時避難の利用者は精神障害者がほとんどだ。でも、「被災地に孤立している精神障害者を始め多くの障害者がいる」と、「休養」に来た方と、今も語り合っている。「被災」のもたらした問題はまだまだ続くと思う。また、新しい出会いも、これからあると思う。

最後に場を提供してくださった教会と、いろいろな「出会い」をもたらしてくれた「一時避難」利用者の人に、この活動に今も関わって

いる者のひとりとして、感謝します。

◆（経過報告）

1月19日～5月（震災直後の活動）

京 都一時避難の始まりについては、別項にふれたとおりです。Tさん以外にも、文字通りの「避難」の形で京都の病院への転院を援助した方がいました。その際には、病院のお医者さんやケースワーカーさんにも様々な協力を頂きました。「支援の会・京都一時避難」の活動としては、避難宿泊支援の他、ガイドヘルプ等の転院の支援が中心でした。震災の直後、現地の精神科の病院・診療所では、電気・水道もない中で患者さんを看ていたり避難先として、病院の廊下までベッドを置いて奮闘したと聞いています。

その一方で、被災地から離れた大阪の「処遇が悪く、人権侵害の事件が続いている」ことで知られたY病院が、自分の病院に患者さんを集めるために暗躍し、被災地に積極的に救急車を走らせているという噂が流れていました。噂は現実となりました。「自分が知らない間にY病院が、明日迎えにくると言ってきた。Yだけには行きたくありません。京都の病院に転院したい」との連絡が「京都一時避難」に入りました。多くの方の支援で、京都の病院に移ることができました。

避難というよりも、被災地から「休養」のために京都まで泊まりに来た人々もいました。

「障害者」だけでなく、遠隔地から来た現地ボランティアも休憩に訪れました。

それらの活動と同時に、現地、神戸の「支援の会」や他の団体との連絡を取り合い、緊急必要事項として行ったのが「精神医療SOS」の避難所等へのピラまきでした。それは神戸で避難生活をしているKさんの次の言葉がキッカケだった。

「精神障害者は、自分の病気のことを周囲に云いにくい。避難所を回っているけど、どこに相談できるのか…自分の通っていた病院・診療所は開いているか…そうした情報を何らかの方法で伝えられないかと思うのだが、どうしていいか困っている。避難所で、しんどそうな人を見かけるけれど隅で毛布をかぶってじっと耐えている様子だ。さりげなく『どこか体調の悪いところはないですか?』というふうに聞くのがせいっぱいで辛い…」

ピラは神戸・大阪の「障害」者・自助グループ・人権センター等の団体の協力を得て作られました。全国からボランティアで来ていた各区保健所の救護センターの精神科担当ドクターの多くは、私たちの活動の趣旨を説明すると好意的に受け止めて、連絡先等を教えてくれました。精神医療人権センター等の情報を整理して、『あいています!あなたの町の精神科クリニック』として、被災地で開いている病院・診療所の名前もピラに書きました。配布は、被災「障害」児・者支援の会の案内ピラとともに東灘区を中心に各避難所で行いま

した。

現地神戸の支援の会のメンバーと一時避難に来ている精神「障害」者も積極的に配布に参加し、入口などに貼らしてもらいました。十分な効果のある情報伝達方法ではなかったかもしれませんが。しかし「被災」の現実の中で、精神科の病は「他人事ではない」という自然な受け止め方で、避難所の方もピラを貼らせてくれたと思います。交通や情報が遮断された中で必要な情報を一歩でも、近い場所に伝えることが大切なときでした。(ピラ配布の詳細は別項参照)

5月15日には、京都一時避難は長期化するという見通しから、ガイドヘルプとして一緒に宿泊するボランティアのあり方について、利用している人も含めて話し合いました。「利用する側からの要望に応じて、ガイドヘルプ要否を1週間単位(2泊3日)で決める」ことになりました。

1995年6月～入院先及び現地 避難生活からの一時休憩

京 都の病院に入院中で外泊先として、「一時休憩」にくるTさんは、「夜間の不安発作を抑えるのには、誰か安心して一緒にいられる人がいれば助かる」との希望から、ガイドヘルプをローテーション組んでする事にしました。ガイドヘルプの基本姿勢は「いっしょにすること」「一緒に居ること」で、食事の用意や買い物を一方的にす

るものではない、ということ柔軟に繰り返し話し合ってきました。

民間の避難所から一時休憩にくるKさんは「ひとりでそっとしておいてほしい」という希望があり、Kさん一人の時は、ガイドヘルプも入れないよう柔軟な形を取りました。

後に仮設住宅入居後も「一時休養先」としての京都の必要性が問われることとなります。仮設住宅での新しい人間関係、薄い壁などの環境等を考え「息抜きの場」として一時休憩は続きます。同時に、おふたりからは「自分たちだけでやっていきたい」という希望を出されたので、要望があればガイドを付けるという形にしました。

ガイドヘルプには、多様な人々がかかわりました。基本姿勢をはずれて、自分勝手な押しつけの支援をしない人ならばだれでもガイドはできました。このことを通して、「精神障害」者の「介護」は専門の知識などよりも人間同士の常識的な対等な関係づくりから始まることを、私たちは教えられたのでした。

被災地から京都までの交通費支援は、当初「安心して、休養にこられるように」という目的で、被災した「障害」者の支援の一つとして(延べ31回)行われました。ガイドに入ったボランティアと一時避難を利用した人々との交流会も7月と9月に行われ、基本姿勢の確認等を行いました。

1996年4月から(仮設住宅・公営住宅からの問い)

ガイドヘルプの要望はなくなりましたが、一時避難先になっていた西小倉めぐみ教会は、「精神障害」者の「いこいの場」を同じ建物でしていたので、そのいこいの場の利用者・スタッフと一時休養利用者との交流は続きました。具体的には神戸・西宮と京都府との間の情報交換が自然発生的に始まりました。神戸の状況を、生の言葉で直接に、支援の会の周辺にいる京都の「精神障害」者は聞くことができました。ガイドヘルプにかかわった人たちで、いこいの場や精神科診療所を働き先として選んだ人もいました。

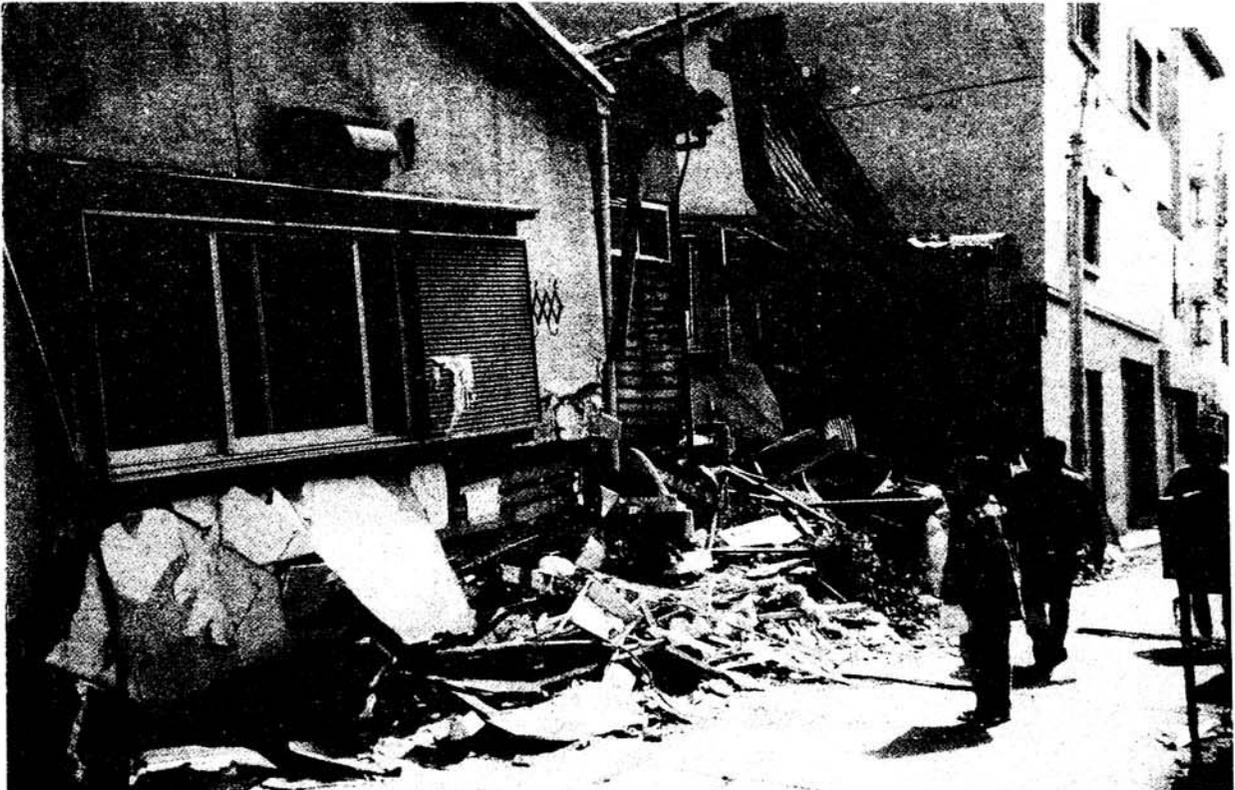
そうした一方で、公営住宅への入居が震災からまる2年たっても、決まっていない一時避難利用者の現実が今もあります。公営住宅は、本当に安心して「障害」者が住める、人間と人間のネットワークがある「地域」なのか…、壁が厚くなって、夏冬の電気代、すきま風の音に悩まされなくなることだけが「安心できる住居」なのか、という議論が一時避難に関係した人とその周辺から聞こえています。

交通費支援は現在も一時休養を続けているふたりから「自分のためにここに休養にくるので今後はいりません」と96年10月に辞退されました。かつての「障害」者のネットワークに積極的に関わっていかれたり、様々な模

索をされています。

別項で触れたとおり、京都一時休養は京都被災「障害」児・者支援の会が兵庫に引き継がれた後も、継続することが確認されまし

た。いつこの活動を閉じるのかの議論でなく、今、何が議題なのかを問いながら、また、自分たち京都の「地域」を問い直しながら、この章をひとまず閉じたいと思います。



忘れられない日

1995年1月17日私は友人の結婚式に出席し、最終電車で家に着きようやく眠りについてその瞬間、震度7の阪神大震災が神戸の町を一瞬にして地獄の町へと変えてしまったのです。被災「障害」児・者支援の会通信の第3号に私の体験談を載せていただいておりますので、ここでは省略させていただきます。

私が京都に一時避難したのが支援の会との出会いであり、また、全国から駆けつけてくださった多くのボランティアの皆さんとの出会いでした。

私は障害者なので、日常生活の中でも多くの人との出会いを経験してきましたが、あの震災の時のような出会いは経験がありません。それほど多くの人々がこの神

戸に住む障害者のことを心配し、ある人は自分の職業を捨て、またある人は学校を一時休んでまでこの支援活動に専念してくださったのです。

あの時から1年半がすぎ神戸の町は何事もなかったかのように表面上は、はなばなしい復興を成し遂げています。でも、町の裏通りに一歩足を踏み入れれば、多くの更地や仮設住宅が建ち並び、そこには復興どころか自分の住む家の再建のめどが立たない多くの高齢者、障害者たちが寒い3度目の冬を迎えようとしています。そういう痛みを私を含め、多くの神戸に住む人たちは、忘れかけているのではないのでしょうか？最近、障害者団体の会議で問題として取り上げられていることの一つに、

震災前地域で暮らしていた障害者が、震災のため施設に一時的に保護され、そのまま地域に帰ることなく施設生活を余儀なくされているというケースが増えています。そういった実体はマスコミにも取り上げられていません。今後、神戸に住む障害者としてこのような問題にどう取り組んでいけばいいのかという大きな課題を抱えながら日々の生活を送っております。

支援の会であった皆さんとまたいつの日かお会いできるその日を楽しみにしています。



「ほっとさせる人間」とは

ご無沙汰しています。お元気でいらっしゃいますか、皆様。僕は一応あるところに就職し、そこで忙しい毎日を送っています。また機会があれば立ち寄らせていただこうと思っていますので、そのときは宜しくお願い致します。

僕が被災「障害」児・者支援の会とほっとハウスを知ったのは、概ね今から1年半ほど前で、阪神大震災が起こった頃辺りです。震災が起こり、自分に何か役にたつことは出来ないだろうかと考えているうちにめぐみホームのことを知りました。道を歩いているところに目に入ったのです。めぐみホームのことを知った当時は、被災地で援護物資の運搬支援や仕分けの支援、地域の実態調査などを行っていて、ほっとハウスには関与していませんでした。そしてその当時、学生時分だった僕の春休みが終わろうとしていたときに、棚谷さんから、被災した障害児・者を支援しませんかという電話が入りました。確かに以前、支援の会に電話登録させていただきましたが、いざ頼まれると、本当に僕のような何の知識もない人間が、こんな重要なお手伝いをしてもいいのだろうか、資格、専門的知識が無いとお役に立てないのではないかと、いろいろな不安が募り、お手伝いをするに自信がなくなってい

きました。棚谷さんは電話を通して聞こえてくる僕の声だけで、あなたなら大丈夫だとおっしゃいましたが、それでもなお不安は残りました。お手伝いがそんな容易なものではないと思っていたからです。しかし、実際、皆様と対面してみると、棚谷さんがおっしゃっていたことが少しは理解することが出来たように感じます。僕がおこなったことは、お手伝いというよりは、皆様と一緒に話を交わしたり遊ぶといった催し事に参加するようなことだったように思います。ですから何の気兼ねもなく、毎回皆様と会うのが楽しみで参加できました。皆様とお話をし、盛り上がったときはとても心が充実しました。おそらく僕の心が安らいだときは皆様方も心は安らいでいたかと思います。お互い気を遣うことなく心がほっと落ち着くことが出来る場がそこにあったと思います。それが「憩いの場」です。僕は人をほっとさせる人間を棚谷さんは探していたのではないかと思っています。実際のところ、僕は皆様に対してあまりほっとさせる場を作ることが出来ませんでした。役不足で申し訳ございませんでした。

僕は一応、ボランティア活動する為にほっとハウスに行かせて頂く筈だったのですが、皆様の期待に応えられない人間で終わり、逆に

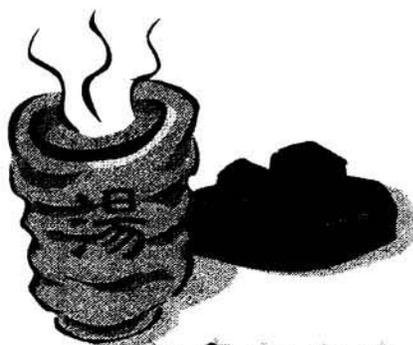
皆様にお世話になる結果になりました。皆様から教わったことは数え切れないほどありまして、学ぶところが多かったと思っています。未だに消滅しない差別問題、被災地の現状などについては、よく棚谷さん、高瀬さん、津田さんなどから話を聞かせていただきました。

僕も勉強不足でよく把握していませんが、障害を持つ方の現状を見、意見を聞き、それらのことを十分に考慮した上で、国が適切な判断を出すべきだと思います。今の国は、これらの問題を本当に真剣に考えているのか疑問を感じます。もっとさらに身近な問題として捕らえなければならないと思います。今以上に福祉については充実してほしいです。これらの問題については、国民一人ひとりがもっと理解を深め、議論しあわなければなりません。

もっと訴える人の声を聴いて頂きたいです。そうすれば問題は改善されるはずです。きれい事ばかり並べてすみません。しかし、これが僕の思った率直な意見です。

ところで、堂本さんは元気でいらっしゃいますか。いい詩を今日も綴られているでしょうね。津田さんはどうでしょう。一緒にバイクについての話をしたり、レンタルビデオを鑑賞したり、買い物をしたりといい思い出が蘇ってきます。そのときは本当に楽しかったです。高瀬さんには人生観について話して頂き、とても勉強になりました。

皆様、これからも健康には注意して、お元気でいらしてください。



お疲れさま

「病者」ペースで活動

あの日から1年半が過ぎた。

95年1月17日早朝の想像を絶する激震で外へ叩き出された僕はまだ薄暗いガレキだらけの路地から広い道へでた。その途中で傾いたガラス戸の奥から懐中電灯の明かりが揺らめいていて貴重品を大声で探し合っている声や家族の安否を気遣う声が交錯した。緊急時指定避難所の小学校の前に血を流した人が多く集まっていた。寒空と余震のもと素足にパジャマだけの人々がほとんどだった。家族・知人単位で小さく集まってなにやら不安げにヒソヒソ話し合い、ポツンと独りの僕に話しかける人など誰もいなくてその小学校の正門前で僕は孤立し、心底、寂しい思いをした。でも、周りがあるこれ気遣う中、僕は失う物もなかったのも、いっそ楽だった。

そのまま日頃行き慣れていた「障害」者のたまり場である六甲デイクアセンターへ向かった。地割れした道路の家が倒れ込み、ちぎれた電線が垂れ下がり、大きな色とりどりの看板が路上に落ちていた。毎日のように買い物に行ったスーパーマーケットは1階の店舗部分が消えてなくなっていた。六甲デイクアセンターまでの光景は一変して僕は心を揺さぶられ、気分が不安定なくせに舞い上がってしまって「今後」のことなど考える余裕もなく「今」があるだけだった。変わり果てた町並みを往きながら自分が生き残ったことを不思議に思っ

た。

六甲デイクアセンターで何とか落ち着いてから、ガス・電気・水道が寸断された中でジワリと現実が迫ってきた。〈通院していた病院は〉〈担当医は〉〈服薬していた薬は〉…情報が何もない中で不安な気分を癒してくれたのは、被災した「障害」者を支援してくれた人々の様々な行動だった。

「精神障害」者（以下「病」者）のためにと力を貸してくれた人々がいたのは正直驚いた。その人々と共に避難所回りしたり、電話連絡を取り合う中、僕のような者にも何かできるという一つの大きな信念が湧き起こった。でもその後、がんばり過ぎたこともあって、腰痛、風邪、皮膚ヘルペスを病んで近くの病院で点滴を受けながら這うようにして動いた結果、抑うつ症状の悪化で寝込んだ。この時「病」者にとって「がんばる」ことが症状の悪化につながることを再認識した。

その間、いろいろあって人間不信に陥ったこともあったが、多くの人に支えられ、今日に至る。今は仮設暮らしで、個人保証のこと「恒久住宅」への転居のこと等、問題は山積みだがこれまで、そして今も支援してくれている多くの人々にここで改めてお礼を述べたい。僕はこれからもゆっくりとポチポチと「病」者ペースで活動を続けていきます。

変わらぬご協力を。

一時避難での出会い

一時避難は、被災「障害」児・者支援の会の中ではあまり目立たない活動であったかもしれませんが。しかし私自身はその活動を通してほっとハウスやめぐみホームを知ることができ、自分が大きく変わった点で、大変よかったと思っています。

昨年の阪神大震災は、私の通っている大学が神戸市内にあったことも関係して、何か自分ができることはないかと、内心奮い立つ思いがしました。そんな折り、広野さんが、私の行っている宇治教会で被災「障害」児・者支援の会が発足したことを告げ、牧師婦人に相談した結果、メンバーの一人に加えていただくため、めぐみホームに電話し、その翌日広野さんからホットハウスでの一時避難の仕事を依頼されたのでした。ほっとハウスに始めていった日は、連日阪神大震災の話でもちきりだったそうで、私がつまらぬ話をし出したところ、話題が変わってよかったと棚谷さん（ほっとハウスの専従）に褒められて、少し変な気がしました。

その後しばらくは月、金の週2回行くようになり、1月末には棚谷さんと愛隣館の平田さん、ご自身が被災された上田さんと同行して東灘の六甲デイケアセンターまで行き、実際に起こった震災のすさまじさと復興、救援の

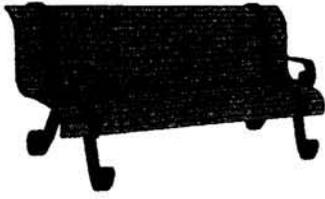
困難さを見て、がくぜんたる思いに駆られました。そのころから、被災された「障害」者であるTKさんやTTさんが一時避難にこられたと思います。彼らの夕食は棚谷さんが準備され、私は一緒にカラオケに行ったり、語り合ったり、寝たりといった具合で、お世話したというよりつきあったといった方がよいかもしれません。むしろ、冒頭でも書いたように、彼らから私は「障害」について、「障害」者について多くのことを学んだのです。そして同時に私が持っていた精神的苦痛が、彼らとつきあうことを通して軽減されていったのでした。

私は教会に通うようになってもう20年になりますが、その間何回か精神に疲労がたまり、神経症的症状を訴えることがありました。最近7年間はずっと精神科の病院に通っており、今年の3月には検査入院もしました。発病の最初が16才ですから、結構病気のベテランの部類にはいるかもしれません。しかし、実は昨日も発作不安におそわれ、トンプクを飲んでなんとか治めることができたような次第なのです。こんな私が最近はずいぶん快方に向かっていることは、ほっとハウスの出会いがなければ、ありえなかったでしょう。また私は信仰上の問題から長年通い続けた京都市内の

ある教会を離れ、今の教会に移ったのですが、もし教会を移らなかったら、広野さんとも知り合うこともなく、ひいては被災「障害」児・者支援の会にも縁がなかったと思います。私の

場合病気と信仰は、私の人格に深く結びついており、切り離すことはできません。これからも長い目で見て教会やほっとハウスとつきあっていきたいと思っています。





第3章 被災現地 での活動

11

矢崎和彦・平田 義

神戸現地活動拠点

神戸学生青年センター (以下学生センター)での 活動(2/11~4/10)

〈経過〉

1月20日に「被災『障害』児・者支援の会」が発足して以来、物資支援、街頭募金活動、京都一時避難受け入れ、西宮の作業所支援などの活動を展開してきた。活動を続けていく中で、現地での被災された「障害」者やその家族の方々の状況把握は、他団体から送られてくるFAXに頼る以外になかった。その情報だけでは、きめの細かい支援活動が展開しきれないとの考えから、現地に拠点を置いて活動することが2月9日の事務局会議にて決定された。

どこに現地の拠点を置くかの決定については、奈良「たんぼぼの家」がすでに、神戸市の各避難所を回って状況の把握と被災「障害」者のニーズの掘り起こしにいち早く着手されていたが、神戸市が東灘区から須磨区までの東西に広範囲にわたるために中央区から西を「たんぼぼの家」、灘区、東灘区を「支援の会」が引き継ぐこととなった。

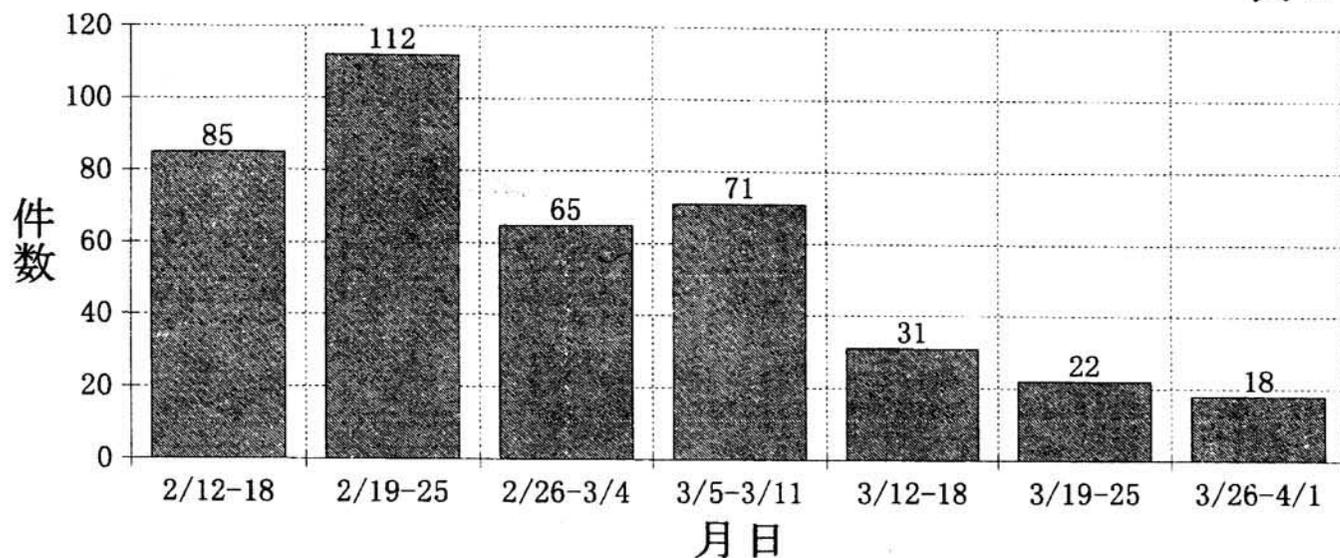
そこで、灘区にある「神戸学生青年センター」の一室をお借りして現地の活動を展開していくこととなった。その専従者には、北海道の「べてるの家」から長期ボランティアとして派遣されてきた藤原かおりさんが、2月の末までその任にあたり3月からは「京都市民福祉センター」の福士友子さんが、その後を引きついだ。また、現地責任者には、事務局か

ら平田義が担当することとなった。

(1) 避難所回り

避難所回り (1995年)

表 1



※一週間平均57.7件

現地での活動の第一歩は、各避難所を回り「支援の会」のピラ (※資料 1~3頁参照) と、精神「障害」者の方々の不安をとりのぞくことの一助として「精神医療SOS」のピラ (※資料4頁参照)を掲示することから始まった。行政から得た避難所リストにしたがって、灘区、東灘区の避難所を、片っ端から一つ一つ回っていった。しかし、リストにある避難所はすでに閉鎖されていたり、リストにはのっていない所にも被災された方々が避難生活をおくっておられたりと、日々の活動の中で、行政のもつ情報の曖昧さが浮き彫りにされてい

った。全国から支援に来られた多くのボランティアの協力によって、この酷寒の時期にもかかわらず、2月末には、ほぼすべての避難所を回る事ができた。

避難所を回る中で、数多くの被災された「障害」者とその家族に出会った。それぞれが、震災前においても様々な困難な状況を抱えながら生活をされてきたが、被災によって、より一層困難な状況に追い込まれていった。我々の活動は、できうる範囲で彼らの今の生活が安心して守られていくこと、また、今後の地域での生活の再建に向けてのフォローが成

しえるようにと展開された。その中で、避難所における「障害」者の生活がいかに困難な状況で問題をかかえていることが多々あるかが露呈されていった。

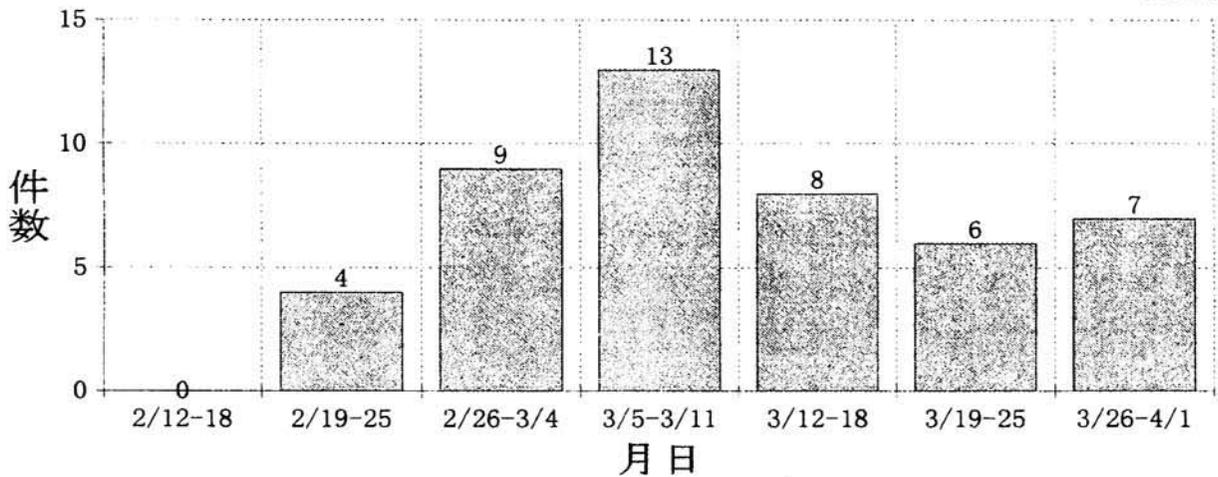
一例を挙げるならば、「障害」者が利用で

きるトイレがない、段差があるために移動が困難、集団生活に馴染めない知的「障害」者や精神「障害」者への配慮がなされていない、仮設風呂や自衛隊の風呂は「障害」者が利用できないなどの問題があった。

(2)入浴サービス

入浴件数（1995年）

表3



※一週間平均6.7件

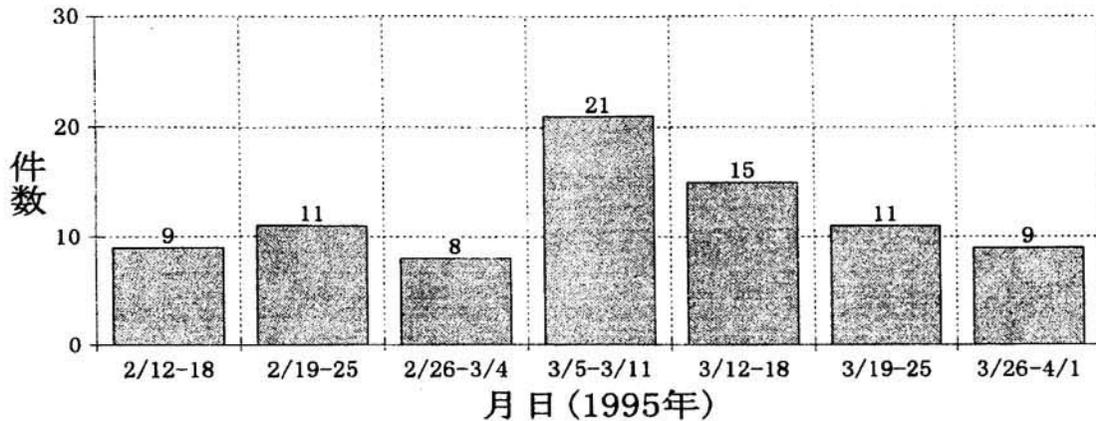
避難所を回る中で、避難所での入浴が困難な方を、神戸学生青年センターのお風呂を利用させていただき、入浴サービスを実施した。送迎、介護についても、必要に応じて提供した。この時期、一般の家庭においてもガスが復旧していなくてお風呂に入ることがきない

「障害」者も多数おられた。そのような方々についても、随時、希望に沿ってサービスの提

供を行った。「支援の会」の入浴サービスと出会うまで、震災後一度も入浴されておられないような方も多数おられ、具体的な支援の働きとして大きな意味を持っていたと言えよう。

送迎・ガイドヘルプ件数

表2



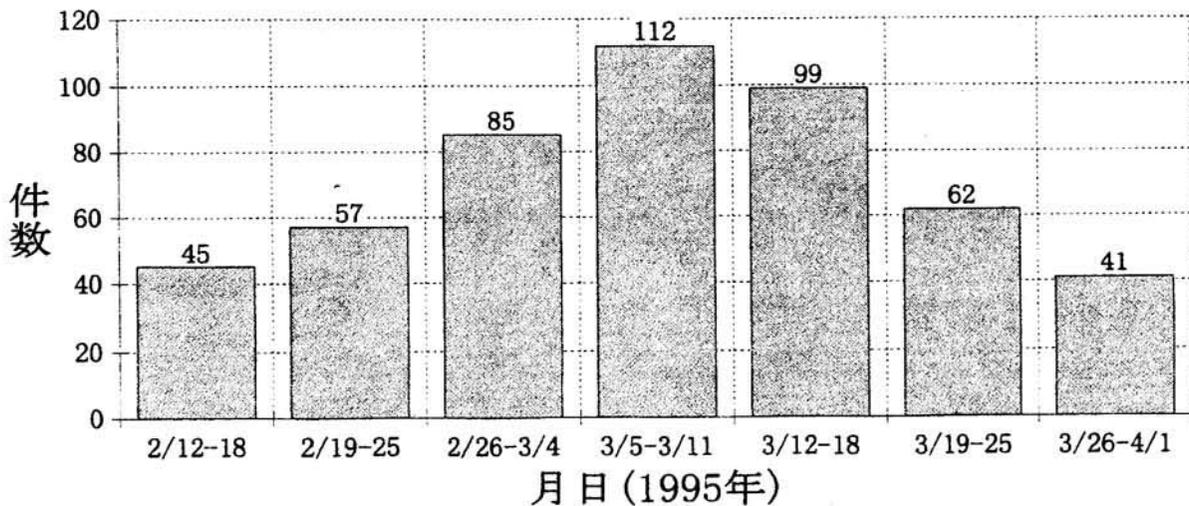
※一週間平均 12件

この時期、公共交通機関の復旧がなされていないこと、道路がガタガタであったこと、つぶれた家屋などで道がふさがれていたことなど、私たちにとっても移動することは大変困難な状況であった。そんな中、車イスを利用され

る「障害」者や、知的「障害」者の方々にとっては、外出することや授産所等に通うことは不可能に近いことであった。そのため、社会福祉法人神戸聖隷福祉事業団愛生園、友生園からお借りしたリフト付きの車やボランティア

ボランティア数

表4



※のべ総数 501人

アの車などを利用しての、送迎、ガイドヘルプサービスのニーズが多かった。

(3) ボランティアの動き

現地事務所を設置後、「支援の会」賛同団体のネットワークを通じて、全国各地からボランティアが次々と集まってきた。京都の事務局には毎日のように新しいボランティア希望者からの問い合わせが殺到し、人の手配におわれ混乱をきたす程であった。3月の初めには最大25名ものボランティアが活動し、21名が学生センターの一室で宿泊する大所帯となった。

学生センターでのボランティアの一日は、朝一斉に起き出すとまず寝袋と下に敷いていたカーペットを丸め、各々が朝食を取り、専従と今日の活動の確認をしてそれぞれ動き出す。2、3人がひと組となり早い人で朝8時くらいから徒歩やバイク車で動く。事務所と連絡を取りながら夕方5時くらいをめぐりに帰ってくる。そしてそれぞれの活動の報告書を記入し、全体でのミーティングを行う。一人一人がその日に出会った人たちの様子を話し、情報の共有を行う。そこで、なんらかの課題がでてくれば、専従者を中心に解決に向けての取り組みがなされていった。各々が、一日の活動を通じて感じる様々な思いを熱く語るために、ミーティングが時には数時間に及ぶこともあった。

なにより楽しみだったのがミーティング後の

夕食であった。夕食だけはほとんど自炊をしていた。学生センターの炊事場をお借りして全国からの手料理を満喫できた。いつの間にか新しいボランティアが入ってくると夕食を作らねばならないという慣習ができてしまい新しく人が入ってくる度に楽しみにしていた。そして夕食後にはどこから出てくるのかビール、お酒が並ぶ。ボランティア一人一人が一日の活動のなかで感じたさまざまな出来事、思いをみんなに分かち合った。そして、夜も更けてくると、カーペットを敷いて、学生センターから毛布をお借りして徐々に部屋の奥から寝袋が並んでいく。(寝るタイミングが悪く、最後にスペースがなく朝まで起きていた人もいるというエピソードもありましたが) 専従だった二人のFさんは共通して片手にビールをもち、もうひとつの手でペンを握り一日のまとめをして最後に寝ていた。



神戸雲内教会での活動報告

(4/3~6/11)

〈経過〉

3月末をもって撤退を決めていくボランティアグループが数多い中、「支援の会」は事務局会議によって、活動の継続を決定した。4月になって、被災された方々のニーズが減少していくことは考えられないどころか、問題の多い一般仮設住宅や高齢者・障害者専用の地域型仮設住宅に移ることによって、より一層支援の必要な方々が増加していく傾向にあることが明白であったために、今の時期に現地事務所を撤退することができないと判断したのである。

現地事務所開設以来、お借りしていた神戸学生青年センターの一室も、センターの通常業務に使用するために、他のボランティアグループと共に別の小さな部屋に移らねばならないことになった。しかし、その部屋では、活動後のミーティングもままならないことから、新しい事務所を探すこととなった。幸いにも同じ灘区の神戸雲内教会の仲本幸哉牧師が事務所にプレハブと宿泊に地下室を提供してくださることになり、4月3日に現地事務所を移動することとなった。この時期の主な活動内容は以下のとおりである。

1. 一般仮設について(資料参照)

仮設住宅には入居優先順位というものがある(資料)優先順位に従って抽選で決定された。第一次の募集は1/27で2月末ごろから入居が始まった。

支援の会で関係している方たちは、特に優先順位が第一位であったので、みんなすぐに当たるとかと思っていたが、かなり厳しい状況であった。なぜなら灘区、東灘区は特に被害が大きかったので、家を失った方も他の地域と比べて多かったこと。また仮設住宅を建てる場所も少なかったこと。自分の地域を捨て、全く知らない遠くの仮設に移り住むことは高齢者、障害者だけでなく誰もが敬遠し、灘区、東灘区の仮設住宅の倍率は数百倍になっている所がほとんどだったことなどが主な理由であった。そのような状況の中で、避難所での生活からいち早く脱出を望む方々は、北区、西区の倍率が低い、遠くの仮設にしょうがなく移っていく方々もいた。

【一般仮設住宅の問題点】

この仮設の最も大きい問題はすべて同じ造りになっていることだ。つまり、被災した個々の家庭の事情に関係なく、健常者が最低限生活できるであろうと考えてつくられた仮設である。高齢者、「障害」児・者の住居を前提にしていなかったため、以下にあげたようなような様々な問題が生じてきた。

- ・段差がきつい（部屋の間移動が困難）
- ・風呂、トイレが狭い（ほとんどがユニットバス）
- ・世帯人数の差（一人暮らしでも、家族7人でも）にかかわらず同じ住居
- ・仮設の周りは砂利で覆われているため車椅子が押せない
- ・隣との壁が薄く、プライベートが守りにくい
ため障害の有無にかかわらず自分のペースで生活できない。
- ・一つの場所に対して仮設の数が多く、自分の家がどこにあるのか解りにくい（夜に自分の家がわからずさまよい凍死したといったケースも）

郊外の仮設に移った方はもともと人が住んでいなかった土地に仮設住宅を建ててあるため更に

- ・医療、保健、福祉サービス等を含む公共機関が周辺に少ない
- ・交通の便が悪く、買い物すらも遠くまで行かねばならない

以上のことにより新たな人間関係、近隣、地域との関係がうまくいかず、そのための情報提供や相談所に欠けていた。私たちが授産施設への送迎を手伝っていた知的障害がある方の隣から、「壁を叩いたり、奇声を発して非常に困っている。何とかしてくれ」と福祉事務所に苦情が届いた。そのことによって、

本人が暴行を受けたことも聞いた。ケースワーカーと家族の相談で、入所施設に入ることが余儀なくされ、家族がバラバラで生活せざるを得なくなった。このようなケースはここだけの話ではない。仮設住宅の構造によって起こるトラブルは仮設で暮らしていく限り続く。

2、地域型仮設住宅について

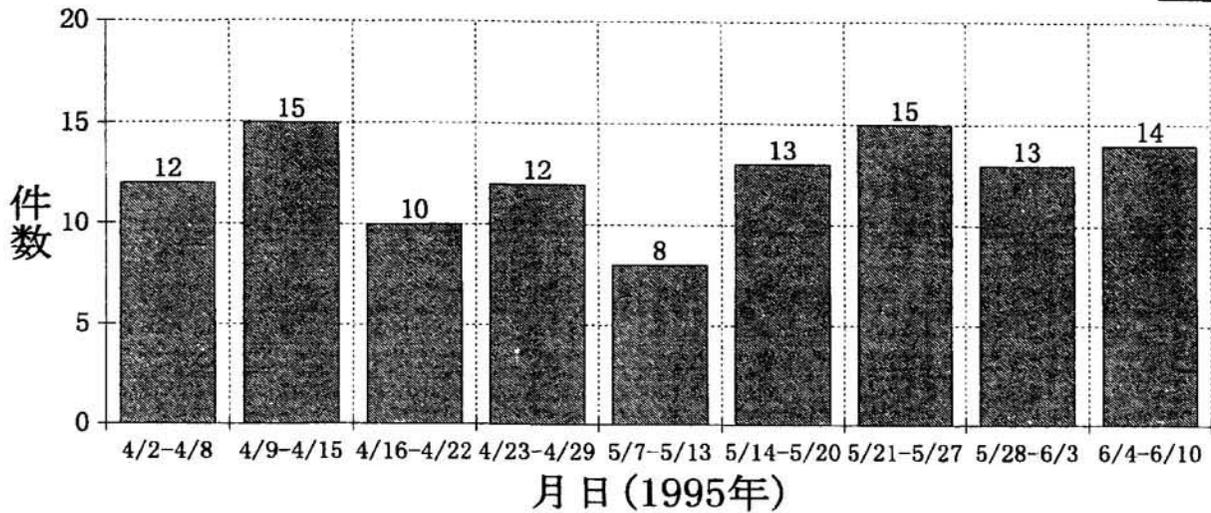
特にこの時期に「地域型仮設住宅」の建設が始まった。地域型は高齢者、障害者用に建てられた仮設住宅で、共同生活の寮形式である。相談員が常駐し、仮設生活の相談、行政との連絡等を行う。

この地域型の話をも初めて聞いたとき、支援の会のメンバー数名で神戸市民生部の復興計画担当者にこの仮設について話を聞いた。趣旨としては「避難所において、身体的、精神的に虚弱の状態にある高齢者、障害者等並びにその家族を対象に、従前の居住地から近い地域での生活を基本にし、早期に生活改善を図るとともにケアを含めて避難市民が安心できる対応を行う」といったもので、担当の課長さんも意気揚々と語ってくれました。ところが期待していた内容とは程遠いものとなっていた。（資料P5参照）



送迎ガイド・ヘルプ数

表5



※のべ総数112人

【地域型仮設住宅の問題点】

震災前に生活していた地域で住むことができるといった大きな利点はあったが、実際にできたものを見に行くととても障害者、高齢者用の仮設住宅として満足のいけるものではなかった。

- ・相談員は月曜～金曜の9:00～17:00しか常駐しない(当初は24時間常駐のケアつき住宅にするという話だった)
- ・原則として一世帯につき四畳半もしくは六畳の一部屋(募集人員が少なかったため、夏以降5人家族で二部屋入れたところもある)
- ・部屋に入るドアがスライド式の左右に開くドアではなく、車椅子に乗ったままでは入りにくい前後に開閉する引き戸
- ・お風呂は「入りやすいように浴槽を掘

り下げた」といっておられたが、狭いだけではなく、かなりまたがなければならない構造

・トイレも16世帯に3つ、しかも身障者用トイレが1つだけといった構造(後にひとつ付け足した)

以上のように仮設全体の構造の不備により、生活上かなり困難な部分が見受けられた。また、支援の必要な高齢者や障害者だけを集めることによって、避難所でみられたお互いが助け合って生きていく形態が奪われていった。しかし、避難している人にとったら避難生活と比べて選択するしか方法はなかった。どちらが住みよいかではなく、まだましかといった選択である。仮設住宅ができた当初は「とても住めない」といった声が多く、応募が少なかったが、これ以上のものがないとわかると徐々に入居していった。六畳一間に家

族4人が生活しているといった話も聞き、いかに避難生活が厳しいものだったかを想像させられた。

3. 送迎、ガイドヘルプ

この時期一部の電車の路線はまだ復旧しておらず、施設等に通所している方の車での送迎活動も継続した。一般の仮設住宅は、なかなか希望する所には入れなかったため、少々離れた仮設からでも時間をかけて通所しなければならず、送迎する方の負担は益々大きくなった。

仮設に移り住むということは、通所されている方だけでなく、定期的に病院に通院されている方にも大きな影響を及ぼした。特に高齢の方は、近くの病院に移らず、少々離れてて

も今まで通っていた病院に行きたいという人が多かった。老夫婦で車椅子を奥さんが押し、一日がかりで数ヶ所の病院を回る、しかも週3回以上といった方もおられた。そのため、病院への送迎が増えてきた時期でもありました。

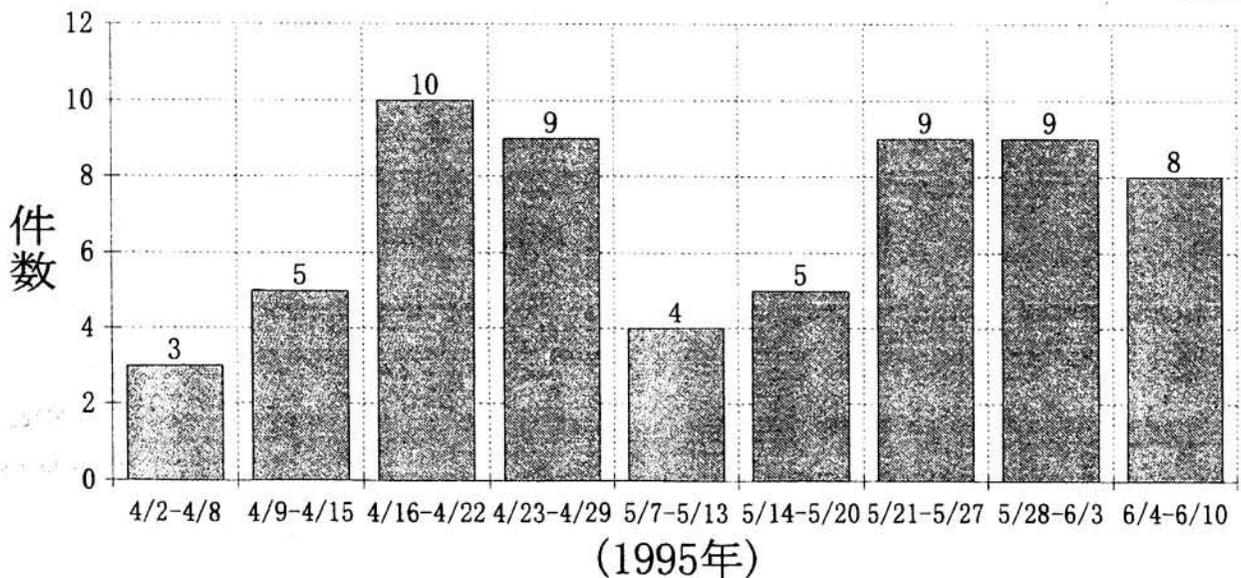
4. 入浴サービス

学生センターでは引き続きお風呂をお借りすることができた。そのため、入浴サービスも継続して実施することができた。

この時期にはガスもすべて開通していた。さらに仮設に移られる方が増えていくと、徐々に入浴を希望される方も減ってくると予想した。そのため、学生センターでの入浴は、週3日、午後のみとなった。しかし、仮設のお風呂が

入浴回数

表6



※のべ総数62人、1週間平均6.9人

あまり良いものではなく、実際のところは遠くの仮設に移られた方、視覚障害がある方以外に変動はなかった。さらに、ディサービス、老人ホーム等の各施設での入浴も、震災前の状態に戻るにはかなり時間がかかるとのことだった。一方で、公的な入浴サービスの申請の手伝いや相談も同時に進めていった。しかし、異性の家族による介助ができる入浴サービスもほとんどなかった。学生センターでの入浴は家族に開放することができたので、そういった公的なシステムの枠から外れた方々が利用することも多かった。

5. ボランティアの動き

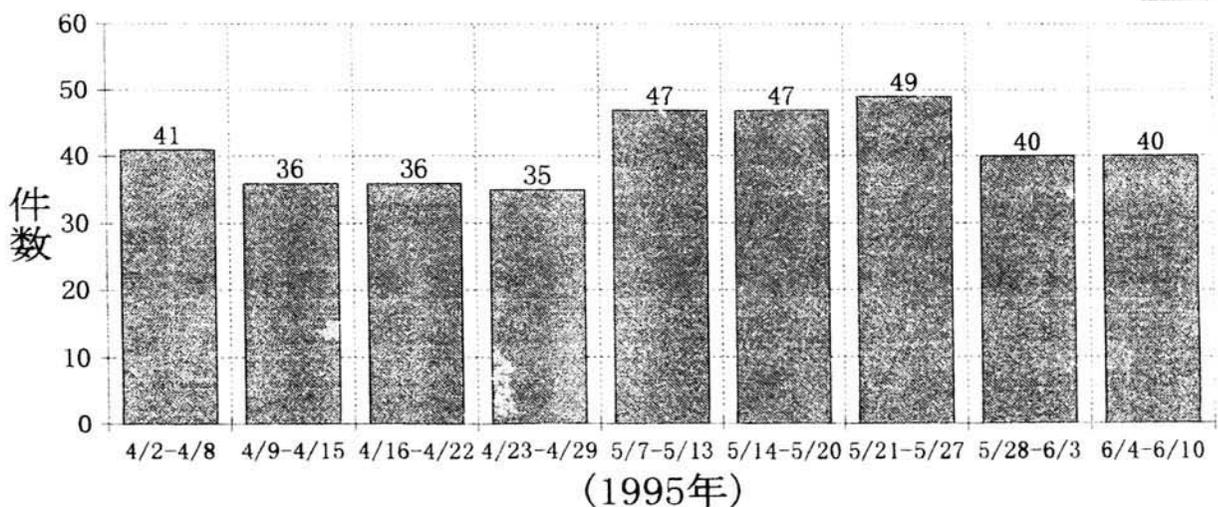
4月に入ると、春休みが終わり、大学生が

動きにくくなったため被災地におけるボランティアの人数も一気に減った。また、何でもやることがあった時期が終わり、訪問活動を筆頭に、全ての活動において定期的で確実に動けるボランティアが必要とされる状況になってきた。

そのため、今までのように入れ替わりが激しかった形でなく、泊り込みでは一ヵ月以上のボランティアを、また通ってこられる方は週1回以上で定期的に来て頂ける方を募集した。支援の会でも一日に動くボランティアがひと桁に減った。まだ地元のボランティアがなかなか動ける状態になっておらず、定期的、また長期的な活動をしていくには厳しい状況が続いた。

ボランティア数

表7



※のべ総数371人

クリスチャンセンターでの 活動報告

(95年6/11~96年4/30)

〈経過〉

4月から現地事務所としてお借りしてきた神戸雲内教会が、震災の影響で建て替えることになり、新たに事務所を探さなければならなくなった。事務局会議の中で、アパートを借りる話が持ち上がったが、今だに仮設住宅にも入れずに避難所で生活されている被災者がおられる状況の下で、被災者を支援する団体が、アパートを借りて活動をするわけにはいかないであろうとの判断により、どこかの施設の一室をお借りするしか道はないと考えた。日本キリスト教団兵庫教区に灘区、東灘区の教会や付属幼稚園などの部屋の借り入れをお願いしたが適当な場所が見つからなかった。そこで、期限付きではあったが、兵庫教区事務所の建物の地下倉庫を事務所として提供できるとの申し入れがあり、そこを使用させてもらうことになった。また、宿泊所は兵庫教区事務所の和室を使わせていただくことになり、畳の上で蒲団を敷いて寝ることができる今までにない快適な空間を確保できた。その後、支援の会の活動を兵庫教区伝動部各種伝道委員会の中に位置付けていただき、兵庫教区事務所の使用は支援の会が続くかぎり可能になった。兵庫教区のご厚意により、この時期

は、安定した活動が展開でき、支援の会・兵庫の活動へとつなげていくことになった。

「地域へ」他団体とのつながり

神戸入りした直後から他団体と連絡を取り合って活動を続けてきたが、この時期から特にその関係が深まっていった。各区にボランティアセンターが設置され、様々な情報が集まりはじめた。特に灘区においては月2回の連絡会議をもち、それぞれのボランティア団体における特徴、今後の方向性を確認しながら活動を進めることができた。また、東灘区においてもボランティアセンター専従者とまめに連絡をとりながらの活動であった。

特につながりがあった

ボランティア団体

- ・仮設改善、改修
- ・子供支援
- ・引っ越し
- ・仮設訪問
- ・何でもあり

特に、仮設改善、改修のボランティアグループとは、一緒になって活動を進めてきた。

仮設住宅の改善は、当初の大きな問題のひとつでもあった。仮設住宅の不備は前にも書かせて頂いたが、仮設住宅の入口にスロープをつけてくれたり、室内、浴室に手摺り等をつけ、また段差をなくす作業をして頂いた。神戸市では行政によるサービスが始まったのは

ボランティア団体が動きだしてから3ヵ月以上たった8月に入ってからであった。ほぼボランティア団体が回りきった後であった。行政の対応の遅れはここでも浮き彫りにされた。

各ボランティア団体との繋がりは本当に大きかったが、支援の会発足当初の目的としてある「地域の復興」に、はたして地元の間人ではない、また特に近畿圏外のボランティアも多く活動している京都のボランティアグループがどこまで手をつなぐことができ、また手を延ばせるのかといった問題をボランティア間で日々格闘しながらの活動であった。

行政とのつながり

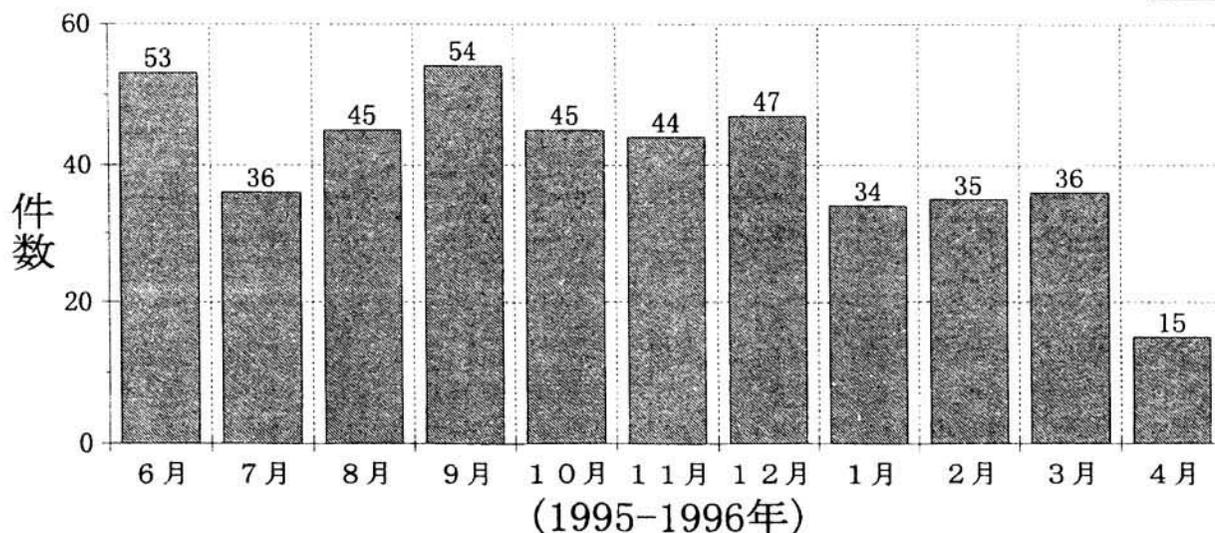
他団体とのつながりがそうであったように福祉事務所、保健所をはじめとする各行政機関とのつながりの上でも問題が山積みされ

た。

社会福祉協議会を主体としたボランティアセンターでの連絡会議において、様々な情報を得ることができ、また各種助成金を交付して頂いたりと確かにプラスな面もかなりあった。しかし、ボランティアとは一体何者なのだろうかと考えさせられる側面が多かった。ある団体は、ボランティアを派遣している神戸市の外郭団体である。そのような公的団体からボランティアの依頼を受けることが多くなってきた。私たちが地元神戸に返していきたいケースが、「どこも受けてくれるところが無い」「私たちの規定に合わない」ということで、逆に依頼を受けざるを得ない状況自体どこかおかしい。確かに私たちができること、支援できることは引き受けたい。しかし、これは私たちが引き受けるべきことなのかと苦悩するボランティア

送迎、ガイドヘルプ数

表8



※のべ総数444人, 月平均40人

が増えてきた。「私たちがいることで逆に被災地の真の復興を遅らせているのではないか」「依頼を受ける基準とは、その線引きをどのようにすればよいのか」ミーティングで何度も話し合いがなされた。

送迎、ガイドヘルプ

社会福祉法人「イエス団」から2台の車椅子がそのまま乗れるリフト付き車をお借りできたため、クリスチャンセンターで活動するようになってから、支援の会で動かすことのできる車はリフト付き車2台、軽自動車2台の計4台となった。そのため、病院、各施設、入浴の送り迎え等送迎、ガイドヘルプ活動が充実して行なえた。

私たちとしてはただ単に送迎、ガイドヘルプ活動をするのではなく、現行の福祉制度を利

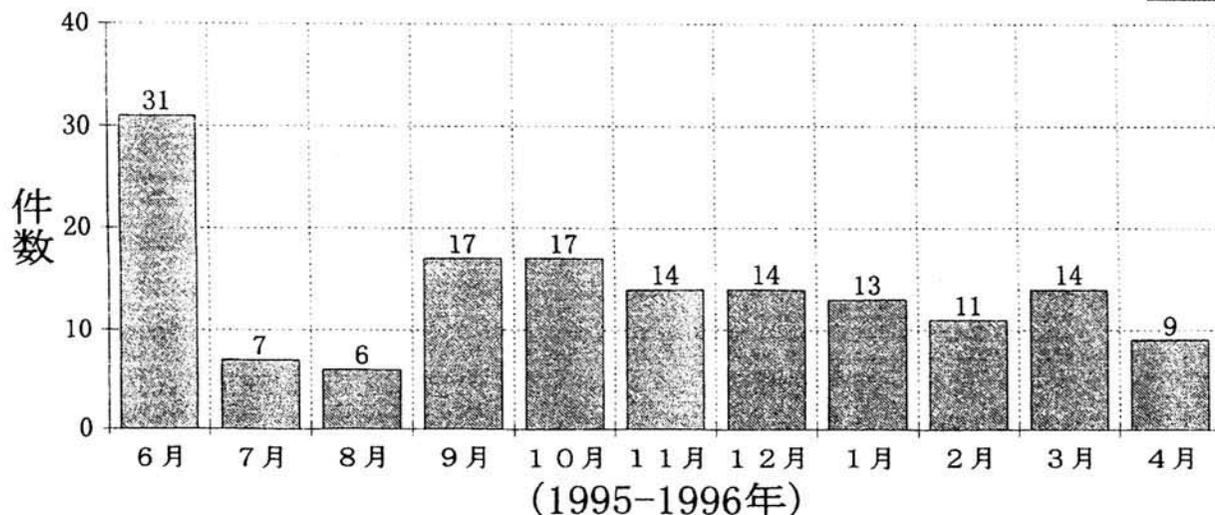
用できればその方が良くことだと福祉事務所に一緒にいったり、各ボランティアセンターに相談にいったりもした。しかし、特権のひとつであるタクシーの障害者割引の制度にしてもなかなか利用しにくい状況にあるようだ。運転手がその制度をよく理解していなかったり、露骨に嫌がったりして安心して使えないといった声も多く聞こえるのが現実である。

入浴サービス

この時期から仮設住宅での入浴介護、浴室の準備、清掃の依頼を受けることが多かった。特に地域型仮設住宅では、ひとりで入浴することができる方もきれいに準備、清掃ができないために、隣近所とのトラブルの元になるという。仮設住人同士でお互い協力してやればと思うのだが、今までなれ親しんだ人

入浴数

表9



※のべ総数153人、月平均14人

間関係でなく、知らない人間同士が様々な地域から集まり、新たにスタートしたばかりで、気を使うという声が多かった。

学生センターでの入浴はクリスチャンセンターに移った後も継続されたが、夏の間は工事をしていたので銭湯を利用することが多くなった。

銭湯では神戸市が「ふれあい浴場」という高齢者、障害者を対象に銭湯の浴室を開放するといった福祉サービスを実施していた。東灘区では震災後1年程経ってからの実施となった。また、震災後すぐに実施されていた灘区においても次のような問題点があって利用しにくかった。

- ・区に一ヶ所しかない
- ・月2回、2時間のみ開放
- ・誰か利用しているときは入れない

- ・異性介護は出来ない
- ・予約できない

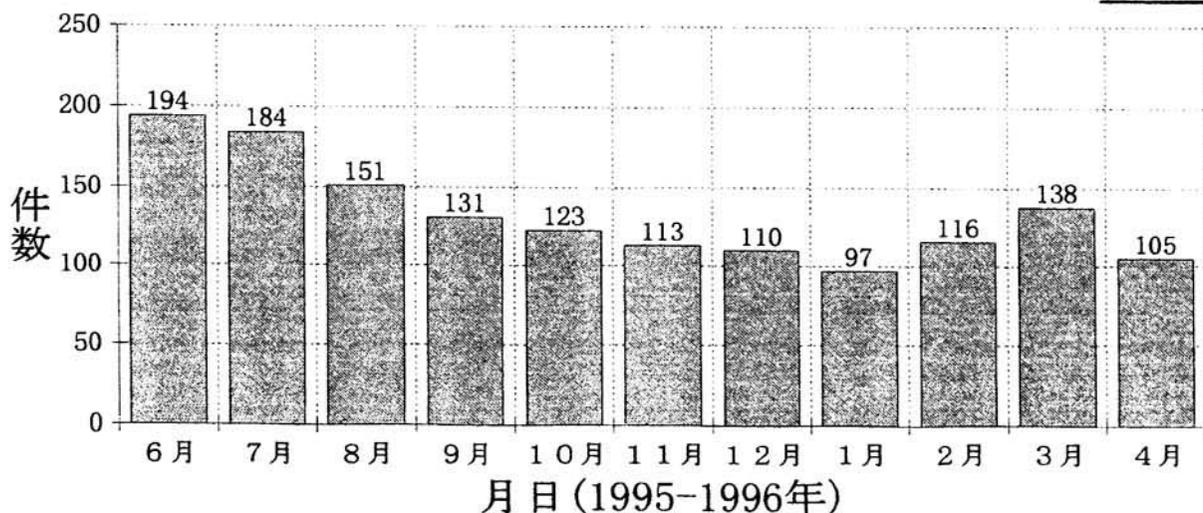
結局、ひと組み1時間の計算で男湯女湯、最大8組しか入れることができない。(利用者はほとんどいないと銭湯のご主人はいっておられたが)確かに、この条件では一般の時間を利用するだろう。形だけでなく本当に利用しやすい環境を作ってほしいと皆が願っている。

ボランティアの動き

また、ボランティア間での様々な問題が生じてきた時期でもあった。支援の会という一つの組織の中で、被災地における「障害」児・者、および高齢者を支えるということでは共通していても、その各々の思い、方法、見解の食い違いが表面化してきた。激しいミーテ

ボランティア数

表10



※のべ総数1462人、月平均133人

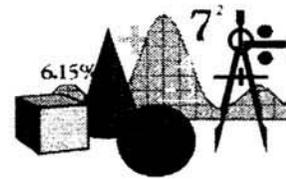
イングになることも多々あった。緊急ボランティアから、恒久的なボランティアが求められていく流れのなか、私たち一人一人が神戸のこれからを深く考え、活動内容も大きく変わっていく時期だった。

一方で、今までは遠隔地から数ヵ月の長期ボランティア、被災地外からの定期的ボランティアが多かったが、地元の人で週数回、定期的に活動してくださる地元のボランティアが徐々に増え始めてきた。今後の活動の方向性を考えてみると地元でのボランティアが活動でき、協力して頂くことはとても大きかった。

「支援の会・兵庫」へ

「支援の会」の現地活動は、震災前の状況に戻るまで続けていこうと考えてきた。しかし、被災の状況はあまりにも厳しく、地域が本当の意味で復興するには、長い年月がかかると予想され、被災者のニーズもこのまま変わらず存在し続けることは明らかである。「支援の会」としては、できるかぎり地元のグループや

行政機関などの公的な支援体制が恒久的に安定して、被災者が受けられるようにと活動を展開してきた。そのためには、できるかぎり地域の人たちでその課題を担っていてもらうほうがふさわしいであろうと考えてきた。幸いにも、これまで協力関係団体として共に活動を担ってきた兵庫教区伝動部各種伝道委員会が、「支援の会」を引き継いでいくことになった。1996年5月より新たに「支援の会・兵庫」として東灘区、灘区での活動が現在も展開されている。



【①神戸学生青年センター】

12

川上 恒

「Kさんとの出会い」

私が震災後の神戸に支援の会のメンバーとして足を運んだのは2月13日のことでした。それから延べ約3週間現地での活動に参加したわけですが、その中で一番印象に残ったのはKさんとの出会いでした。

避難所廻りをしていたある日、或る避難所で右半身が麻痺して困っている人が居ると聞きました。その人がKさんだったわけですが、Kさんはその時、風邪を引いて甲南病院に入院していました。甲南病院に行ったら私たちはKさんとよく話をしました。Kさんは70才くらいの男性で妹さんがいます。

2人で暮らしていた時に震災にあわれたわけですが、

Kさんが入院している間、妹さんは避難所に避難されていました。私はこの時2人の大きな兄妹愛というのに出会いました。Kさんはいつも妹さんのことを心配し、自分が動けないから妹さんに負担を掛けている、と思い、いつも妹さんの手助けを求めておりました。一方妹さんは、兄が右半身麻痺になったのは直接的ではないが自分のせいだとおもっていました。だから動けない兄の分まで自分がかんばらないと、していました。

この二人の兄妹は震災前から必死に生きてこられました。そして震災後のより困難な状況の中でもお互いが心配しあい、助け合う姿勢を忘れられていなかったの

す。私はこの二人の助け合いながら生きている兄妹愛に感動し、自分に何か助けられることがないか考え、可能な範囲での援助を行いました。あれから1年以上経って、一度も会っていませんが、今Kさんはどうしておられるのでしょうか。元気で二人で暮らしておられることを祈ります。



当時の活動を振り返って

縁があって、支援の会の被災現地での活動のスタート10日間ほどに参加させてもらった。もちろん、めぐみホームでいろいろと説明を受けていったものの、正直な所自分がいったい何をするのか漠然としかわかっておらず、活動をしなから理解をしていくことが多かった。

最初は、とにかく支援の会の存在を現地に知らしめるのと情報収集ということで、ひたすらピラはりと避難所巡りであった。仲間との打ち合わせを終わると、ドカヘルをかぶり軍手をはめてオンボロバイクでいざ出動。道路のトラックとゴミ収集車が、ガンガン走り、また穴ぼこや段差やきれつがそこらじゅうにあって、タイヤを弾ませながら相棒と共に地図を片手に走

り回ったことが今となってはなつかしく思える。

地図の避難所らしき建物を一つずつまわり、時には徒歩で電信棒の一本一本にピラを張ってまわったりもした。わざわざ行った所でも、当てが外れたり、ただムッとされたり、散々たらいまわしのあと何の成果もなかったりと、まさしく模索と失敗の毎日だったように思う。いろいろまわるうちに、避難所の状況の違い、そして、そこにいる障害者の人達の状況の違いをつくづく感じさせられた。

名前は勿論、障害の種類、居場所、体調、心情まで把握している所もあれば、リストをめくりまくったあと、「障害のある方が、居るかどうかもわかりません」という所も

あった。何日かたつと、問い合わせや依頼の電話が入るようになった。また避難所にも入らず、2人の障害者を抱え、細細と暮らす家庭が見つかったりした。行政などの何の網の目にもかからない弱い存在であった。いろいろ手伝ううち、何かあった時に弱いものに目を向ける感性の大切さとこの会の意義を感じさせられた。最後に酒を飲みつつ語り合い十分エネルギー補給をして共に次の日の活動に臨んだ仲間にも感謝したい。



“一つの出会い”的発見

この被災「障害」児・者支援の会とは本当に偶然的な出会いでした。阪神大震災のことをニュースで知り、大きな衝撃を受け、友達と学校でそのことについて話し合っているうちに、現地に行きたくて状況を見てきたいということもあり、何かボランティアできないかと考えました。学校のボランティア主事の先生に相談しにいて社会福祉協議会のボランティアに登録しましたが、新潟は遠いということではなかなかここまで要請が来ないということでした。そのうちに先輩の稲垣美穂ちゃんからめぐみホームが主体となってやっている、この被災「障害」児・者支援の会を紹介され運良く一緒に行くメンバーにも恵ま

れて神戸へと向かいました。

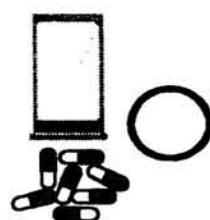
大学で必須となっているボランティアなどには参加したことはあったけれども、この支援の会のような本格的なところではボランティア活動をしたことはありませんでした。実際行ったのは1週間だけでしたが、他にはない体験をさせていただきました。

内田直ちゃんと一緒に灘区を歩いてまわり、街を見たり、神戸の人と出会ったりし地震の後の絶望的な悲しみから少しずつ立ち上がって行こうとしている人々、助け合う神戸住民の人々を見て多くのことを感じました。もう少し早く神戸に来られたらもっと多くのことが手伝えたのではないかと思います。

この支援の会の人達との出会いもまた大きな感動でした。各地から来たボランティアの人達の、ボランティアに対する熱心さ、そして明るさに励まされた事は何度かありました。

この体験が与えられたことに感謝し、またこれから生きていく中で時々思い出すことになると思います。

1996. 7. 31



残したいのは感謝

エクこと内田直です。

女です

支援活動を地元の人達につなげたいという想いが、「支援の会兵庫」という形を取れたしたこと、とても嬉しく聞きました。おめでとうという言葉は、適切ではないのかもしれませんが、皆様、「やったね!!おめでとうございます。」

私は昨年2月中旬から下旬まで神戸に居、そこで20才になりました。避難所も廻り、「障害」を持った方を探し、そのかたの要求にできるだけのことをすること、エンピツの家に通うカヨちゃんの送り迎え、これが私の活動でした。

「エクちゃんにしか見えな
いものがあるのだから。エク
ちゃん、エクちゃんがいいん
だ」と会の人に励まされ、勇

気づけられ、毎日避難所を
訪ねて、灘区(?)を歩き回
りました。

「同情なんてするな!」と怒
りをぶつけてくれる人、冷た
く対応する人、「寝てばかり
いられないし、立ち上がろ
う」とする人達、「どんなに
なっても助け合っていく」姉
妹愛、「新潟に初恋の人が
いるの」って話してくれるお
ばあちゃん。「大切なものか
ら目を逸らすな」と語ったI
さん、色々な人に逢いまし
た。

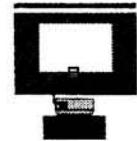
自分を殺してでも、誰かを
助けられたら、と思って向か
った神戸で、言葉を、愛情を
戴いて、支援は、共に前に向
かって生きていくことだと知
り、私を変えられ助けられま
した。

ある人が、援助とは自分の
足元を変えていくことだと言

っていました。この言葉を実
際に体験し、思考していける
きっかけとなった場所に神
戸があり、そこで出会えた支
援の会の皆がいます。

今の私の生活、将来観、思
惟、存在に、神戸で戴いたも
のが、深く深く影響していま
す。

神戸での体験を形に残す
時、私が残したいのは感謝
です。

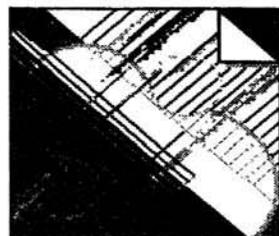


【②雲内教会】

16

吉田重雄

「被災地でコンサートを」



文集を作るということですので、遅ればせながら原稿を送ります。今とても忙しい日々を送っています。もう1年以上、工具類も置き去りだし、顔を出すことすらままならないのも残念です。また機会があればお邪魔します。皆様の健康を祈りつつ。

「被災地でコンサートを」という発案を無責任にもしたのがこの会との出会いだった。メインの音楽ゲスト沢知恵さんほか数人に電話をして、被災地でコンサートをしたいという漠然とした思いを伝えたのを具体化してくださったのが支援会のメンバーだった。その後、フリーターで比較的時間が取り易かった私は、このコンサートをきっかけに支援の会に足を運ぶようになる。福祉の現場体験者の多い中、畑違いの私はお手伝いをするつもりが逆に迷惑をお掛けすることが多かった。

雲地教会をベースとしていた頃、食事当番をするのがお役に立てたことではないかと思う。餃子を作った時は私が具だけ用意し、皆で皮に包みながら焼いて食べた。具の代わりにキムチを入れて食べるものがいたりして楽しい思い出の一つだ。

クリスチャンセンターに移ってから時間が取れなくなり足が遠のいてしまったが、また何かのお役に立てればとの思いは薄れていない。私が接した人々の多くは被災していなかったとしても支援の必要な人だった。ある意味でその埋もれていた必要が震災によって表面化したのに過ぎないのかもしれない。その意味でも支援の会が地元の人を中心とした長期的な活動に移行していくことは大変望ましいと私は思う。私自身はその地道な活動が拡充していくことを願いつつも、何等かの形で関わり続けていきたいし、もしそれが難しくても、無関心にだけはなりたくないと思う。

支援の会を通じて出会ったすべての人々に心からの感謝をしつつペンを置く。

仙人



「NOと言える日本」について一言

かつて「NOと言える日本」という本がベストセラーになったが、内容は勿論「NO」を日本でも使うことの奨励である。話は変わり、私はいつも赤の軽自動車で、仮設から施設、病院、入浴サービスなどの送迎をさせて貰った。このおかげで皆様からたくさん感謝されましたし、こんな自分でも役に立てた。そんな気持ちでとても嬉しかった。またペーパードライバーだったので練習にもなった!!

だが無事故無違反だったわけではない。人身事故こそ無いけれど、脱輪も2回はしたし、何かにコツコツとあたった気がする。駐車違反で法的ペナルティを食らった

ことも痛い経験。あともう一つ、対人関係特に申し込まれる方に対してだ。こちらは無料でサービスを提供するのだが、中には「かまへん頼もう、ついでや」のような態度で応えられると、私は不快を覚えた。それを会議で話し合った結果、「NOと言え!」という意見が出た。それは「しんどい依存関係を切る」為の技術と私は判断し、実際に使ったのだ。すると相手は「もうええ」とばかりの態度で無視し始めた。私も「とうぜん」と威張るのだが、どこか痛みを覚えたのだ。そう、打消話を使うのは難しいのだ。言い方もあるのだろうが、打消話への反応は皆、多かれ少なかれ痛

みを覚えた顔になるのだ。

日本において「NO」を使うということは相手の心を一刀両断するほどの力があるようにみえる。でも言わなくては、くたばるのはこちらになる、というのも想像に難くない。でも私は思う。そのあとのフォローが大切なのだ。行動や態度で「見捨てた」訳じゃない事を証明せねばならないのだ。この点私が「NOと言える日本」に一言付け加えたい。日本製品が人気あるのは、アフターケアもしっかりしているからだろ!? なあ盛田SONY!



現地活動（みかげの町で）

昨年の大震災は、心身に障害のある人にとっては、ただでさえ生きづらい日々に加えて二重・三重の大打撃だったと思います。いち早く支援の会が結成され活動が開始されたことは本当に日ごろの連係プレーがあったからこそだと思います。当初、混乱の中での活動からひとときが過ぎたころ、私も週に一度、原則として、拠点に出向き、コーディネーターの指示により、仮設住宅への訪問、病院への送迎、お風呂介助と活動する中で、今なお、緊張という実感を伴って思い出されることは早朝の病院への送迎でした。

前日夜遅くのコーディネーターの要請で、翌日の早朝、歯科医院への送迎のケースをお引き受けしたことでした。予定の時間に訪問するためには始発のバスで京都を出るということになるわけです。無論目的をまっとうするためには細心の注意を払わなければなりません。与えられたタウンエースを運転し、患者さんをイメージしながら家を探し当て、出て来られたご婦人と対面したとき、二人で来るべきであったことを痛感しました。（安全のために）この時点から緊張の連続でした。比較的、体格の良いご婦人はほとんど手に力が入らず全体が不安定なので私自身、全身で支えなければならなかったということ。知らない道を遅れないように、しかも、ご婦人の問いか

けに応えながら、安全を確かめながら、目的地に向かったということ。やっと着いた歯科医院は二階でS字状の階段を抱きかかえながら上がったこと。無事、治療を終えて、家まで送り届けることが出来た時は本当に心の底から「ホッ」としたものです。

時計は正午、京都を出てから6時間が経っていました。このケースは幸い予定通り終えることが出来たのですが、この中から私は多くの課題を得ました。

- (1) 行動する前に患者さんと面識をもち、良く状況を把握しておくこと。
- (2) 必ず介助には二人付き添うこと（安全を確保するためにも、目的地についてから、どんな状況であっても余裕をもって介助するためにも）
- (3) どんなケースにも共通することですが他人の命を守る時には自分自身の体調をベストに調えた体力をつけておくこと。

以上の事柄を実感しました。傾斜の多い地理的条件に加え、大災害の後だけに悪条件の中で障害をもって生きるということの大変さは言葉に言い尽くせないものがあるだけに生き長く支援をし続けることが出来るよう祈りの中におぼえ、今後も活動に参加することが出来ればと思っております。

感動と喜びをたくさんの人に

私が支援の会を初めて訪れたのは、95年の初夏の頃であったように思う。その頃の私は、震災後、何かしたい、しなければと思いながらも実行に移す事が出来ず、考えばかりが先走っていた。たまたまJRの六甲道駅で支援の会のポラを手にして電話を掛けたのがきっかけだった。

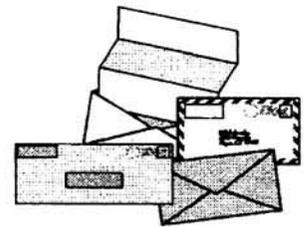
しかし、電話を掛け、「じゃ来て下さい」といわれて私は戸惑った。私は特技も資格も何もない。こんな私が何をしてあげられるのだろうか。来て下さいといわれたけれど本当に必要とされているのだろうか。そんなことを考えながらドキドキして支援の会へ向かった。そこに居たのは感じのいい女の人（遠畑さん）と、どう見ても高校生にしか見えない女の子（川端さん）だった。緊張していた私を2人は明るく迎えてくれた。こうして支援の

会での私の活動は始まったのだ。

夏休みに入って私はほとんど毎日のように支援の会に通った。お風呂の送迎、介助、病院の送迎、付き添いなどみんな忙しそうに動き回っていたが、私は一人では何も出来なかった。車も運転できないし、力もない。それで必然的に私は仮設の訪問が中心となった。もちろんやりがいのある活動ではあるのだが、何か物足りなさを感じていた。

しかし、ある日私が訪ねた仮設のおばあさんにいつものように声を掛け話し出すとそのおばあさんは目に涙を浮かべて私の手をしっかりと握り、「ありがとう、また来てね。待っているから。」と言われた。その時私はボランティアをして初めて自分のやっている事の意味を見出す事が出来た。

私はこの感動と喜びをもっとたくさんの人に味わってもらいたい。何もできない自分が人に何かを与える事が出来るという喜びを。そしてそれ以上に相手から与えられるものの大きさを。



現地にて戴いた冠

私たちは教会に於いて聖書の御言葉によって生かされ、励まされ、喜びが、そして信仰が高められるものである。

長い間苦しみのある者がイエスを見ると顔を地に伏して「主よ、みこころでしたらきよめていただけるのですが」と訴えるのですが、それを押し黙らせようとする。イエスは手を伸ばして彼にさわる。そうしてあげよう、きよくなれ、と。また長血を患った人もそうである。イエスの衣でもさわれば私の病気がなおしてもらえる一心で近寄ろうとしているのにそれを押しのけようとする弟子たち、しかしたち振る舞いもかまわずおそるおそるそっとふれる。イエスは力が出て行くのを覚え弟子達に、私の衣にさわったのは誰か問うが、弟子達は、先生群衆が、あなたを取り巻いているのですよ。と、しかしお救いになったのは、イエス、キリスト自身である。

私たちは教会に行く忠実な僕と言っています。しかし現在の世の中にあって救いを叫び求めている人が如何に多いか、特に今回の淡路、阪神の大地震の惨状は、筆舌絶する感がある。被災「障害」児・者支援の会は、石が叫んだのであろうか、若いエネルギーの塊りが全国から集まった会でもある。

支援の会のセンターとして使わして戴いた

神戸雲内教会も創立100年を経る歴史ある教会で囲いのレンガ塀が倒壊し、美しいアジサイの葉が私たちを迎えてくれる。花が咲く頃は、別の所へ移転せねばならぬが、それまで教会の好意により、CSの教室事務所の解放、食事に関する炊事場、食器類は使用自由である。村上牧師、奈良夫妻がまず参加し、第1日目は、顔見せのつもりがさっそく仮設住宅回り、障害者にとって問題点があるか、避難所回り、福祉事務所、病院、入浴サービス、荷物の運搬、住居の修理等の活動種類を聞き、個人的に青木さんの応援を頼み、最後まで重荷を負ってもらう。週1回金曜日（食事作り）を京都教区関係者が一役を引き受ける。ひとつひとつの課題が現在の頭脳で整理できかねるが、フリートキングの時に話題として話し合いたい。例として一人の視覚障害者を訪問したとき住んでいた所が崩壊し、仮設住宅に住むようになった。そのため始めからの生活環境のため白紙からの出発。そのため自分の住むところを中心として、生活必需品店舗、川、バス停・・・の所在地の地図作りを要望された。その人いわく仲間500人いるので連絡したいとのこと。今こそ仕える人とならねばと思う。

青木さん、村上さんご苦労さん。

京都教区の女性たち

「私でもできるかしら」という不安な気持ちでとにかく連れて行く。長坂たか先生（長坂鑑次郎牧師夫人）が、おられた神戸雲内教会で、向日町教会婦人会が持たれたこともあるが、大分様子が変わっていた。第1日だったから先輩達の様子を見ていると、ひっきりなしにかかってくる電話にいささか驚いたが、女性指揮者がてきぱきと対応する。避難所のAさんが仮設住宅に移るようだ、せっかく馴染んだ人と別々になるのは気が進まないらしい。様子を見に行くとのことである。大きくひび割れた校舎の一室に、段ボールで仕切りはしてあるが、大変な風景である。2～3ヵ所抽選番号を見に行くもなし。

昼ご飯近くになったので、教会内にあるセンターに帰る。午前中ボランティア活動し終わった人が、昼ご飯の支度をしている。

今までは、近くの店舗で材料を買ってきて作るか、あるもので済ます位であった。だったら、金曜日は、お昼ご飯作りのボランティアがあってもよいのでは、と提案すると、大変嬉しいという。ではということになり、センターも兵庫教区クリスチャンセンター内に置き、京都教区内教会婦人会で昼ご飯の用意することに誰言うことなく決まった。ただし金曜日だけである。

向日町教会が担当の時、すし桶をリックに入れ、大きな目の俎と包丁即ちチラシず

しを造ると決め、楽しみながら造る。京都教会は、プロ級の作品、洛陽教会は高級ホテル並の料理…。とにかくボランティアの人達に喜ばれた仕出し屋さんでもあった。後片付けして残された夕方5時ごろまでの時間は仮設住宅回りして、勇気づけたり相談受けたまったりして一日を終わる。

（私でもできるかしら）との不安は、神様は「ご入用なのです」と。群集といわれた私たちでも多くの恵みが与えられた一日であった。

遠畑さん、福島さんどうしているのかなー。



【③クリスチャンセンター】

22

青木哲生

仮設の訪問

震災直後から「支援の会」で取り組んでこられた被災者への援助活動は、各地から集まった人達（東京、神奈川、長野、愛知、京都、大阪、兵庫など）の働きによって大きな成果を挙げたとおもいます。この春には今までの活動を地元の方に引き継ぎその後「支援の会（兵庫）」として今日に至っていることは大変喜ばしいことでもあります。さて先の京都の「支援の会」からこのたび活動報告を作成するにあたり「仮設の訪問」をテーマにした原稿を送るようにとのことですので、或る62才の下肢障害をもつ独身男性被災者のケースを紹介してみたいとおもいます。

この人は最近我々の手助けで仮設から新しい市営集合住宅の7階に引越し、生活を開始しました。引越し後最初に訪問した時のことですが、そこで目にした光景は何日も風呂に入っていないのでしょうかヨゴレタ肌着姿で、シーツも何日も洗濯していないようなベッドに横たわりテレビを見ながら我々を出迎えました。入り口のそばにある流し台の周りには食べ残した食器、鍋類が散乱し、トイレも汚れがひどく、ベッドのそばにはテレビ台その横にはキャスター付き小物入れ置き台、上にはた

ばこの灰皿（水の入ったカン）とか食べかけのドンブリなど、その脇には小便の入ったポリバケツ、畳の上を見るとゴミとホコリで一杯、腰を下ろそうにもできない。そこで同行してくださった橋本さんに台所囲りとトイレの掃除をお願いし、小生は本人をとりあえず風呂場に連れて行きシャワーを浴びさせその間部屋の整理や掃除、シーツの掛けかえなどと洗濯し、物干しにかけ一段落。

シャワー浴びを終えホットしている所で「ヘルパーさんを頼めば？」と持ちかけた。福祉事務所の電話番号も担当者も知っているから自分で頼むというので再来を約しその日は後にした。翌週金曜日、前回と状況はあまり変わらなかったのも、南井さんと手分けしてほぼ同じ作業を繰り返した。彼にヘルパーの件をただした処、まだ頼んでないとのことなので、事前にコーディネーターの水田さんと打ち合わせの通りその場で福祉事務所に電話を入れ、当人の状況を説明して早急にヘルパー派遣を依頼しその日を終えた。数日後のヘルパーさんの派遣が決まりました。

一週間おいて、どういう様子かなと思いつつ訪問した。「ヘルパーさんが土曜日に来

てくれることになった。良くしてくれるよ」とのことで一安心したのですが、見渡した所キレイに片付いたようでもなく多少ガッカリではあったが明日（土曜日）ヘルパーさんが入るので、片づけようとされた甲斐さんや世戸さんには実情を見てもらう必要があるのになにもせず戸口の名札の名前だけ書いて上げて少し話をするだけで帰りましょうということにしました。その後2回ほど1週間毎に訪問しましたが状況はあまり変わらず、先週訪問した時は翌々日が祭日でヘルパーさんが休みなので一通り掃除台所の片づけシャワー浴び（嫌がるのをヤットのことで）をさせシーツ掛けかえ洗濯をして帰りました。

この人は気むずかしい処があり日によっては口数が少なく気が向かなければ、返事もしないということがあります。一人で住み下肢が不自由で、おそらく将来にこれといった目標や楽しみも無いのでしょうか、週1回テレビ番組雑誌と生活用品を買いがてら深江駅近辺に出かける（行き帰りはタクシー利用）のが唯一の気晴らしの生活をしているのが実状であります。

この人に対して今の形でいつまで訪問を続けるのか・・・？当分は今のまま続ける必要があると思います。

1996. 7. 25



支援の会に加わって

私の家は西宮の山側の方で地震の被害は軽かった為、何かお手伝いできることはないかと願っておりました所、教会でこの会が地元の人達の参加を求めていることを知り、10月頃から週2回通うことになりました。車ボランティアで、あちこちの仮設や家に行くのですが、神戸の細かい地図に慣れず、不安ながらの活動でした。また現地では若い方々が主体になっていたので、戸惑いもありましたが、お世話をする相手の方は、ほとんど高齢者なので、その中間的な存在として活動していました。

地域型仮設といって、何棟もの2階建ての建物に1部屋ずつ何人かが住んでいて、台所、風呂、トイレ、洗

濯機は共同というところによく行き、お風呂のお世話をしました。独り住まいで高齢者という方も多く、私たち以外にもヘルパーや仮設の相談員に助けられながらという大変な生活です。また障害をもっておられる方々も都心の仮設に多くおられてリハビリの通院に付き添い、その生活の大変さに想像も絶するものを感じました。地震がなくても困難だった生活の中で、家を失い、狭い、制約の多い共同生活に耐えることがどんなにつらいものか、当人でなければわからない壁を感じました。その生活のほんの一部、お手伝いとして介入したわけですが、傷つけることも多いのではと気がかりました。けれどもそ

のように何重ものくびきを負っておられるにもかかわらず、前向きに生活しておられる様子を見るにつけ、励まされる思いがしました。早く恒久的な住宅が、各々に生活の問題点は違い、それにふさわしい多様な形態が必要だと感じさせられます。

車ボランティアは常に危険が伴うものですが被災された方々の生活を思う時、お互いに重荷を負いあうという意味で、やはり必要なことと思われませんが、する側に十分な心の余裕と安全認識が求められると思われています。



仮設のみなさん

仮設住宅のKさんを訪問。狭い一つだけの部屋。西側の窓辺に薄いカーテン越しに西日をいっぱい浴びて、足の不自由なKさんのベッドがある。そのまわりには足の踏み場も無いほどに日用品があふれている。締め切った部屋にクーラーはかかっているが、何の効果も無く空気はよどんでいた。同居の妹さんはどのようにして寝ておられるのだろうか。同行のコーディネーターMさんがKさんに足のリハビリをするよう進めた。温和にみえるKさんも発病当時はやけになってリハビリを断念していたとのこと。今になって少しでも歩くことができれば・・との思いがMさ

んの勧めによって芽生えてきたことは嬉しい。早速病院の選択や送り迎えのことなど支援の会でお助けしようということになった。

また、妹さんからは、助かった荷物を空き地の物置においてあるが、壊れてしまった仏壇が入らず外に出ている。先日の嵐で被せてあったシートが外れてしまって自分一人の力ではどうにもならない。近所の人目もあって困っている・・との訴えがあった。Mさんから早速支援の会の男性がお手伝いしましょう。との申し出に、汗を払いながらホッとした笑顔を見せた妹さんに、私も何かホッとした気持ちになった。やさしく

中の良い兄と妹のお二人。しかし、この狭い所にいるとつい言い争いが出てしまうのです・・と寂しそうに言われる。妹さんはストレスが溜まるから勤めに出るのですといわれる。

市営住宅入居希望者は140倍と聞いた。この気の遠くなるような倍率から、何とか現実に希望が持てるような状態になるのはいったいいつなのだろうか。仮設の皆さんが落ち着いた人間らしい生活に戻ることのできる日は。

ボランティア活動とは

去年の12月より被災「障害」児・者支援の会のボランティアに参加するようになって9ヶ月、仮設住宅の訪問をはじめ、ガイドヘルパー、入浴介助、仮設の換気扇や網戸の掃除、プランタンの花植え、医者への付き添い、買い物等、支援の会への依頼はさまざまである。年齢も60代～90代、高齢者の一人暮らしで4畳半または6畳ぐらいの一室に生活のすべてが置かれている。歩行困難で松葉杖や車椅子を必要としている方がほとんどである。ある84才の方は歩行が困難で何かにはすがらないと歩くことが出来ない。私たちの週1回の訪問を心待ちにしておられる。

仮設の状況も少しずつ変化していく中で精神的に耐えられなくなり今年5月の連休から病院に入院するようになった。「早くここから出たい」とのつぶやきに「早く元気になって仮設でテレビ（お気に入りの）が見られるようにしようネ」と励ました。また、京都に弟さんがいるということで京都からのボランティアの方が、弟さんの所に電話を入れ、この方の現状を伝えたときのことである。現状を知った弟さんより手紙が届くと、とても喜ばれそして、ボランティアの方の「退院したら、私の車で弟さんのいる京都に一緒にいきましょう」との励ましに「早くそうしたい、本当にありがたい」

と涙する姿についてこちらも胸が熱くなった。それと同時に、どんな状況であっても前向きな希望を持たせてあげることの大切さを知った。

ボランティア活動は、活動に取り組む本人が豊かに生きる（努力する）ことだと思う。「他者のため」「社会のため」と思い込みがちだが、実は「自分自身の問題」に目を向けることではないのだろうか？ボランティアは私自身の学びの場である。身体を自由を奪われ老いていく身に、自分からは何も出来ず、先方から出向いてくれる事を待っていないければならぬ、この現実の厳しさ淋しさをどのように受け止めればよいのだろうか？老いていくことの難しさを痛感し、健康である私たちが身体を自由を奪われた人達の、少しでも手足となっていければと願っている。たくさんの方々との出会いとすてきなスタッフに恵まれ、毎週金曜日を楽しみに活動できることを幸せに感じている。この関わりを通して、夫婦とは？親子とは？家族とは？そして人間とは？たくさんの方々のことを考え学ばせていただく機会となった。私を必要としていてくださる限り、出来る時に出来ることを精一杯する中で、やがて迎えるであろう老いの日を、もっと豊かに過ごせないものであろうかと考えている。

「この6ヶ月」

昨年の12月、20年勤めた職を辞して何をしようかと考えていた時、支援の会の呼びかけで参加しました。ところが2月に再就職し、週1回が月1度の休日だけになってしまいました本当に僅かなお手伝いしかできていません。けれども月に1度しかないウイークデイの休日を誰に何といわれようとも会へ行くのが楽しみになっています。幸い私の仕事が看護婦ということで、入浴の介助訪問でもまず体の不調から話の糸口が解れ、チョットしたアドバイスをすることで心の交流が生まれます。

その中で痛感するのは、仮設のお年寄りの一人暮らしは勿論、夫婦で労りあって生活している人も孤独だ

ということです。豊かな日本の中で突然の災害で持てる者との格差を埋めようのない高齢者に、私にできることは本当に小さなことです。最初は手探りでしたが、今は訪問していろいろ話し相手になることが世間から取り残された孤独感を少しでも埋められると思っています。部屋で骨折し入院した女性は退院したら養老院を考えたらといわれたが3月後驚く程の努力のりハビリで自宅へ帰れた。私が出す短い便りが、自分を見ていてくれる人がいると励まされたと言ってくれた。

私の出来る小さなことを主よ、われらに居給うて御心のままに用いてください。主よ あなたの語

られた事、行われた事と日々出わせて下さい。御心の天になる如く、地にもなさせ給え。

支援の会に関わる事は、私がしてあげられる事ではなく、私の出会った人達の苦しみを悲しみによって私が育てられる事です。そして生命の終わりまで生きている事を喜べる様に共に生きる事です。その人生の労苦をあるがままに受け入れて共に生きる事は非常に難しい面がありますが、祈りは聞かれる事を信じます。私たちを資金面や人材面から支えてくださる多くの方々に感謝します。

出 会 い の 中 か ら

私が「支援の会」と関わりを持たせていただいたのは、1996年2月下旬から3月下旬でありました。このあっという間の1ヶ月の間で多くの人との出会いの中からたくさんのことを学びました。普段、平凡な学生生活を送っている私にとって「支援の会」での日々はとても刺激的でした。まず、関西の人々の雰囲気カルチャーショックを受け、はじめの2、3日はとまどいました。その後、落ち着き、やっと「考える」ことができました。毎日違った

いろいろな人と出会い、皆さんとお話している中で、いろいろ考えさせられました。「西と東でどうしてここまで違うのだろう」とか「幸せってなんだろう」などなど。こうした疑問を持ち、考えるきっかけが与えられたことは、今の私にとって、始めの一步でありました。これらの答えを出すのは今ではなくてもいい。これからの出会いの中で時間をかけてじっくり考えていきたいです。

ありがとう「支援の会」 お元気で。

利用者（被災者）の歌

北尾リキエ

ためらわずに
助けられ
足は叫ぶ
羊身不済の

足は叫ぶとー

一九九五・一・一七

支援の会でのこと

私は社内ボランティア休業制度を利用し1年間ボランティア活動を体験しております。支援の会では1996年3月～4月の2ヶ月間お世話になりました。京都から兵庫への引継ぎの時期であり関係者の方々の苦労を横目にしております。

支援の会の印象は穴ぐらの中で人がひしめき合っているのを見て、これはヤバイ、変だ良くやっている、と第1印象が移り変わり、ここに集まっている人は何なのだ早く正体を知りたいとも思いました。

活動では送迎、入浴、訪問などを体験いたしました。当時は緊張してやっ

ました。特に入浴は他人の家で一緒に入るということで衝撃的でした。そんな訳で慣れるまでは精神的に疲れ、車の移動にしても日常茶飯のように渋滞し、やせる思いでした。

震災後ボランティアが注目されその役割は重要になっている。はたしてそれで良いのか疑問に思う。神戸空港を作ることが人々の幸福になるのか。開発、発展ばかりに目を向けず立ち止まって振り替える必要が無いだろうか心配だ。

日々の生活に苦勞し頑張っておられる人々を見てきて、今自分が自立し生活が出来ていることに感謝して

います。

支援の会に集まった心の豊かな人たちと知り合えたこと、わずかな時間でしたが一緒にやれたことを嬉しく思います。一生忘れないと思っています。どうもありがとうございました。



【④その他】

29

宮本真希子

人が生きていくこと

地震から1年半、今立ち止まって振り返ってみると、「支援の会」の活動は、私たちにとって「人が生きていくこと」を見つめる作業であったように思います。当たり前の日常が奪われたところから始まって、少しずつ日常を取り戻していくなかで、「あの地震さえなかったら……」という思いを抱えながら、それでも生活していかなければならないしんどさを、ごくわずかな手伝いをしながら、あとはただ傍観者としてみているような、何ともやりきれないような活動でした。

雑多で混沌としていて、夢中で若いエネルギーがあふれていた学生青年センター時代、西日が暑く、蚊の多かった雲内教会のプレハブ時代、活動が次第に把握されていく中で逆に内部の人間模様が複雑化していったクリスチャンセンターの怪しい地下の基地時代…思い出します思い出します色々と…それぞれの場所には必ずそれぞれの近くの飲み屋が、語り合いの場所、ストレスを解消してくれる場所としてありました。(主婦なのでお付き合いできなかったことが、とても残念です!)

私の活動は、ほとんど車による送迎でした

が、それ以外で純粋な訪問を続けてきた、Kさんという方がいます。Kさんは今から5年ほど前に難しい脊椎の病気になり、それ以来半身不随となりました。地震で家は全壊して、避難先の小学校で出会いました。それから一時入院、避難所に一度戻りそこからまた別の病院へ入院、退院後は仮設に入り、去年12月に友達が建ててくれた新しい家に入ることが出来て、現在そこで奥さんと二人で暮らしていらっやいます。このKさんを追って、私はそれぞれの場所へ大体2週間ごとに訪問を続けました。そして現在も続いています。

避難所では人間扱いされない惨めさをいやというほど感じ、病院ではモルモットだと感じる。家のためにお店でかいがいしく働く連れ合いさんに、申し訳ないと思っているのに、つい自分のイライラをぶつけてしまう…人に迷惑をかけてしまう自分みたいな者(すべての人がそうやって生きているのに、それがうまく伝えられないのです)に生きる意味を見つけられずに、時々死にたくなってしまう。

トイレのことを考えると外出したくないと、毎日家にいるKさんを訪ねて私はお酒を頂き

ながら、たわいもないことを喋りながら時を過ごします。Kさんの強がった笑いの中の悲痛な叫びを、受け止めてもどうしていいかわからない自分があるから、聞こえないふりをして笑って返し、重い足取りで帰るのです。こんなことを続けて何になるのだろうかと思いつつも、いつのまにかKさんの訪問は私の生活の一部となり「生きていくこと」を見つめる場となっています。

はたから見れば、もう訪問の必要もないといわれる環境にある人、たくましいオバちゃんには、そんなに恵まれたところにいて何を考えてんの!と言われてしまうに違いない一人のオッチャンがどうやって、どこに救い(自分の生きる道)を見出して行き直そうとするのか…。私は一緒に酒を飲みながら、たわいもないことを喋って笑いながら、ゆっくりと共に感じていきたいなと思っています。

出会いを繰り返して

震災後3ヶ月ほど経過した頃から、週1度でしたが約1年「支援の会」の活動に参加しました。

私が参加した1年間は実に“地下”に縁の或る時でした。寝泊まりする家が“地下”(雲内教会を拠点としていた時)だったり、事務所が“地下”(兵庫教区クリスチャンセンターを拠点としていた時)だったり、暗いイメージを漂わせていましたが、個性あふれるボランティア達は、そのイメージを吹き飛ばし、多くの人や場

面に接しているといった雰囲気でした。まるで何かを求めて地上に出てきたアリたちのように、実に良く動き、人に出会い、考え、相談事などを地中(時にはボランティアのボランティアをしてくれる店)に持ち帰り、分かち合っていくといったような活動を繰り返してきました。

出会う事によって生じた悩み等を抱え込まずに人に話し、分かち合っていく、これは被災者、支援者を問わず必要な作業であったのだと思います。

問われる私

「被災『障害』児・者支援の会」の活動を通して、あの大地震以来、実際にそして直接的に「被災」を負わされつつ生活する方々と出会い、それぞれが持つ個々別々の被災体験の話、現在進行形でもがき苦闘している日々の被災生活の話を聞きながら、いつもその内容に圧倒されます。そして今、そのくいつも圧倒されている>ことに強い疑問を抱いています。「この人達にとって日常の事柄なのに、“私は”なぜ圧倒されるのか」、「<圧倒される>のは何を意味するのか」、「そこにいったい何があるのか」。

1年半という時がすぎた今、被災地を一步離れれば何事もなかったかのように人々は生活しています。「現地」と呼ばれるある特定の一画では、逃げることのできない「被災」という現実を負わされつつ必死に生きている人達が歴然と居るにもかかわらず、その一画の外で生活する人々は何事もなかったかのように生きているのです。地域は異なるとしても個々の生活の場でそれぞれが日本全土を震わせたあの1月17日を経験したはずなのに、回復が早い人から、順番に「一抜けた、二抜けた・・・」。そしてあの日から始まって今なお続く「震災」をより回復の遅い人に押し付け、

早々と何事もなかったかのように振る舞う。この外の人々の感性はどうなっているのか。

そこに明らかになってくるのは、我が身に何の不自由もなく安泰であるがために、そうではない人達の思いを想像することさえしない“私”がいることです。だからこそ、その場で直接的な「被災」という現実を押し付けられ、それを負いつつ必死にもがいて生きている人達の、その実際に触れるたびに、圧倒されざるをえないのではないかとすると、何と“私”は<生きる>ことを怠けているのか。

<心を動かす>ことに怠惰なのか。

さらに、「被災」を現に押し付けられ、負わされている方達を前にして、「<押し付けられ、負わされている>側が居るのなら、<押し付け、負わせている>側が必ずいるはず。それはいったい誰なのか」と問われ、「そんな“私”も行政と同じく<押し付け、負わせている>側の一人なのではないか」と、その姿勢がもつ加害性をも気づかされる思いです。

「被災『障害』児・者」の活動とその中で得る被災者との出会いは、そんな自分の姿をえぐりだして、“私”を問うてきますが、逃げることなく正面から向かい合い、応えていきたいと願っています。

支援の会に学んだこと

私は事務局であっためぐみホームにときどき出入りしていたという関係から灘区、東灘区での支援活動を中心に支援の会に参加させていただくことになり、その活動の中で数多くのカルチャーショックを受けました。初めのうちは解らないことばかりでただ必死に誰かの後に付いていくだけでした。障害者手帳、療育手帳、作業所、デイサービスなどという言葉さえ初めて聞く、といった始末。何?どうして?解らない!と何度繰り返したことでしょうか。しかし、そんな毎日が新鮮でうれしくて、私にとってはあつというまの1年間となりました。そんな中で、被災された人たちやボランティアに来られた人たちとのたくさんの出会いが励みになりました。仮設の訪問の際、ドアをノックする前にすごく緊張しました。留守だといいな、と思ったことさえあります。しかし、実際に住民の人と話ができただ後は自然と顔がほころんでくるのです。同じ人を何回か訪問していると、訪問時間は長くなっていききました。そして人がすごく好きになれました。

また、出会いを通して多くのことを学び、考えさせられました。半壊だったけど修理して家に戻ることでできた私の祖母は、いろいろなところから助けが来てくれるから戦争の時よりはましだと言っていました。しかし、家が

全壊し仮設住宅で暮らしていてその後行く当てのめどがたたないあるおばあさんは、戦争の時はみんな共に苦しんでいたけれど、今回の震災では助かった隣の家などを見ると「何故うちだけが・・・」とってしまうとこぼしていたことが頭から離れません。また車椅子を押しながら散歩して、段差やでこぼこ道が初めて苦に感じました。徒歩10分くらいの距離で緩やかな坂がある道を往復しただけでTシャツが汗でベタベタでした。

大学に入学したとき、高校と比較して大学って何て広い世界なんだろう、と思いました。今では何て狭い世界なんだろうと思います。ふつうに学生生活を送っているとだいたい毎日学生にしか会えません。まだほとんどが「社会」を知らない、広い世界のほんの一握りの人たちです。そんなことも支援の会に来て発見しました。これまで述べてきたことも当たり前の小さな発見かもしれませんが、私は支援の会において大きな発見をしたと思っています。そしてそれらが今までの狭い世界を広げてくれました。これからも自分なりに探索して、知らないことだらけの世の中にぶつかっていきたいと思います。私にこんなに大きな人生勉強をさせてくださった数多くのみなさまに感謝の気持ちでいっぱいです。

「生がされた命」

私と支援の会の出会いは、教会の牧師からの依頼の仕事という形だった。

この大震災で私も被災者の一人であった。石屋川のそばの我が家はまさに断層の真上。まわりの家々は軒並み倒れ、電柱はなぎたおし状態だった。かろうじて建ち残ったものの、住める状態ではなく大阪に8ヶ月仮住まいの生活だった。

その8ヶ月という時間が少し大げさだが私の生き方をもう一度見直すきっかけになった。死んでもおかしくないそんな状態の中、生かされた命、無駄にできないという思いからのスタートだった。

牧師から1年この地域を支えてくださった“支援の会”を兵庫教区が受け継ぐ事に決まりそのスタッフの一人として手伝って欲しいという依頼を受けた。“ボランティア・コーディネーター” そんなわからないひびきの仕事を友達と3人で月～金まで担当する・・・そんな暗中模索からの出発だった。考えて引いてしまうのではなく、まず自分の足、自分の身体でボランティアを知り、それから考えてみる・・・それが私のやり方だった。

支援の会京都の方々によるご指導の下、ともかく頑張ってみよう!そう思いながらとびこみ、早6ヶ月過ぎようとしている。たよりない私たちがなんとかぶつかり、こけながらもここ

まで来られたのも、今まで支え続けてくださる京都支援の会の方々、そして遠くからまた地元から支えてくださるボランティアの方々のお力だと思う。

仮設訪問、車椅子介助、病院ガイドヘルプ、入浴介助・・・ボランティア経験の少ない私にとり“エッ・・・出来るかな”・・・の連発・・・ただ一つの経験が不安感を乗り越えさせてくれる・・・ある日91才の老人の入浴介助を体験する事になった。年齢と入浴介助という言葉に戸惑いを感じながらであった。“案ずるより生むがやすし” そのことわざがピッタリの体験だった。ご老人の背中がピンク色になり、気持ちよさそうな笑顔を見ながら介助・・・心の中に暖かいパワーとそこでご老人から反対にいただいている自分を感じた1日だった。そんな繰り返しが今の私を支えている気がする。今は9:00～17:00と主婦の仕事時間内の活動だが、“支援の会” 京都から引き継いだ大切な方々を細く長くサポートできればと3人で1人前の仕事をする毎日である。

震災1年半。人々の記憶の中から震災が薄れ、マスコミは“神戸の復興”と表面だけを取り上げ。町が復興すればするほど人々の心は反対に閉ざされていく現状がある。

先の見えない不安、あせりやいらだち、取り残されている孤独感・・・人々の心の中での震

災は終わっておらず心のスタートがきれいな方ばかりではないだろうか…。仮設生活も1年半…。疲れがピークになり、身体も心も病んでいる方々が多い。

私たちが関わっているご老人も急に入院なさる方が増えている様だ。共同生活の中、小さなプライベートの空間を必死で守っているご老人にとって出来る事は仮設の方々と共に考えたり仮設から出られた方や入院なさった

方々をお訪ねして一緒に考えスタートの手助けが出来ればと思っている。

この6ヶ月、私にとってはすばらしい出会いの毎日だった。毎日の仕事で出会うご老人、仮設の方々、相談員の方々そして何より私たちと共に私たちを支えてくださるボランティアの方々…。そんな出会いをパワーにこれからも頑張っていきたいと思っている。

34

宮本真希子

池田千鶴子さん ハープコンサート

3月16日(土)まだ少し肌寒い春の日に、池田千鶴子さんのハープコンサートが、大和公園仮設と灘南仮設で行われました。大和仮設ではピラを配ったり、チラシを貼っている時から「何があるの?」とか「ハープって何?」とか「珍しいことやってもらってありがたいねー」などの反応がありましたが、やはり当日、上演時間にはお年寄りを中心に若い方、子供もあわせて6~70人ほどの方がふれあいセンターに集まっていました。

池田さん一行が迷いつつ到着され開演までの間、広野さん特製のよもぎもちをおいし

いおいしいとほおぼりながら、お話する時間がもてましたが、とても気さくで楽しい暖かい感じの方でした。

演奏が始まり、池田さんはハープの名曲の間にお年寄りのよく知っている日本の歌「荒城の月」や「月の砂漠」「しゃぼん玉」などを弾いてくださり、それをみんなで歌いました。会場に集まったおじいちゃんやおばあちゃん方は大きな声で楽しそうに歌っていました。間に楽しいおしゃべりもあり、ハープの構造や弾き方などについても話され、それから何よりも被災された方々への暖かいメッセージが

ところどころに折り込められていました。私も含めてこんなに大きなハーブを近くで見ると聴くのもはじめての人ばかりで、ふれあいセンターに響きわたる深く美しい音色に圧倒されました。

池田さんはただハーブの演奏をして美しい音色を聴かせて下さるだけではなく、ハーブを通して少しでも人の心に近づきたい、特に悲しみをかかえている人たちの心に添いたいと願っていらっしゃるように思えました。疲れている人が少しでも休んでくだされば・・・という思いが「ねむれ、ねむれ」や「見上げてごらん夜の星を」などの選曲にこめられていました。

最後はふるさと神戸を思い、みんなで「ふるさと」の大合唱となりました。遠い昔に神戸で過ごした幼い頃の思い出に浸りつつ、涙を流しながら歌うおじいちゃんやおばあちゃんの何ともいえない横顔を見つめながら、これが終われば、また、地震で多くのものを失って

今ここにいる現実に戻っていかねばならないお一人お一人であることを思いました。コンサートが終わっても「しばらくここから動きたくない」といわれた意味がひしひしと伝わってきました。

その後、灘南仮設へ場所を移動しました。こちらは一般仮設ということもあり、(大和仮設はお年寄り、障害者向け地域型仮設)外出されている方々も多いせいか、あまり、となり近所との親しいお付き合いがないせいか、ふれあいセンターの中が妙に人数少なく静かだったのでマイクを持って「エーただいまハーブコンサートが・・・」とアナウンスにまわり、にぎやかになったところで開演となりました。

そんな数々の思い出を残し、胸には暖かいものを抱いて池田さんに感謝しつつ、大渋滞の中それぞれの家路についたのです。



【⑤ 現地協力者】

35

坂本 淳(まつぼっくりの園代表)

阪神淡路大震災後の活動

昨年1月17日の震災直後からの活動について書かせていただきたいと思います。私達松ノ木福祉協会小規模作業所まつぼっくりの園では震災以前から重度の身体不自由者が自立をめざすための小規模作業所を設立させ1年たつか経たないかの内に、大震災に逢いその作業所は全壊という状況になり困り果てていた時のことです。全国から集まってきていたボランティアさんと共に歩んだお話をしたいと思います。

その当時の事です。復興支援グループ京都の支援の会と巡り合い、あらゆる介助をお願いする事になりました。まずは、私個人の介助として支援の会の矢崎さんや金子さんを通し、お風呂介助やまつぼっくり再建へ向けての活動するための介助援助をお願いする事になったのです。

まずその介助として当時私達障害者がお風呂に震災後、2、3ヶ月間入れなかったため困っていた時に、金子さんが私のお風呂介助を受けてくださり、神戸のしあわせの村までライフラインが復旧するまで1ヶ月に1、2回連れて行っていただいたのを覚えています。ほんとうに感謝する気持ちでいっぱいです。

また他の事でも支援の会には、まつぼっくりが建て直すまでの支援をいただきました。な

かでも道路状況の悪い中で通所者の送迎活動を約1年もの間続けていただいたのです。また作業所の復旧工事にも深く関わっていただき、自分達の手で1個の作業所の工事に関わってもらいました。ベニヤ板を打ち付けてくれる人や水道パイプをくっつけてくれる人、又壁にペンキを塗る人、壁紙を張る人、それはもう多大な支援をお願いしました。

そういう支援のお陰で今では神戸市の小規模作業所の中で震災からこちらで一番真っ先に立て直す事が出来ました。本当に矢崎さん、金子さんを中心とする支援の会にめぐり合えばこそ、以前に増して立派な作業所が出来上がったと感謝しています。

本当にこの震災を通して、人のぬくもり・人の連帯・また力を合わせる大切さを感じた事はありませんでした。

今後も支援の会さんの真心を心に深く刻み、立派に出来上がった作業所を守り、大きくする事をお約束し、頑張っまいます。

ほんとうに暖かい支援をありがとうございます。これからも復興支援ではなく将来にわたり支援の会さんには、私達と付き合っただけだいたいと思います。

なにとぞよろしく。みんなで頑張ります。本当にありがとう。

「地域型仮設の支援？」

高羽住宅がスタートして1年4ヶ月近くになります。混乱の避難所生活、慣れない施設をショートステイで転々とされ極限に追いつめられた方々がやっとあのカギ渡しの場を経てこの仮設にたどりつかれる日々が続きました。緊張と安堵が入り交じった表情が思い出されます。

そんな時期、支援者としてボランティア「神戸大学救援隊」「障害児・者支援の会」が何かお役に立つ事はありませんか、と手を差し伸べてくださいました。民生委員も独居の方は友愛訪問を始めますとのニュースも入り入居されたばかりの不安な皆さんと、支援者として一人身辺に関わる事になった頼りない私は胸が熱くなり「よろしくお願ひします」と心から思いました。近くの教会の婦人会より手作りの和菓子がお一人お一人に届けられた時、地震以来すっかり忘れていた生活の中の「ゆとり」を感じさせていただき、そっと掌において眺めたものです。

その後、大阪YWCAのメンバーも加わって下さり「少しでも潤いの或る仮設生活を」と支えていて下さいます。

しかし何と申しましても仮設の方々にとって一番の支援者は住人同士ではないでしょうか。高齢者、障害者向けの地域型仮設と

いう事で福祉相談室が設けられ「月～金」「9時～5時」の間相談員がおりますが此の度はじめてこのような現場に置かれた職員であり、全ての事に対応できる立場でもありません。しかも夜間、土日祝は不在、その間警備保証会社へ室内に設置されている緊急プザーで連絡、とのシステムの中で「いざ」という時、頼りになるのは住人です。月日と共にその絆は強くなってきたように感じます。様々な日常的トラブルをお互いに抱えながらも目の前の困っている人をほっておけない、これぞ地域型と実感させられます。

仮設である限り今後は一步づつ自立に向けて前進しなければなりません支援する側もその視点を見失わずいっそう熟慮されたものでなければ、とまず自分自身に言いかせております。

「救援する側」「される側」

「〇〇さんのことが気になって故郷に帰れない」「関わった責任上、なげだすわけにはいかない」そんな相談をボランティアの人達から何回か聞く機会があった。「そんなに気になるんだったら神戸市民になっちゃえば？ ずっとつきあえるよ」と、その人の生真面目さに感心しながらもつい意地悪く答える僕。彼は「うー」とうなっている。人の都合なんてそんなに簡単にわりきれるものではないし、そんなつもりで神戸にきたわけではないのかもしれない。でもせっかく悩むのだったらそこまで考えたらいいと思った。

震災は以前から町が抱えていた矛盾を明らかにしただけとよくいわれる。家族以外の支援者など皆無に等しい障害者の生活は前からずっと不安定でずっと困っていた。その上この地震である。ちょっとやそつとでは生活が落ち着いたりはしないのだ。

被災障害者の救援活動を続けていくと当然のことながら神戸という町の抱えている障害者問題にぶち当たる。今にも潰れてしまいそうな生活がそこにはある。それは事実だから一生懸命な人ほど「私がやらなくては」とか「代替わりの人が見つかるまで」とかつい思ってしまう。障害者の側も「ずっとおってや」とか、「あんただけがたよりや」とかいったりする。

（これは無理もないし、別に悪くはないが）それで故郷へ帰りたいたいのにならなくなったり、そのために代替わりの人を探したりして。でもそれって何か不自由な感じがする。障害者と関わるってそんなにせっぱつまったことなのかしらん。たしかに状況はせっぱつまってはいるが、障害者の人達は被災障害者になる前からこの町でたくましく（なんとか？）生活してきているのだ。それもまた事実。乱暴にいうとボランティアさん一人いようがいまいが、そこに生活はあったし、又、今もあるのである。それが支援の前提だ。そこで問われてくるのは、関わった責任などではなくそのボランティア自身が彼らと出会った後、何を考え、自分はどんな生活をしていくのかということだと思う。

そりゃボランティアさんが一人でも多くいた方がいい（ボランティアにもよるが・・・）障害者の人達も親切にされたら助かるしきっと嬉しい。しかし障害者の人達をただ守るべき困っている人と見るのではなく自立した生活者としてとらえ直すことがこれからの支援や関係を作っていく上で面白いんじゃないかと僕は近頃思う。

だからボランティアも生活する人になるべきだ。どれくらい付き合う気があるのか正体を

あらわした方がいい。別に神戸にすめばいい
といているのではない。震災をきっかけに
出会った関係を「救援する側」「される側」と
固定して悩むよりも、もっと自由な何か別の、
生活しあう関係のようなものに変えていけな
いだろうか悩んでいるのです。これは僕の
悩みです。

神戸に住みついて障害者に関わっている立

場から思っていることを勝手に書きました。
今まで支援の会で出会った人達と機会があ
れば又一緒にそんなことを悩んでいければよ
いなど切に思っています。震災以来さまざま
に思い悩んできた支援の会の思いが色あせ
ることなく今後も受け継がれていきますよう
に。



【 ⑥ 利用者 】

38

山崎育子

運命にしては

1995年1月17日午前5時46分夢想だに
しなかった大地震。家はずぶれなかったもの
の、家の中はさんさんたる有り様で障害を持
った子を二人も抱えただオロオロするばかり
でした。まず足を切ったりしないようにと食器、
ガラスの破片を片づけるのに一睡もせず。水
汲み食事の確保とそれこそ自分で何をして
いるか訳がわからない状態で、行政の方から
は何の援助も無いまま、長男はタンスの下
敷きで頭から血を流し少々歩行不自由であ
ったのが歩けなくなっています。それを見か
ねて食事の方は近所の方、元気村の方が宅
配を約束してくださり男手もなく（主人はS
44年に病死し一家の生活は私が働いて過し
ていた状態で）水汲みに性も根も尽き果てて
いた時に、支援の会より川上揚さんと林さん
が駆けつけてくださって水汲み、こわれもの
の片づけ、洗濯と手をつけずにいたものをや
ってくださり、両手を合わせて拜んだもので
した。また傷害年金も収入もなかった長男の事
をあちこちできる限りの事を尽くしてください
ました。平田さんと矢崎さんとは病院に、行
政にと、毎日長男を車椅子で連れてくださり

解決していただきました。

次男の方も（筋ジストロフィー）通園しており
ました、もとやま園が避難所になっているとの
事で岩屋の福祉センターでの仮の園生活で、
朝夕の送迎は毎日支援の会の方で全面的に
引き受けて助けていただきました。嬉しい事
でした。もとやま園再開の後も病院の方への
通院も支援の会がやってくださって助けてい
ただきました。

長男の方も歩行不自由で家でじっと座った
ままでしたのを、さんと矢崎さんに松ぼっくり
の園という身体障害者の作業所で働く場を
紹介していただき、只今はボランティアの送迎
を受けて元気に毎日ミシン掛けに頑張ってい
ます。地震が引き金か今まで元気に働いてい
た私も筋ジストロフィーということで、歩く力も
徐々に弱くなり身障1級の身になりました。運
命にしてはあまりの不幸になげいております。
支援の会の方より頑張ってと励ましてくださ
ってますが、だんだんと規模も小さくなり心に
大きな穴があいています。何もかも相談に乗
って励ましていただいた事は生きている限り
は忘れません。ありがとうございました。

現地事務所における活動

被災「障害」児・者支援の会の皆様、1年半の支援活動ご苦労様でした。今後は新しく「支援の会兵庫」という形で地元の人達が引き続き活動されると知り、安心しております。

私が「支援の会」に参加させていただく事になったのは、北海教区の障害者委員会で、「べてるの家」からボランティアとして誰か派遣しようという話が持ち上がり、兵庫出身で土地勘もある(?)だろうということからでした。

実際、現地(灘区・東灘区)に行ってみると、「これは土地勘あってもなくても同じだな」と思いました。JR住吉駅で降り、代替えバスの停留所まで歩いて20分、細かい路地を右へ曲がったり、左へ曲がったり、1人で行ってたらきっと迷子になっていたことでしょう。やっとついたと思ったら、バス待ちの人のものすごい行列。代替えバスに乗るまで1時間、2時間も待たされました。その時見たのが、バスの切符を売っていたおじさんがその辺にあったほうきを持ち出し、そのほうきでバスに乗り込んだ人に「そこ詰めて、すき間あいている」と誘導しはじめ、すきまを埋めない人がいたら、ほうきでバスの窓をたたいて怒り出すという、ものすごい光景でした。人を見ている時は良

かったのですが、今度は自分がやられるかと思うと恐かったのを覚えています。障害者やお年寄りには絶対に乗れないです。とても危険です。

街を歩いていると、「負けるな、大震災」というポスターが至る所に張ってあります。私は別に何も思わなかったのですが、「負けるな、大震災に」やったら判るけど、これやったら大震災を応援している。「に」を入れるべきや・・・と。この川上揚さんのお陰で楽しい活動が出来ました。

現地での拠点であった神戸学生センターでの生活は実に快適なものでした。活動に参加する前は、現地に行けば風呂に入れず、食事にも困るだろうなどと、不自由な生活を想像していましたが、お風呂はある、食事は毎食きちんと取る、至れり尽くせりの生活でした。おかげさまで痩せて帰るはずだったのが太って帰ることが出来ました。

ボランティアの皆さんは疲れ知らずで、実に良く活動されていました。朝早くから避難所まわり、夜は遅くまでミーティングと寝る暇もなく動いておられました。私はほとんど事務所で留守番をしていたので、何か役に立てないかと思い悩んでおりましたが、ちょうど用

事で外回りをしていた時、ビールの自動販売機を見つけました。これは使えると思いました。その頃は夜になると必ず晩酌をしながら遅くまで討論していたものですから、いつもアルコールがなくなると不憫な思いをしていました。でもその自動販売機を見つけてからはそんな思いをしなくてもよくなりました。24

時間販売の優れものだったのです。私もやっと皆さんのお役に立てたとほっとしました。

こんな私を暖かく受け入れてくださった被災「障害」児・者支援の会の皆様には本当に感謝しております。どうもありがとうございました。

40

福士友子

出会った方々皆に感謝

この原稿依頼をいただいた時、久しぶりに学生センターで使っていたノートを開いてみた。始まりの日付は2月19日、最後は3月31日で終わっていた。

その頃の神戸の状況といえば、水や電気などのライフラインはかなり復旧しつつあり、交通機関も少しずつではあるが動き出していたように思う。確かに町そのものの復興は、表面的には順調に進んでいっているようには見えたが、そこに住む人々の暮らしは必ずしもそうではなかった。支援の会の活動中に私達が出会う方々は、避難所での生活を余儀なくされている方が殆どだったし、よしんば自宅に住んではいても決して問題が解決されていたわけではなかった。そんな状況であるから、支援の会へは次々と多くの、そして様々なケース

が上がってきた。しかも、京都を拠点として活動している私達にとっては、余りにも重く深刻なケースが少なくなかった。それら全てのニーズにどこまで答えられるのか、いつかは京都へ帰る私達がどこまで踏み込めるのか、悩みながら活動する毎日だった。

支援の会では震災支援を目的としていたが、元々内在していた問題が震災をキッカケに浮上してきたものが余りにも多かったのだ。そういう意味では私が想像していた「震災支援」の活動とは全く違うものだった。今でも時々出会った方々の事を考える。考えるだけで具体的には何もできない今の私がいるのだが・・・。

今でも定期的に私の手元へ現地のグループからの情報冊子を郵送していただいている。

新聞でもいまだに避難所や仮設生活を続けるをえない状況を伝えてはいるが、それらの冊子からは震災当時と何ら変わらず困難な生活が続いているというナマの声が溢れている。民間レベルでは対応しきれないような様々な問題。そこに共通してあるのはもう少し行政が動いてくれれば、もう少し使える制度があればすぐにでも解決できるのだというもどかしい思いである。これは神戸に限らず私達の生活する京都でも同じ事が言える。

支援の会へも関西のみならず全国各地からたくさんのボランティアの方々が集まっていたが、本当にマンパワーは強かった。現地のグループでも横の繋がりをもって支え合いなが

ら、「お互いしんどいけどがんばろうや」というアツイ思いがひしひしと伝わってくる。今ある制度を活用しながら(でも行政にいいたい事は言いながら)ボランティアベースで出来る事を探っていく、そんな姿が見える。私の現場である京都でもこういう仕事って大事だと思う。

最後に。私の今いる立場で出来る支援を続けていきたいと思う。決して「いい経験でした」なんていう言葉で済まされたいし、そこで生活している人達に失礼だと思うから。逆に出会った方々みんなに感謝したい。そして、今回支援の会で関わった全ての方とこれからも何らかの形で繋がっていける事を願う。



一年をふりかえって

自分が生きていく中で、この一年程ひとつのテーマについて考えたことはなかった。「生きる」ということはこんなにも難しいのか、またうれしいことなのか、の繰り返しだった。神戸の街も私がいちばん始めに現地入りした2月半ばの時期と比べ電車の路線はあつという間につながり、倒壊した建物がどんどん立ち並び、高速道路も秋には全面開通した。「復興」「復旧」色々な言葉を耳にするが、地域の崩壊はそのような建造物と比べると軽いものではなかった。「地域」というひとつの共同体がなす役割の大きさは、はかり知れない。しかし、私はこの一年を通して、一人一人の人間が「共に生きていく」ということを考えれば自然に形成されていくものだ実感した。

被災地での活動を通して、もうひとつ心に強く思っていることがある。ここで文句を言いたい。行政による福祉サービスの実態である。一つだけ例をあげてみたい。

ある方から緊急時に使うベルが欲しいとの依頼を受けた。神戸市の福祉サービスのパンフレットに掲載されてある緊急ベルの申請をするため灘区の福祉事務所を訪ねた。すると、管轄は消防局だからと隣の建物に回され、担

当の方とそこで相談した。結果、申し込みは約一年後の12月に始まる。しかも、灘区で配られる数が一桁だから当たるかどうかもわからないとの返事だった。最後に予算がないから仕方がないと追い返されてしまった。あのパンフレットに堂々と掲載してこの実態、呆れるばかりであった。結局、ベルボックスをやっている「神戸元気村」というボランティア団体に依頼するしかなかった。この話だけでなく、本当に行政の福祉サービスには失望させられた。

最後に、もうこの報告書が発刊されている頃は震災から2年以上経過しているだろうが、1995年4月から翌年4月末まで現地専従者として活動する上で、一年間よく続いたなというのが正直な感想だ。

神戸での一年は、支援の会というひとつの団体を通して本当に多くの人と出会いがあり、生きていくことについて教えて頂いた。現地活動がこの一年、自分の生活の中心となり、頭が痛くなることも多かった。頼りない専従者だったが、一年間活動を続けることができ、それは本当に多くの支援してくださった人たちがいてこそと思う。本当に感謝したい。

「ありがとう」の言葉を信じて

「自分の事さえも、きちんと出来ていないのに、何がボランティアだ！」私をよく知っている人達からは、痛い程言われていました。自分でもそのことに気付いていながらも、自己満足のために働いてしまっていた自分の身勝手さに改めて気付かされたのは、1月の終わりに私が起こしてしまった事故でした。震災という想像を絶する傷を負っている人に対し、更に大きな傷を負わせてしまった事、この事は事故を遭わせてしまった方にはもちろんの事、私たち支援の会を支えてくださった全ての方々に対して、心より深くお詫び申し上げます。たくさんの方々を支えて頂いたからこそ出来た現地での支援活動の中で、私が犯してしまった事、本当にたくさんの方々にご迷惑をおかけしてしまい、申し訳ありませんでした。

私は、この事を通して、自分の愚かさや、醜さを、哀しいぐらい見せつけられたように思い、考えさせられ、大変勉強になりました。

私は神戸に来る前まで、学生時代の仕事も合わせると、6年間ずっと様々な施設や、地域で、いわゆる“福祉”と言われる事に携わってきました。そのこともあり、神戸での活動に関して思い上がりを持ってしまっているようでした。実際、私を頼っていてくれる人達

が神戸には居る事を私自身が強く感じていた事も事実ではありました。そういう自分が今となっては情けなく思い、悔やまれてなりません。

神戸での1年間は、私にとって、大袈裟ではなく、本当に一生忘れる事のできない程ものすごく大きく、ものすごく大切なものでした。神戸で出会ったたくさんの人達。被災者の方はもちろん、一緒に活動をし、一緒に悩み、時には羽目を外したり、一緒に過ごしたボランティアの仲間との出会い、こんな宝物は他にはないだろうと思います。特に、同じコーディネーターとして一緒に仕事をした矢崎さん（名前を出してごめんよ！）ほんとうに良く言い合いをしましたね。「もう、大嫌いだ！」と思った事、正直言って何度もありました。（知っているとは思いますが・・・）矢崎さんもたくさんあったでしょう、ごめんなさいね。これも、今だから言える事なのかもしれませんが、矢崎さんはもち論の事、たくさんの方に支えられていたからこそ出来た現地での活動、そしてそれを支援してくださったたくさんの方々のおかげで、私たちは、神戸でたくさんの方がたの笑顔を見る事が出来ました。活動中は、つい支えてくださっている方々の存在を忘れてしまったり、自己中心的になってしまったよ

うに思います。

神戸で出会ったたくさんの人達。残念ながら、もう2度と会う事ができなくなってしまった人も、何名かいらっしゃいますが、私達は、決して忘れる事はないと思います。ただ、私達の活動がせめて、その方々の安心感や、笑顔につながってしてくれたらいいなあと、今は思っています。

私達現地での活動は、直接被災者の方々と接していく中でいつでも、「これで良いのか？」考えながら活動してきたつもりでした。それでも、何度話し合っても、考え込んでも、“本当に正しい答え”というものは、私自身を含め、見つけ出す事は出来なかったのだろうと思います。それでも私達が活動した1年間は無駄ではなかったと思いたいです。神戸で出会った人達の笑顔は、決して偽りではないと思います。私達には、結局何も出来なかったのかもしれませんが。その答えは今になっても、私には判りません。けれども、私の心の中にいつまでも響いているたくさんの「ありがと

う」の言葉を信じていたと思います。そして全ての「ありがとう」を、私達を支援して下さった全ての方々に、被災者の方に替わって、伝えさせて頂きたいと思います。「本当に、ありがとうございました。」

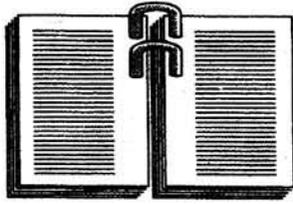
〈追記〉

1年間一緒に活動して、一緒に生活したボランティアのみなさん。力不足のコーディネーターの私を支えてくれて、本当にありがとう。もしかしたら、もう2度と会えないかもしれないけど、本当に忘れないと思うよ。みんなに出会えた事、本当に良かったです。集団生活はけっこうしんどかったけど、たまには、あの地下室の生活を思い出してみして下さい。そこに、みんなの笑顔と笑い声があるといいなあって思います。

大好きなみんなへ

またいつか、会えるといいね。





第4章 事務局 と会計

43

広野智子

事務局会議

■事務局本部が障害者いこいの家 めぐみホームに設置

1995年1月20日第1回事務局会議が開かれ、活動の本部がめぐみホームにおかれることになった。めぐみホームは1988年9月設立以来、街の中で障害のある人もそうでない人も共にくつろぎ憩えるフリースペースを提供してきました。教育の場でもなく働く場でもない。人との出会を楽しみ、ほっとできる場所として利用する人は、テレビ、カラオケ、おしゃべり、ゲームと自由な時をすごされている。又、障害をもつ人が作られた作品を売るこひつじショップも併設している。運営費は、行政からの援助は全く得られず後援会員の方からの献金とショップの売り上げ利益金で賄っています。

さあ、今日から支援の会の事務局を置くといっても、普段と変わらず利用者は来られるのだし、余分の人手があるわけでもない。無理

なことづくしの中で被災された障害者の方々のことを思う時「なんとかなるのところがうか。なんとかしよう」所長のひと声で事務局設置が承諾されたのでした。その時は、後々支援活動に追われ、ショップの品物を仕入れに行くことも、販売することもできなくなり、めぐみホームの会計が底をつき、運営が危ぶまれるほどの事態が待っているとは、考えもしませんでした。

めぐみホームを利用されている障害のある多くの人たちが、「もし、京都であの地震が起こっていたら、自分はどうなっていたんやろう」と不安を語られました。ですから21日朝から玄関には支援の会事務局の看板が建てられ、利用者が集うホールには予定表や伝言が書かれたホワイトボードが掛けられ、職員はひっきりなしの電話やFAXの応答、来客の応対とホーム中を駆け回り、利用者おかまなしの日々が始まったのですが、「自分たち

は支援したくてもできないのやから、がんばって・・・」とスタッフを見守りエールを送ってくださったのでした。

■情報収集、伝達

当初報道ではほとんど触れられなかった被災された障害者の人たちの情報を色々な方法で入手し、京都でなすすべもなく心配する人、なにかできることがないかと模索する人たちへ伝える。FAX用紙のままでは感光するのでコピーしてからすべてファイルするかたわら、情報を待っている団体や個人にFAXを流す、相当の仕事量であった。

■人材募集と派遣

新聞報道や口コミで全国のボランティアしたいという人から続々と問い合わせが増えてくるし、長期的になると、かなり絞られるが、話がまとまればまずは事務局本部にやってこられる。その中には今まで障害のある人と関わったことがない人達も多くおられる。「私にもできるのでしょうか」と不安がられる人達に「初めはみんなそうですよ」と、その方の状況にあわせて、その頃支援していた団体が行っていた炊き出しおよび介護ボランティアに、又当会が設置した東灘区の現地拠点へコーディネートしました。志願してこられただけでも大変な勇気が必要だったでしょうに「どこ

で寝るのかわからないので」と寝袋を渡し、送り出すのですから、相当緊張した面持ちで出掛けていかれたのを思い出します。

一番困ったのは、やっとのことでコーディネートしても、現地から「日々の活動に追われ新人を受け入れ、養成することのできる人も時間もない」と、断られることもしばしば、刻々と変わる状況の中で物資も人材も需要と供給がかみあわない。こんなに情報が速く伝わるようになった時代でも、必要とされ供給されたときにはすでに次の要求に変わっている。事務局本部はその狭間にあってせっかく協力を申し出てくださった方々にお詫びする場面も多々ありました。

■京都での一時避難場所探し

被災地の避難所での生活が困難な方々のためにと京都での受け入れを募ったところ、多くの家庭や団体から住居提供の申し出があり、リストを作り、利用に備えたのですが、被災して家をなくされた方々は「今まで住んでいた地域から離れたくない」と願われ、結局生活の場を京都に移された方は、当会の関わってきた人の中にはおられませんでした。

しかし避難所での生活の疲れを癒すために一時的な避難を繰り返しておられる方の利用が今も続いています。

■広報

まずは支援を訴えるピラを作ることから始まった。合計何万枚のピラを刷ったことでしょうか。賛同団体が差出人となり知り合いの団体や個人に送付。各新聞紙上やキリスト教新聞の報道に載せて頂くなどの手配。現地活動が始まってからは活動の様子を「支援の会たより」として発行し、関係団体や、支援者に送付、又3月20日に開かれた中間活動報告会の資料作り、次から次への印刷物に対し、当初本部には印刷機がなく、近隣の宇治教会や西小倉めぐみ教会へお願いし対応することができました。

募金をしてくださった方に、その募金が具体的にどんな活動に使われているのかを伝えることにより、「自分も支援活動に加わっているのだ」という実感を得ていただきたいという思いで、たよりをお送りし続けたのですが、反応はさまざまでした。「活動の様子がよくわかり、ありがたい」といってくださる方が多かったのですが、「郵便料金がもったいない」「便りがくるたび又の募金を迫られているような気がする」と送付を断って来られた方もありました。確かに活動の様子を知ることにより「まだお金が必要でしょう」と度重ねて送金してくださった方や団体も多くあり、毎回頭の下がる思いで領収書を書いた覚えがありましたが、支援の会としては決して募金を強要

したつもりはなく、また費用についても、現地で活動するのみでなく現地の障害のある人達の様子や活動の様子を全国の人達に知って頂くことにより、読んで頂いた方々がその地域で今後、障害者問題に関わっていかれる中でなにかの役に立てていただけたらいい、これも支援の会の大きな働きであろう。そのことにお金を使うことは意義があるとの事務局会議の判断でした。

■街頭募金

四条河原町、四条大宮、長岡京市イズミヤ前、大手筋で計10回の協力延人数316人、募金額1,544,305円の街頭募金活動を行いました。

一年中で一番寒い時期にも関わらず車椅子の人、知的障害のある人やご家族などを含め毎回たくさんの人の協力を得ることができました。凍える手をカイロで温め、渴れる喉をのど飴で潤し大声で、道行く人に募金を呼び掛けるのです。

■募金活動に参加した人たちの感想

「人に頭をさげて募金箱にお金を入れてもらう体験は初めて、恥ずかしくて初めはなかなか声がでませんでした。」

「歩いている人にチラシを渡すタイミングが難しいと実感しました。」

「おまえら地震にかこつけて金儲けしとるんやろ、誰に断ってここに立っとんじゃ」酔っ払って絡んでくる人には困ってしまいました。警察への届け出書やチラシを見せて納得してもらおうと「ほんなら」といって千円札を入れて立ち去られるのです。

「あんたらええことしているのはわかるけど、おれらも生活掛けて商売しとるんや、もうちょと場所考えるとか拡声器のボリューム下げるとかしてくれへんか」路店主からの苦情です。無我夢中で人の迷惑顧みず・・・ゴメンナサイ！このころ繁華街の街角では1日中、数時間ごとに入れ替わり立ち替わり違う団体が震災救援募金をしていて、町ゆく人も慢性化ぎみでしたが、被災された障害のある人の悲惨な様子を心より訴えることにより耳を傾け協力してくださる方が多かったと思います。くたびれて帰ってくると、地域の人が温かい粕汁をつくって待っていてくださったりして、疲れを癒してくださいました。

大人がそうであったように「自分にもなにかできることはないか」と考えた子供さんたちもたくさんおられました。貯めていた小銭を募金に持ってこられた子供さん。小さな体をマフラーや手袋で包み、声を張り上げてくれた子供さん一生の思い出となり「共に生きる」ことの一步を踏みだされたことでしょう。

■振込みによる募金

まず郵便振替口座と銀行口座を作ったのですが、郵便振替は口座を開き振替番号を知るまでに一週間ほどかかります。口座番号が決まらなると募金依頼書が刷れず、イライラしましたが2月4日には第一便の振込み通知が届きました。その後、毎日何件か、多いときは20件もの通知が届きます。その度郵便局へ引き出しに行き銀行へ預入れ、会計帳簿処理、領収書の発行、うれしい悲鳴の連続でした。急遽作られた支援の会がこんなにも迅速な、こんなにも多くの協力を得られたのは賛同団体が日頃から温めてきたネットワークの賜物であり、人の輪のすばらしさを感じずにはおられませんでした。

【振込み通知書に書いてあった一口コメント】

00		払 込 取 扱 票	
口座番号 (右詰めにご記入ください)		金額	8000
010108		20216	
加入者名		振込日	6
被災「障害」児・者支援の会		振込時刻	
通 常日頃 地道に活動中であるグループの		切取らないで郵便局にお出ください。	
救援活動中である。心にかかっているし、			
す。必ずマフラーやお役立て下さい。			
振込人住所氏名		受付局日附印	
612		7.2.13	
付戻先 秋山町大島38-2-2			
導師寺 〇〇			
112 1748			
裏面の注意事項をお読みください。(郵政省)			

F4 1 020216H 8000 60 F00F 0213 2 2451301

00	京都	払込取扱票	205
010108	20216	金額	¥3000
被災者支援の会 料金 60		印	
私自4級の障害者(視覚障害者)として 身障者手帳の交付を受けて居る身として 何事のこと(毎月はとてとて)も手合せない 身の長い支援(心の輪を広めたい)とて 深川 益生 (電話番号) 351-2986			
郵便番号 600 京都府下京区寺町通山又寺下町1丁目 深川 益生		7.420 	

F4 1 020216H 3000 60 F00F 0420 2 2554301

銀行振込で送金されてきた場合、振込人の名前が字数に限りがあって通帳にフルネームで記入されない、振込人の住所もわからない。そのため領収書や支援の会たよりが送れなかった方がありました。口座を開くのに少々時間がかかってもこういう場合は郵便振替を利用すべきだという教訓をえました。

■地域から集まった募金

仲良し主婦らグループで年に一回外食会にと毎月積み立てられたお金、一人の提案で「今年は食事会を止め、支援の会へ募金しよう」ということになり届けてくださいました。さぞかし立派な食事会ができたでしょうという額でした。めぐみホームを利用している障害のある人たち、切り詰めた生活費、小遣いの中から募金してくださいました。又、めぐみ

ホームに併設するこひつじショップのお客さんが支援の会のことを知りご自分の知り合いの方やお店を回り電話をかけ、日々募金集めをしてくださいました。

本部の近くの商店に置かせてもらった募金箱、つり銭の小銭にも温かい心が感じられます。賛同団体の一つである耳鼻科の医院ではたくさんの人々に呼び掛けてくださり毎週のように募金箱の中身を届けてくださいました。「通りすがりの者ですがここが何年も障害者のための活動をして来られているのを見て知っています。ここが本部なら信用できます」といって多額のお金を差し出してくださいました。

■事務局本部の奮戦記

普段のめぐみホームやこひつじショップの運営に加えての本部の仕事、所長と常勤のスタッフ2名、週一日の職員1名の労力ではとうてい及びません、みかねて本部を手伝う方も来てくださるようになりました。さまざまな関係の人達でしたが、特に宇治教会の方々がローテーションを組んで連日どなたかがお手伝い下さいました。

各ボランティア団体が経験されたことなのだと思いますが、電話におわれ、人の応対におわれ、お金の収支におわれ、目先の仕事におい回されて、山積みされた仕事をどう整理し、

せっかく集まって下さったボランティアの人達にどう分担したらよいのか考える時間さえない。「コーディネーターが欲しい」現地のボランティア団体数箇所からの切実な願いが大きな文字のFAXで流れてきます。その気持ちがよくわかりました。

当事務局本部でも小パニックが起こってしまいました。しかし外部から手伝いに来てくださった人もはじめは何をしたらよいのか解らない、指示もない。何かしないと何のために来たのか意味がないとイライラされるのですが、そのうち遠回しに全体の流れをつかみ、自分にできる仕事を見つけ、行動して下さるようになりました。

大量の印刷をする人、郵便局や銀行へ出入金の手続きをしに行く人、掃除をする人、スタッフの食事を作ってくださる人、こひつじショップの店番をする人、めぐみホームの利用者の話相手をする人、封筒の宛名書きをする人、ピークの三ヵ月間で延べ200人もの人が本部を手伝って下さいました。この経験が、お手

伝いする人にとってもお手伝い願う側にとっても、一步引いて全体をみることが大切だという教訓を与えてくれたと思います。どんな難儀な困難な場面にあっても、日頃のひたむきな活動と人の輪があれば乗り越えられるのだという自信も得ました。



被災地の情報

阪神大震災が起きた1995年1月17日、当時私は被災された方々、特に障害をもたれた方を支援する活動にいち早く動き始めた、めぐみホームで仕事をしていました。周囲の障害者と関わるグループと『被災障害児・者支援の会』を組織し、支援活動を推し進めていく上で、まずぶつかった問題はあまりにも被災地神戸の情報が不足しているということでした。

その頃のテレビや新聞等で報道されている情報というものはライフラインの復興状況は知ることはできても、そこに住む人達、特に障害者が今どのような状況下に置かれ、どう生活されているのかなどは全くと言っていいほど伝えてはくれませんでした。そこで支援の会の事務局であっためぐみホームでは、他で支援活動をしているグループとファックスなどを通し情報のやり取りを始めることになりました。すると私たちと同じように情報のやり取りやさまざまな連絡を取りたがっていたグループから止まるところを知らないかのように朝から晩まで次々と情報が寄せられ始めました。

この事務局に寄せられた情報を共に支援の会を組織するグループに、そして支援活動を支えてくださっている方々に伝える役割を私は与えられ、送られて来たファックスをすぐ

に転送したり、コピーを取ってめぐみホームへ訪れて来られた方がいつ来られてもその情報を見ていただくことができるように整理し、ファイリングをする毎日が始まりました。私はどちらかというすぐさま被災地に飛んでいき活動をしたいというタイプの人間ですから事務仕事というのは大の苦手なので、この作業に戸惑いながらも事務局の仕事の一端を任され携わらせてもらえたことを喜びに感じていました。神戸に直接いくことがなかなかできない自分だったので、送られてくるファックスをコピーする間に今被災地はどうなっているのかとその情報にくいるように目を通す毎日が続いていたことを覚えています。その送られてきた情報の中には自分の想像をはるかに越えた生々しい危機迫る現実が載っており、行政の対応のまずさも、今被災地では何が必要とされているのかも、その送られてきた情報から知ることができました。

そうした中でやはり支援の会としても直接現地にボランティアを送り支援することの必要であるということを知られ、2月の中旬から灘区に現地事務所を置き支援活動を開始することになりました。現地に赴いてくれたボランティアの方々は交通機関が寸断されている中、自分の足だけを頼りに避難所回ってくれ、そこで出くわす人達のことを、またその活動

を行った一日に何があったのかを毎日ケース記録としてまとめ、京都にある事務局にファックスしてくれました。その膨大な情報が被災地神戸と支援をする私たちの住む京都とを結ぶ役割を果たしてくれていたと感じています。その情報をファイリングしたものは今でも

事務局であるめぐみホームに保管してあると思いますので、支援の流れを知りたい人、その頃の状況を知りたい人は一度たずねてください目を通してくださればすごく良い資料になるのではないかと思います。

45

鶴谷忠夫（有田教会）

支援の会の活動を祈りつつ

1995年1月17日午前5時46分、さあ起きようかと今日のスケジュールなどを思い返しながら、特に「めだかの学校」（反原発の市民運動の集まり）で発表する、「原子力行政を問い直す宗教者の会」について何かと考えていた矢先に、ガクン、ガクンとベットが持ち上がり、とっさに何が起こったのかわからぬままに、どこかの原発が爆発したのではないかと思いました。すぐにテレビをつけて見ると神戸が大変な被害に合っていることを見ました。（一瞬、原発が爆発しなくて良かったと思いました）しかし、神戸は見ている間に火の手が上がり燃え盛っていきます。何の手も打てない状態を見せつけられ、私のような者が、現場にも行かれず、行っても役に立たず、足手まといになるだけです、ただ神の哀れみにすがって祈るばかりでした。

当時様々な情報が飛び交う中で何かできることはないかと、車に寝具を詰め込んで「めぐ

みホーム」に伺った時、ボランティアの方々の一人お一人がとても落ち着いて活発に頼もしく働いておられました。神様のお守りと導きを心から祈って帰ったことを思い出します。

私の奉仕をしていた滋賀地区の安曇川伝道所は、教団の方に送金しましたが、障害者支援にはなかなか回されないことを知り、私個人は、この為に心血を注いで居られる、「小倉めぐみ教会」の働きに連なりたいと、ささやかな送金を始めました。

95年3月末、安曇川伝道所を辞任、8月から、九州教区の有田教会に赴任しましたが、「被災『障害』児・者支援の会」の便りを頂き、「支援の会」の働きを知らせていただきました。たいした事もできないままでしたが、1年間で支援を打ち切りました。

皆様の健康や活動が神の祝福をうけていかれますようにお祈りしております。

「支援の会事務局」に関わって

早朝、大波にさらわれるような気がして目が覚めると地震でした。その後テレビで続々と報じられる阪神・淡路の様子に釘づけになったあの日。家族と食事ができることや、暖かい蒲団で眠ることさえ申し訳ないような気分になりました。被災された方々に自分ができることはないかーきっと誰でもそう思ったに違いありません。そんな時でした。「めぐみホーム」の広野さんが、宇治教会の礼拝の後で「めぐみホーム」を事務局に、「被災『障害』児・者支援の会」を始めたことを報告され、支援を呼びかけられました。何というすばらしい行動力!私はすぐに「何でもいいから手伝わせて!」と申し出ました。他に何人もの方が広野さんに駆け寄ってお手伝いを申し出られました。どうしたらよいかと途方に暮れていた私

たちに道が示されたのです。それ以降、時間をやりくりしては伏見へと走りました。教会の方々とは話し合っ分担当のようなものも作りました。

事務局は鳴り続ける電話、絶え間ない来客、持ち込まれる支援物資の山にてんやわんやの毎日でした。一方では平常通り、のんびりホームで時間を過ごす障害者の方々が、「これくださーい!」と叫んでいる「こひつじショップ」のお客さんあります。私たちはとにかく急を要する「支援の会」のため、事務局の方が少しでも多くの時間と労力を注げるようにとお手伝いを始めました。掃除、片づけ、カンパの箱作り。銀行や郵便局へ行ったり、昼食の材料の買い出しに走ったり。街頭募金に立ったこともありました。、そのうち、被災地から障害者の方が京

都へ一時避難してこられることになり、そのお手伝いも必要になりました。とにかく、小さい事でも、自分にできることをしたいという皆の熱意にあふれた日々でした。現地で直接ボランティアしたわけではありませんが、自分なりに満足でした。事務局にとっては「きまぐれボランティアおばさん」はかえって迷惑だったかも、と今になって恥ずかしい気もいたします。

今回ほど日本人がボランティア精神に目覚めた事はなかったと言われています。いくら自分の力を差し出したくても、それを上手くコーディネートするところがなくては無駄になってしまいます。今回の事務局の働きは被災された障害児・者は言うまでもなく、多くの新米ボランティアにとってなくてはならないものであったと感謝しています。ありがとうございました。

東中国キ障共から

キ障共とは、キリスト者障害を共に学び共に担う会の略です。発足して9年目の歩みをしている超教派の会です。内容も少しずつ充実し、「共に生きたい」と、少なくとも考え考え歩んでいる最中に、あの大地震がありました。「共に」と歩んでいたつもりなのに2、3の会員から、「キ障共として何か支援しないのですか」と問い合わせがあった時、役員会では、会員の1人1人が、教会に属しているのだから、それぞれの教会の支援方法に応じて活動したらいいのではないかと、特に障害者の団体からとか、障害者へと考える必要はないのではないかと。かえって、あまり窓口を細分化しないほうが等と考えてしまいました。また、すでに日基教団東中国教区は、いつもになく教区が一致団結して、物資輸送や募金の活動等が始まってもいました。

そこへNCCからの、弱い者がますます弱い立場に置かれているとして、その状況と発足の通知がありました。緊急役員会を開き、なぜ会員のあの一言が受け止められなかったかと悔みつつ、即行動に移しました。JR岡山駅前での街頭募金や世界祈祷日など諸集会でのアピールと募金を行い、とりあえず45万円を送金しました。

岡山駅前での募金活動の時、ちょっとしたハプニングがありました。一生懸命マイクで

通行中の人々に呼び掛けていると、駅前のバスセンターから職員が走って来るのです。「マイクの周波数を変えてくれんかなあ、センターじゅうにそっちの声が入ってバスの案内が出来んがな」と。すみませんとは言ったもののメカに強い人がなく、少し場所を移動して続けました。手伝いに駆け付けた姉妹も、バスを降りるなり聞きなれた声が出て「え？センターのマイクが借りれたん？」と思ったそうですから、かなりたくさんの方が聞いて下さった事は確かです。

その後は、6月に「被災『障害』児・者支援の会」代表の多芸牧師をお招きして、講演と報告をして頂いたのですが、後の質問の中で、「支援の会」にはお金が結構集まっているが、事務局を引き受けた「めぐみホーム」の方は従来の活動が出来なくて火の車だとお聞きし、その場でみんなで話し合い、第1回送金以後の募金や会場献金などは「めぐみホーム」へお働きを感謝してお渡ししました。

教区として、また教区婦人会として、長田へ500人分のおでんやおすしを、またビビンバを、地域のお店が開店する頃まで応援させて頂き、また西宮へは、仮設住宅のお年を召した方々への訪問（「一緒に踊って歌おう」というもので、西宮Yの企画——その時ある婦人が、「演奏会はたくさん開いてくれたよ。だ

けどな、わたしら自分で歌いたかったんや、今日は嬉しかったよ」と言われた言葉が忘れられません――) などさせて頂きましたが、一年半を過ぎた現在、正直なところ、見えて来なくなってしまいました。本気になって動けばあんなにみんな応援してくれたのですから、この報告をさせて頂きながら、一度この目で

まだ終わっていないというか、深刻化している状況を確認させて頂きたいと思うようになりました。

「障害児・者」に「および高齢者」が加えられた事は、老いた母を看っていて、真にさもありなんと思えるのです。忘れてしまったような私たちを心からお詫びしつつ。

めぐみホームと息子・私

阪神大震災の起こったあの朝、いつになく大きな揺れの中でも、息子・亮は「うるさいな」と眠ったままで文句を言い、学校に出かけていきました。緊急連絡網で“休校”の連絡を受けたのは、亮が出かけてから10分も後のことでした。急いで身支度を整え、追いかけてきました。学校に着くと真面目(?)な男子が3人、職員室へと移動するところでした。この時先生方はすでに半数以上出勤されていて頭が下がる思いでした。

この日は亮のてんかんの薬を児童福祉センターにいただきに行く日でしたので、電話を入れると開けているということ、電車も市バスも普段通り、何事もなかったように機能していました。大変な地震だったと気付かされたのは、帰り、高島屋の東側の窓ガラスが地面に

散乱しているのを見た時でした。その後、テレビに映し出された映像は想像を絶するものでした。我が家でも、冷蔵庫が5cm程前に移動していたのが解ったときは、ぞっとしました。茶碗一つ割れなかったのが不思議なくらいでした。もしも家族が離ればなれに震災が起こった時の避難場所についても話し合いました。

めぐみホームから“支援の会”への後援会への誘いの連絡を受けたのは、私に何が出来るのだろうかと考えていた時のことでした。さっそく「小栗栖障害児・(者)を守る会・エンゼル会」で話し合いました。被災地の障害者を支援するという“支援の会”に全員一致で賛同するが、恐らくは夜になるであろう会合に出席することは不可能なのではないかとい

う結論から、後援会に名前を連ねることは控えさせていただき、手伝えるところで関わっていただくということになりました。会からは寄付をして後は、個人で参加するという事です。

その一環として、大手筋や四条の街頭募金がありました。大人だけではなく、多くの子供たちが小遣いを寄付してくれました。震災で子供たちも犠牲になったり、親を亡くしたりしていることを自分の痛みとして感じていたのでしょう。貴重なお金を預かっているのだと感じました。学校でも職場でもおそらく募金活動は行われていたはずですから出費が重くなったと思うのですが、めぐみホームだったら信用できるからと、気持ちよく寄付してくれたコーラスのサークル仲間、勤務先で募金を集めてくれた友人、本当に人々の善意が集まったし、それほど大きな地震だったのです。

めぐみホームで雑務を手伝ううち、めぐみホームを維持するための収入源である花がない、陶器も少なくなるという状態が続き、不安を感じました。職員の人たちは、ボランティアの面接、人材や物資の手配、度重なる会合などで、仕入れに行く時間も取れない様子でした。このままでは、めぐみホームがなくなってしまうのではないかという不安。しかし、私たちに雑用を手伝うことぐらいしか出来ませ

ん。

縁あって、昨年の9月から職員として働かせていただいています。被災地に行ったこともなく、支援の会の会合にも出席していない私は、事務局を側面から見てきました。人間関係、金銭問題、事故、様々な問題も起こり、なおかつめぐみホームの本来の行事も例年通り行われました。

7周年記念講演会（被災地の障害者の方が来られました）、織りと器「虹」展、クリスマス会、ハープコンサート（支援地でも行われました）、春の親睦会、そして今年の8周年記念の講演会（北海道べてるの家）他々、事務局の仕事をしながら、めぐみホームの運営をされてきた1年半ほどの時期、本当に大変だったと思います。今は身内となった私がこんなことを言うのはおかしいかも知れませんが、事務局を支えてこられた、職員、支援の会のメンバー、ボランティアとして関わってこられた多くの方々の底力にエールを送りたいと思います。



会計報告

収入の部

街頭募金（支援の会独自のもの）	1,544,305
その他（個人や団体など）※	19,659,945
	<hr/>
	21,204,250

支出の部

物資支援（炊き出し材料、自転車他）	430,818
団体支援（ボランティア団体他）※	4,310,000
人件費（現地コーディネーター他）	2,000,000
支援活動費（交通、通信、事務費他）	10,786,517
繰越金※	3,676,915
	<hr/>
（1997年8月現在）	21,204,250

支援の会の活動にご賛同くださり、支援金、物資等、心温まるご支援くださいました全国の個人や団体の皆様に感謝し、お礼申し上げます。

※“その他”は個人、グループ、団体からお寄せいただいた支援金その他、各地で開かれた街頭募金、コンサートやバザー収益及び、各種事業団、社会福祉協議会等からの助成金などです。

※“団体支援は”支援の会兵庫等、現地で支援を続けておられる団体等への支援金として支出しました。

※“繰越金”は現在、作成中の活動報告書の諸費用その他にあてる予定です。



第5章 支援の会 座談会

日時 1996年9月27日午後7時

(場所) めぐみホーム

出席者

多芸正之 (めぐみホーム)
棚谷直巳 (ホットハウス)
平田 義 (愛隣館)
広野智子 (めぐみホーム)
銅銀正美 (櫻の家)
宮本真希子 (現地ボランティア)
上田啓悟 (被災障害者)
柏木正行 (愛隣館)
福土友子 (京都市民福祉センター)
川上 信 (めぐみホーム)
中西昌哉 (ベテスダの家)
矢崎和彦 (愛隣館)
川端佐代子 (現地ボランティア)

支援活動を通して学んだこと

めぐみホームでテレビ見せて

〈電話でできた支援の会18団体〉

司会 私たちが「被災『障害』児・者支援の会」をやってきて、ちょうど1年半がたちました。現地点での集約と展望を話し合えたら、と思います。最初に皆さんがこの「支援の会」に参加されたキッカケは？

多芸 あの1月17日、めぐみホームのテレビニュースで被災地の状況を見ていて、被災地の障害者の人たちはどうされているのか、と大変に心配になってきたんですよね。そこで教会として支援活動はどのようにされるのかと、京都教区議長に尋ねたんですよ。そしたら、「京都教区は被災地の教会を支援するのだ」と言わはるもんやから、私は教会の支援より先にしんならんことがあるように思ったし、「それやったら、私たちは被災された障害者の人たちに対する支援活動を始めますわ」と言って、それからみんなに呼びかけたんやわ。

平田 ぼくも、日本キリスト教団出版局に何か情報が入ってきていないか問い合わせたところ、「兵庫教区の教会の被災状況」がファックスで送られてきました。そこには、教会の会堂の被災状況と、主任牧師の安否のみが記されていました。教会の会堂が壊れてなくて、牧師がどうもなければ、一覧表には“無事”となっていたんです。何でや、教会は地域に存在しているにもかかわらず、会堂が壊れてなくて、牧師が無事ならそ

れでエエんか、こら何とかせんとアカンと思ってた時に、多芸さんから電話があって「教会をアテにしたらアカン。自分らで焦点をしぼって自分たちのできる支援活動をやろう。」との呼びかけがあって、ハイ、やりましょうということになったんです。

矢崎 ぼくも教会に行ってたけど、今度の地震の時、教会関係者がどうかなんて意識してなかったですね。ただ、ボランティアの中には、この「支援の会」がそういう教会関係の組織だと思って来た人もかなりいたけど。

広野 私はめぐみホームから急いで、日頃お付き合いのある障害者団体に電話するなかで、18団体になって、ただその中には事務局体制も整わないうちに、とぎれてしまったりしたけど。

銅銀 それは明文化はしていなかったけど、この「支援の会」は、被災地域に在宅で生活している障害者であって、障害者施設の支援は考えていなかったと思うんです。そのあたりの考え方もあるかと思いますが。

多芸 その点については、平田君がずいぶん強く主張していたね。施設の応援はやめとこう、施設の後かたづけに行くような支援活動ではなく、障害者の生命にかかわる支援活動をしていこう、というようなことを平田君はよく言っていた。

ぼく神戸に帰りたくなかった

〈被災地での障害者の現状〉

矢崎 けど、ぼくらは障害者授産施設への送迎なんかも長い間やっていたな。彼らは送迎がなかったら外出もできん状況やったし、そういう意味では施設支援とまでは言えんかもしれんが。障害者は自力で出勤するという従来の規則のままで、交通機関が不通になった時は、臨時に援助することが、障害者施設や、神戸市行政ではどないにもできんかったんやろうか？

平田 宮本さんたちが神戸現地の被災者として、この活動に参加したキッカケは？

宮本 私は当時、地震のこと以外は関わりたくないという強い思いがあって、この活動をするということを聞いて、それまで関わっていた大阪の作業所をやめて、この会に入れてもらったんです。

- 上田** ぼくも避難生活から10日ほどして抜け出して、京都に一時避難したけれど、もうあの神戸に帰りたくなかった。
- 多芸** 実際のところは、京都にしか上田啓悟さんの介護者は無かったんところがうんか。(笑)
- 銅銀** 当初の事務局会議の毎日は目まぐるしくて、たとえば京都市内の募金活動でも日々場所や金額が変動したし、神戸現地の支援の手段でも、数日間は自転車、1週間たつとバイク、1ヶ月たったら自動車という調子やったな。
- 広野** 私は「支援の会」の賛同団体になってくださったグループや、一緒に活動してきたメンバーについて思うのですが、誰かが呼びかけた、呼びかけられたという関係ではなく、これまでから深い結びつきがあって、ふだんやっていることや考えていることの延長として一斉に集まり、あっという間に始めたように思う。それは支援活動のカンパとして、事務局に送られてくる振込用紙に書かれてある一言ひとことを見ても、この会が急に降ってわいた会ではなく、何百何千の人たちが今まで私たちがやってきたことを見てくださり、あの人達ができるんだったら応援しよう、と思ってカンパをしてくださったという言葉があり、すごく励まされました。
- 矢崎** そのつながりはほんとにすごかったと思いますよ。経済的な部分も大きいし、人のつながりによってこれだけの活動ができたんだな、と実感しますね。ぼくが働いていた大山医院でも、聴覚障害者の情報や補聴器に関することをほんとうによく調べてくれたし、神戸に行くとき自由に休ませてくれたりして。病院の受付に置かせてもらった「支援の会」のピラを見て、募金してくださった患者さんも考えると、賛同団体や個人のほんとうに大きいつながりで、「支援の会」が支えられていましたね。広野さん、何万人の単位までいくんじゃないですか？

初めての街頭募金は

〈京都の支援活動〉

- 司会** この間一人ひとりが「支援の会」をやってきて、今も印象に残るのはどんなことですか。各自話してもらえますか？
- 多芸** いっぱいあるけど、街頭募金には小さな子供達も一緒に家族そろっ

て協力してくれたことがあったな。大手筋商店街での街頭募金では、いくつもの他団体が並んで携帯マイクを使って、大きな声でまるで競うように募金を訴えるもんやから、露店で商売をしている人たちにはたいへん迷惑をかけたこともあったな。ときには叱られたこともあったわ。

最初に被災地に行ったのは1月23日だったんやけど、被災地の状況を見て、ほんとうにショックを受けたわ。最初、西宮のある教会へ行って、被災された障害者の情報を得たいと思ったんやけど、その人が、ほとんどわからないけど、近くのすずかけ共同作業所に何人かの人たちが避難されているらしい、と言わはったんで、すぐにすずかけへ行ったら、そこには2家族の人たちが避難してはって、もうほんとうに暗い雰囲気横たわってはったのを覚えてるな。また物資支援ということでは、緊急輸送の許可を警察からもらって西宮へ向かったんやけど、一般車は走れない名神を走ったんやけど、前にも後ろにも車が1台も走ってへんねん。ぼくの車だけ走っていったんやけど、不気味やったわ。

ボランティアの人たちに対しては、最初めぐみホームでいろいろ説明をしてから、被災地へ行ってもらったんやけど、それまで障害者の介護なんて一度もしたことがない、という人もいて、とっても不安そうなんや。まあ、何とかなるって、とか言って送りだすんやけど、そういう人たちが被災地で活動をして帰ってこられた時には、ほんとうにすっかり人が変わって帰ってきはる人が多かったな。なかには、その後の人生の進路まですっかり変えてしまはった人もいはったわ。それに、「支援の会」の活動を始めて、本来のめぐみホームの働きが全くできなくなってしまって、めぐみホームの利用者の人たちはずいぶん困られることが多かったと思うんやけど、何一つ苦情を言われる人もいやはらへんし、むしろ街頭募金などにも積極的に参加して下さったりして、ほんとうに心打たれることが多かったわ。

中西

私は初めから関わったにもかかわらず、実際に神戸での現地活動ができなかったのでだいぶ異なりますが、あえて言えば現地に関わっている人たちを見るのが印象的だった。「支援の会ニュース」を作ったとき、北海道からのボランティアの感想などが印象に残っているが、当初はこれまで長く、多くの活動になるとは予想していなかったし、実際には、被災にあってというより、被災にあってそれまでかかえていた問題が表面化したと聞いて、そんなことに関わっていくのは大変なことだと思ったから、

今年4月に、やめないでもう1年やろうという決断を、事務局会議でしたことも大きかった。

広野

私はもし個人であれば、こんなに支援活動に参加できなかったのではないか、と思います。めぐみホームとして支援活動をする決まり、それじゃがんばろうという思いでした。実際のところは、「支援の会」の仕事を夜中までしながらも、一方では、めぐみホームを続けていくためには、こひつじショップの売り上げもあげなければならないのに、1～3月頃は1日500円しか売り上げがないという日が続いて苦しみました。4月頃から少しずつボランティアの人たちの協力が得られるようになって、めぐみホームのこともできるようになっていったのですが。

「支援の会」会計をして、知らされたことは、めぐみホームの前を通られた、知らない人がカンパをしてくださったり、隣の銀行の次長さんが、預金に来られた人が募金をしたいと言っておられる、とそのお客さんを連れてきてくださったりしたこともありました。ある人は、毎月定期的に1万円ずつ送金してくださった人もありました。また、コンサートや催し物の利益金を送ってくださることも度たびでした。数限りなく多くの人たちが支えてくださっているから、支援活動を続けていくことができるのだ、ということを実感させられてきました。

それにハーブ奏者の池田千寿子さんから、被災地でコンサートをしたい、と申し出ていただいて、仮設住宅でコンサートを開いたとき、池田さんがみんなで歌いましょうと、「ふるさと」とか「シャボン玉とんだ」などを演奏してくださいましたが、コンサート終了後も帰られない人たちが「今、夢を見ているようで、夢から覚めたくないし、しばらくここにいたい」とおっしゃった言葉にも感動しました。

さいごに、悔しかったのは、事務局なんか無かっていいと、神戸現地のボランティアに言われたことも忘れられないことで、心に焼き付いて残っています。

銅銀

ぼくの場合は募金活動が始まりで、職場の長岡京市でやりたいと思い、イズミヤ長岡店にお願いして、乙訓の里の職員や仲間や親をむりやりさそったけど、一回きりであとは続かなかった。その後はみんなとの四条河原町では、歩行者の一人ひとりを見つめて呼びかけるようにしていた。同じ場所でティッシュを配っている女の子が「私も入れとこ。」と小銭を入れてくれたのが、印象に残っています。今年になってから、神戸の現地

ボランティアに行くようになって被災者の人生をかい間見て、自分自身は楽しみにして出かけています。

仮設住宅に、ハーブの音色が

〈神戸の現地活動〉

柏木 ぼくは大手筋で街頭カンパしたときのことや、六甲小学校での炊き出し、公園で焚き火の周りを囲んでいる姿や、池田さんのハーブコンサートで仮設住宅を回ったことなどが、共通して心に残っています。

棚谷 ぼくの場合、「京都一時避難」で、六甲デイケアセンターの津田さんが神戸から7時間かけて、夜の11時過ぎに到着と同時に玄関でバツタリ倒れて…、被災地の障害者の疲労状態を、その時始めて目のあたりにした気がします。彼にとっては、自分に必要な杖としての「薬」が、被災して無い。「休む」場所が無い。どこにSOSを出して良いのか、情報が無い。そんな状況だったと思います。京都府立洛南病院の当直のドクターと事務員さんが、津田さんのふだん飲んでいる「薬」について尋ねるために、深夜12時過ぎまで神戸の主治医につながらない電話をかけ続けてくれたのも、印象に残っています。電話をかけながら、疲労を取るためのドリンク剤を飲み、教会に帰りました。それが、京都一時避難の始まりでもあったわけです。

それで、精神医療に関する情報が被災地に無いこと、本人に届きにくいことを痛感して、京都一時避難に来ていた人たちとも相談しながら、被災地でも開いている精神科クリニックや精神科救護所の情報をチラシに書いて、〈精神医療SOS〉のビラを現地スタッフに配布してもらいました。「無責任な情報は流さないように」という一部の行政の方の批判もあったんですが、精神科救護所のボランティアのドクターの反応は比較的よく、逆に「××の電話番号につなげた方がよいですよ」と教えてくれたりしました。

川端 あのチラシ、早起きしてYMCAに配りに行ったっけ。救援物資をもらうためにできた長蛇の列に、並んだ一人ひとりに手渡しして。「うちは関係ないからいりません」って返す人もいたけど…。とにかく本当にたくさんの人でした。

宮本

あの時そこで食べた炊き出しのお餅、おいしかったね!

私が心に残っていることは、今もずっと訪問を続けているKさんのこと。それから、事故で骨折したOさんがもうこのまま寝たきりになってしまうのでは・・・と心配していたら、見舞うたびに元気になって、ついに歩けるようになるまで回復していったこと。それと、Tさんのことで、多芸さんにこっぴどく怒られたこと。当時、私は月・水・金とTさん夫婦の学生青年センターでの入浴の送迎をしていましたが、G・Wの時、活動が休みになり、一週間以上空いてしまい、休み明けにお風呂はどうしてはったか、聞いたところ、「家ですわりました。」と言われました。私は「そんな、家に入れるんだったら、この支援活動はいつまでできるかわからないことだし、家ですわることをもっと考えていった方がTさんのためにもいいんじゃないですか?」と事務局会議で言ったところ、多芸さんに「何でTさんが休みの間に、家でお風呂に入れたことを喜べへんのや!自分たちがこれからどうしていったらいいか、一番真剣に考えているのは障害者自身や!こっちからそんなことまで考えなくていいんや、それは傲慢や!」と言われたことです。このことは、今でも活動が続けるなかで度たび思い出しては、このことにつながっていく問題だな、とよく思うんです。

矢崎

ぼくも個人的にはOさんの回復が一番かな。一時はほんとうにどうなるか心配した。宮本さんと病院へお見舞いに行った帰り道は、いつも何ともいえん妙な気分になったけど、自分で歩けるようになった、とうれし涙を流して話してくれたことを、やっぱり思い出すね。

福士

いろいろなことがめぐってきて、なかなかまとまらないけど、はじめて神戸に行った頃、自分が想像していた活動内容と、現地に行ってから活動内容のギャップが大きかったし、なかでもボランティアに来た人びととの出会い、神戸の人びととの出会い、今もいろんな人が浮かぶし、やっぱりこれを思い出に終わらせず、これからどうなっていくのか、を自分で考えていきたいな。

川上

遅れて今来たところなので、今一つ話の流れが判っていないかも知れないんですけど、心に残っていることと言うと、支援活動に関わっていて、今振り返ると、自分の持ち場を十分理解することなく舞い上がって、自分自身が空回りしてしまったようななかにいたような気がします。どうということかと言うと、京都では事務局の仕事、神戸では現地の仕事があり、両方がうまく機能してこそよりよい支援活動ができるのに、その両方

に自分はまたがっていながらどっちつかずの自分があり、自分がどう動けばよいのかわからなくなってしまっていたような気がします。自分がよいと思ってやったことが、よくなかったこともあったのではないか。何かしたい、現地に行きたい、という単純な気持ちが自分が今やらねばならないことを見失わせていたし、空回りしてしまっていたように思います。そのことが連携のなかで動く支援活動に、共にいた仲間迷惑をかけてしまっていました。そのような反省が今、心に残っています。

それと、神戸で出会った障害をもった人や高齢の人が、今なお仮設での生活が続いています。仮設を出たくても、家を建て直すことも、他の地域に越すこともできない状況におられる人があまりに多く、何がその人達を支えていくことになっていくのかが気がかりで、直接支援活動に参加できない今、そのことがすごく気になっています。

矢崎 自分のことやったら、去年3月にコーディネーターに決まったことかな。はじめは何か手伝いたいと思ったけど、ここまで長くやるとは思ってもみなかった。それまでボランティアとして働いていたときと比べ、実際余裕がなかった。でも、この間これほど多くの人と会ったり、話したことはこれまで無かったと思うし、そのなかでこれほどの短期間に、身近かに感じた数人の方が亡くなったことも、いろいろ考えさせられた。あっという間の1年間でした。

平田 個人的なことではYさんで、障害者兄弟をかかえていたお母さんが一所懸命生きていて、震災があってはじめて兄が働いているとだまされてたのが、その後新しい作業所に行って、前向きに考えるようになって良かったな。

矢崎 すごいおじいさんの家のことも話題になったな。コーディネーターの自分としては、現地の活動と京都の事務局会議の方針とのギャップはあったと思う。

みんな 専属のコーディネーターが間にたって、彼一人のことでも大変だったろうと思う。甲子園球場のチケット3枚の件も思い出だったな。(笑)。息抜きの野球観戦が、けっきょく現地責任者と巨人ファンの女の子とのけんかの間につつことになってしまったしね。

川端 今も付き合いの続いている人と出会えたことは、もちろん心に残っているけど、2人の小さい子供をかかえて、外に出られない、お風呂にも入れないという、どうしようもない状態だったある女性が、とても心に残って

います。2～3回訪問して、最後に会ったときは、散歩に出たって、とても嬉しそうな顔をしていたのに、次に訪問に行こうと思ったとき、「風邪をひいた」って言って訪問を断られて、その後、手紙書いたら「ありがとうございました。さようなら。」という返事の手紙が帰ってきて付き合いが終わってしまって…。そんなふうにとだえてしまったから、いまごろどうしているのかな…って。いまだに気になってしまいます。

長くて短い支援活動の中

〈歩きながらの事務局づくり〉

上田 ぼくの今感じていることの一つに、震災の思い出はだんだんうすれてきている。これじゃあ、アカンと自分で感じながら、毎日の生活に流されてきて、それが何か自己矛盾をしている感じです。

平田 皆さんの心に残る活動を聞きながら、「支援の会」が始まった頃がずいぶん昔のことのように思えます。それだけ、いろいろなことがあったのと、毎日が密度の濃い、充実した時間であったともいえるのではないかな。現地活動の拠点を設けて以来、現地でのミーティングを終えてから、夜京都に戻る毎日だったけど、今から考えると、よく身体がもったなあと思います。愛隣館のみんなの支えもあって、やって来れたと思うけど、まあ一種の興奮状態のなかで、みんなが体力ギリギリのところまで頑張ってきたんや、と思います。

また、現地にやってくるボランティアは、被災された方が大変な状況にあるから、何かやらないアカンと意気込んでやってきていたのだけれど、避難所を回って被災された方と話をするなかで、逆に励まされて、たくましくなって帰っていく、というケースを何度も垣間見ました。ほんとうに厳しい状況におかれた被災者たちが、お互いに助け合いながら、力強く生活している姿から、勇気づけられていたということが多々あったと思います。

多芸 まあ、いろんな人たちがいろんな関わり方をされたと思うねん。たとえば、中西君の「支援の会だより」だって良かったし、その後、ちょっと編集する人が中西君から代わったら、もう「支援の会だより」の雰囲気がいさぐさ変わったもんな。それが良いとも悪いともよういわんけど。

棚谷 上田さん、平田さん、宮本さん、藤井さんと、ぼくの5人で、六甲デイケアセンターに行ったときに、「どこかの団体を支援するのではなくて、自分たち自身で現地事務局を作らなあかん。」と、上田さんらが言ったのね。そのとき、「そんなしんどいこと、ぼくはようせん。」と言うてた記憶がある。でも現地事務所は、数日後には活動をはじめた…。「みんなすごいな。」と、正直思っている。

ぼくは京都だけで活動させてもらったけど、自分の現場のほっとハウスも、京都一時避難の関係で、たくさんの方が手伝いに来てくれた。その人たちの多くが、今も精神障害者と関係するそれぞれの場で働いたり、活動していると聞いています。

広野 めぐみホームにも、大きな財産が残っています。ご高齢の2人の方が支援の会のお手伝いに来てくださったのですが、今でも続けて、めぐみホームの手伝いに週1回来てくださっています。お2人はめぐみホームでさまざまな障害を持つ人たちと出会い、いろんなことを教わったと、言ってくさっています。

多芸 教会関係の話なんやけど、支援活動をはじめた当初、めぐみホームの仕事が全くできなくなってしまって、昼御飯を作ることも、掃除も何もできひん状態やったんやけど、そんなめぐみホームの状態を知られた宇治教会の人たちがローテーションを組んで、応援してくれはった。それまであんまり社会的なことには積極的に取り組んでこられたとは思えない教会とっていたんやけど、今回の「支援の会」の働きにはずいぶんと協力してくれはったわ。さっき話されていた高齢者の方もその教会の人なんや。

宮本 同じ経験をして、変わる教会と変わらない教会がありますね。私の神戸では教会が避難所になっていても、終わったらまたもとの教会に戻った、というのでは悲しいですね。

仮設住宅から出るために

〈これからの神戸の街〉

司会 では最後に、支援活動の中で見えてきた、神戸のこれからはどうなるのか？そして、もしも「支援の会」が今後残せるものがあるなら、その遺産

は何でしょうか？

上田 今 全障連の兵庫支部みたいところで、問題になっているのは、仮設住宅に入った障害者を地域に返さずに、行政が施設に収容するという出来事が、何件か出てきているわけです。いったん施設にはいった障害者が施設を出ようとするのはほとんど不可能やと思う。

棚谷 京都一時避難に来ている人たちからも、「仮設住宅のなかで、やっと自分の病いを周囲に理解してもらって、人間関係ができたのに、公営住宅に移ったら、また、一からやり直しです」という声を聞きます。

矢崎 みんな、避難所から仮設に移るときも、そのたびにいちからやり直したかったので、いつになったら落ち着くのか。それは最終的には恒久的な住宅建設だけど、そのことがみんなの悩みになっています。いいかえれば、経済的な問題なのかもしれないけど。

柏木 こんどの公営住宅にはセンター（入居者の交流、集会場）はあるの？ある程度つくれるのか？地域の人間関係を生み出していくためには、その中心となるセンターが大切だと思う。

多芸 その一面はあるけど、京都の向島ではそこで住んでいる柏木さんや、そして平田君やらが、長い間かかって作ってきた人間関係というものがあと思うねん。その深い人間関係の結果として、向島の愛隣館研修センターができたと思うねん。そこに行くまでにはずいぶん長い時間がかかるんじゃないかと思う。

矢崎 実際、仮設でもふれあいセンターを作っても、そこまで顔を出す人は2～3割ぐらいしか来ない。そこに出てこない人をどうするのかは、いぜん残ってくる。

平田 長期的に考えると、仮設住宅の次をどうしたいのかがまだ見えていない。公営住宅に戻りたい人はそこでの生活設計があると思うが、それ以外の仮設に残っている人たちは今後どういう生活設計があるのか。そのための援助を、たとえば仮設の福祉相談員と一緒に進めて行くには、多くの仮設住宅をかかえているなかで、個別の相談、ニーズを担いきれないでいる。そういう時、行政が一つのアミをかぶせてやっていく流れになってしまうだろうと恐れる。

その時、現在の「支援の会兵庫」が、行政の流れに抗してやるのか、補完の働きをするのか。ぼくらは直接は言えないけど、今もボランティアとして参加しているなかで、一緒に意見を交わすことは、ぼくらがこの1

年学んだ遺産として、障害者とともに地域で生きるとは何かを、役立てることではないか。

また、ぼく自身がこの5年間向島でやってきたことは、いわば知り合っている障害者との付き合いであり、自分のところしか見えていなかったと思う。そこから今、向島ないし伏見に戻って、最近未知の、たとえばウナギの寝床のような家の奥に住んで、5年間に2～3回しか外出したことがないような障害者が見えてきたし、介助する親が亡くなった後のことは考えられない状況があることを知り、ぼく今あらためて思うのですが、こういう障害者も視野に入れたネットワークが必要なのだと、地域ネットワークができて行くなら、そういう今見えていないところにある障害者も視野に入れたものが、受け皿として必要なんじゃないか。

宮本 ということは、今の支援活動は仮設住宅が中心になっているけれど、もっと、今見えていない在宅障害者に目をむけなければならないということですか？

銅銀 地域で生きていくということは、積極的に言えば避難所でも、仮設住宅でも、そこで暮らす人たちが自分たちで地域づくりをしていくべきだ、とぼくは思うんです。

昨日もある仮設の出来事で、ボランティアで共同浴室の掃除をしながら思ったのですが、障害者やお年寄りのなかには浴室の掃除ができない人がいるけれど、それは個人の部屋でなく、共同の浴室やあるいは炊事場なんだから、同じ仮設に住む人たちが理解し、協力して、みんなで掃除すればいいのではないかと。そういう助け合いがない人間関係では、どこに移っても地域づくりなどできないのじゃないかと。そんな神戸の状況もあって、あるお年寄りも、このままの仮設暮らしが相談員やボランティアに声かけてもらえていちばん幸せだという、つぶやきになっているんです。

宮本 それは、ボランティアが仮設のお風呂掃除に行くのはおかしい、ということになりますか？仮設の規則による問題を解決していかねば、ほんとうの支援の意味がないということになりますね？

上田 掃除できない障害者は、代わってする人が必要な状況を、仮設の他の住民に知らせていくこともだいじなことじゃないかと思う。それと、たとえばヘルパーが代わって掃除することも、もう一步踏み込んで問題を考えていくことになると思う。

矢崎 ボランティアと公的ヘルパーの違いもあいまいになってしまったな。神戸市のヘルパー派遣の振興協会や、ボランティアの人材派遣センターからボランティア派遣を求められても、だれもボランティアする人間がいなければしょうがないと、これまで協力してきたけど、どこかチガウゾと思うようになってきて…。名称にこだわるわけじゃないけど、やっぱり相手をよく理解していなかったり、ほんとうの意味ではボランティアではないんじゃないか、と思えるようになってきた。こっちでは相手のことを理解したつもりでも、相手にとっては初対面となる人を送り出していたのだが…。まあ、名称なんて、障害者の側からはどうだっていいのだろうけど。

銅銀 「支援の会兵庫」でも、今後のあり方については、ボランティアも含めた共通理解と方向性を、まだ持っていないと思います。ぼく個人では、その日その日のボランティアとしての介助活動だけではダメで、障害者と一緒になって将来の生き方を見つけていく必要があると思っていますが。

前に乙訓の里で話し合っていたことは、施設に通ってきている人だけではなく、乙訓なんて小さい地域なんだから、乙訓地域の在宅障害者地図を持つこと、そして日常的に連絡を取り合っていることなどがなかったら、地震の時だけ急に行ってもほとんど何もできないのではないかと、いうことでした。今回の神戸でどうだったか、知らないのですが。

上田 いや、多分被災当時の状況から考えると、神戸の行政は一人ひとりの障害者がどこに住み、どこに避難したか、全く把握していなかったでしょう。

矢崎 9月頃避難所を回ったとき、福祉事務所の人間に聞いたが掴んでいなかったな。障害者同志でも何らかの形でグループに所属していないと、ほとんどわからないだろうし…。行政は、そんなことをしようとは思っていないんじゃないですか。ケースワーカーで実際外に出て話を聞くなんて、ほとんどできていない。まあ、あの状況では無理だろうけど。

平田 神戸の行政は、障害者手帳の発行状況からでも、やろうと思えばやれたのに、単にやらなかっただけだ。

矢崎 一方で障害者にも、障害者が受けられるいろんな権利も知らない人が多かったし、役所の窓口へ行くこともしないし、ぼくらがアドバイスしていっしょに行動したりして。

上田 さらに手帳とってない障害者もいっぱいいるし、役所の窓口も障害者に対して満足いくように話をしてくれない。

日頃障害者につきあう

〈京都のネットワークを求めて〉

棚谷 精神障害者の場合、たとえば障害者手帳を取っている人は約500人余り。手帳もない、ヘルパーも入ってない、作業所やいろいろなグループにも入ってない人が多数派だと思うんです。

神戸を京都に置き換えた時、自分自身のふだんの活動について、反省を迫られた気がします。ぼくは、病院や作業所で人間関係を作ることを中心に考えてきた。でも、地震の時だけでなく、ほんとうに必要な人間関係・支えは「地域」なんだって。だから病院の面会だけしてたらいいんじゃないって。

柏木 ぼくは、「障害」者運動に今まで関わってきたが、それはごくごく一部でしかなかったのではないか。ある時、ぼくの車椅子を見て「どこにそれ売っているんですか？私の子どもも障害を持っています。」と尋ねられたことがある。まだまだ行政がタッチしていない障害者はたくさんいる。

だから、地域を変えていくということは、障害者だけでなく、健常者も含めて必要だ。しかしながら、健常者はほとんど変わっていない。向島でもそうだが、昼間はみんな働きにいて、帰ってくるのは夜。たくさん障害者が地域に住んでいても、このような状況では出会うことはほとんどない。だから、一緒になって変えていくのは大変難しいと思う。

多芸 事務局と神戸現地で働いてくれていたボランティアの人たちとの間には、多少の意識のずれというか、考え方の違いもあったように思うんやけど。我々の基本姿勢というか、根本的な点についてはみんな同じ意識をもってやってきたし、具体的な個々のことについても、同じ方向性を持ち続けることができたように思っているねん。それは、もともとぼくたちが同じものを持っていたんちがうやろか。事務局会議では被災地での活動にあんまり参加できなかった中西君や銅銀さんや水谷さんが、経験に基づいていろんな意見を述べてくださったりして、みんなに方向性を確認

させてくれはったのもよかったと思っているんや。

そして最初に、平田君に現地総責任者になってほしいとみんなが頼んだときに、平田君が引き受けてくれたことは大きなことやったと思う。そうでなかったら、なかなか続けてくることはできひんかったと思うねん。それから、支援活動を続けていくのに、みんなができることを役割分担して担ってくれたことも、活動がうまくいったことやと思う。めぐみホームは活動の本部を担ったけれど、棚谷君は京都での一時避難のコーディネーター役を引き受けてくれたし、愛隣館はその避難場所の確保につとめてくれたし、市民センターはボランティアの連絡役とファックスの発信というしんどいことを担ってくれはったし、中西君は「支援の会だより」の編集を続けてくれはったし、みんなが自分のできることを分担し合えたのがよかったなあ、と思っている。

棚谷 ぼくは、京都事務局のお金の出し方については、びっくりした。「ああ、お金って、こんな豊かな使い方ができるのか!」って感動した。信頼して「はい、必要なお金は出します。」って言われたとき、じっさい一時避難でもいろんな工夫を自由にさせてもらえた場面がいくつもありました。

多芸 それも元とをただせば、事務局会議において、緊急を要するお金については事務局を信頼してまかせてくださったことで、緊急を要することにも迅速に支援活動ができたように思うんやけど、こういう支援活動には必要なことやったと思うんや。

平田 日頃それぞれの場でやっていることを認め合い、つながりがあったから支援活動が始められた。ぼくと多芸さんとの間でも地震の前はそんなに日常的に付き合いがあったわけではないし、利用者は行き来してたけど。銅銀さんかってそうですし、それぞれがそれぞれの場所でやってることを理解し、認め合い、尊敬し合っていたものが、ひとつになってやり始められたからこううまくいったので、これからはどうなるのか。ぼくは終わりがありそうで無いようなつながりが、このまま終わってしまうと淋しくなるな。「支援の会」が無くなったら、これからまた以前と同じようになるのかどうか、財産として何か残すのか。

銅銀 僕は京都事務局会議では、方向性を持ってやれてきたこと。今後もだれかがやろうといったときは、みんながすっとやれそうな気がする。反面地道なことは不得意な気がするし、その点は自分たちに厳しい目を持ったほうがいいのじゃないか。

それに話はちがいますが、障害者が地域で生きていくということと、家族関係の問題とは別個にしないと。母子分離だけなら、あえて言えば、障害者が施設に入れば実現するのだから、親子関係を補完するようなことが、いろんな人々とつながる地域づくりではないと思う。

多芸 かたい話になってしまうけど、これはみんなが言っていることやけど、町の崩壊、地域の崩壊の中で、いちばん弱い立場の人たちがいちばんしんどい思いをしたんやと思う。今、仮設に分散させられて、地域がつぶされて、これから改めて、いちから地域をつくっていかねければならなくなっただんやと思うんねん。あらたに人間関係を築いていくのはほんとうに大変やと思う。このことは、ぼくたちにも同じことが問われているように思うねん。この京都で地域を作っていくことがたいせつなんやと思う。

平田 以前にネットワークを作ったことがあったけど、成功せずに、解散したのだったが（あの時の切手代くださいよ。）今回は何か残せるものがあると思う。それをみんなの共有のものとして、あらたなネットワークができないだろうか。

銅銀 ぼく自身は、素早い即応力と、同時に根気良い粘り強さを、「支援の会」の活動から学んだつもりでだいじにしたい。今後、ひとつには伏見を中心に障害者のネットワークみたいなことができれば。

中西 地域に根を下ろしたネットワークということであれば、京都の地においてもそれが必要なこと。未だ十分でないことは、「支援の会」のみんなが思っていることと思う。これも事務局会議に関わった者が共有して持っている認識だろう。最初に被災地に入った時から、我々は在宅の被災された障害者に支援の関心を持ったし、神戸の行政をはじめそのようなネットワークがないから、現地に活動拠点を置いて支援活動を続けたのだった。また、いずれは被災された地域の方がたが支援活動を維持されるように、京都の我われとしては引き継いでいった。

これらのなかには、ひとつの基本的なスタンスがずっとある。そして約2年間の活動を経て、そこから得た新しい課題が、京都の地域に根を下ろしたネットワークだ。しかし、今ここにいる面々を見ると、各々の個人はふだんから関わっている活動が個別にあり、また賛同団体にしても日常の現場がある。震災という強いインパクトでは即応力を持って動けたが、さ

て、これから我々の住むこの地域でほんとうにネットワークを作ろうとすると、「支援の会」だけでは大変な労力が必要だ。見えてきた課題を受けとめきれないという、我われ自身の力量もまた知らなければならない。

私としては、せめて「支援の会」を通じてできたつながりを大切に、点と点はこれからも結んでおきたいという気持ちだ。

司会

まだ明確な結論まではいきませんでした。次の機会を期待して、きょうはこの辺りで終わらしましょう。ごくろうさまでした。

